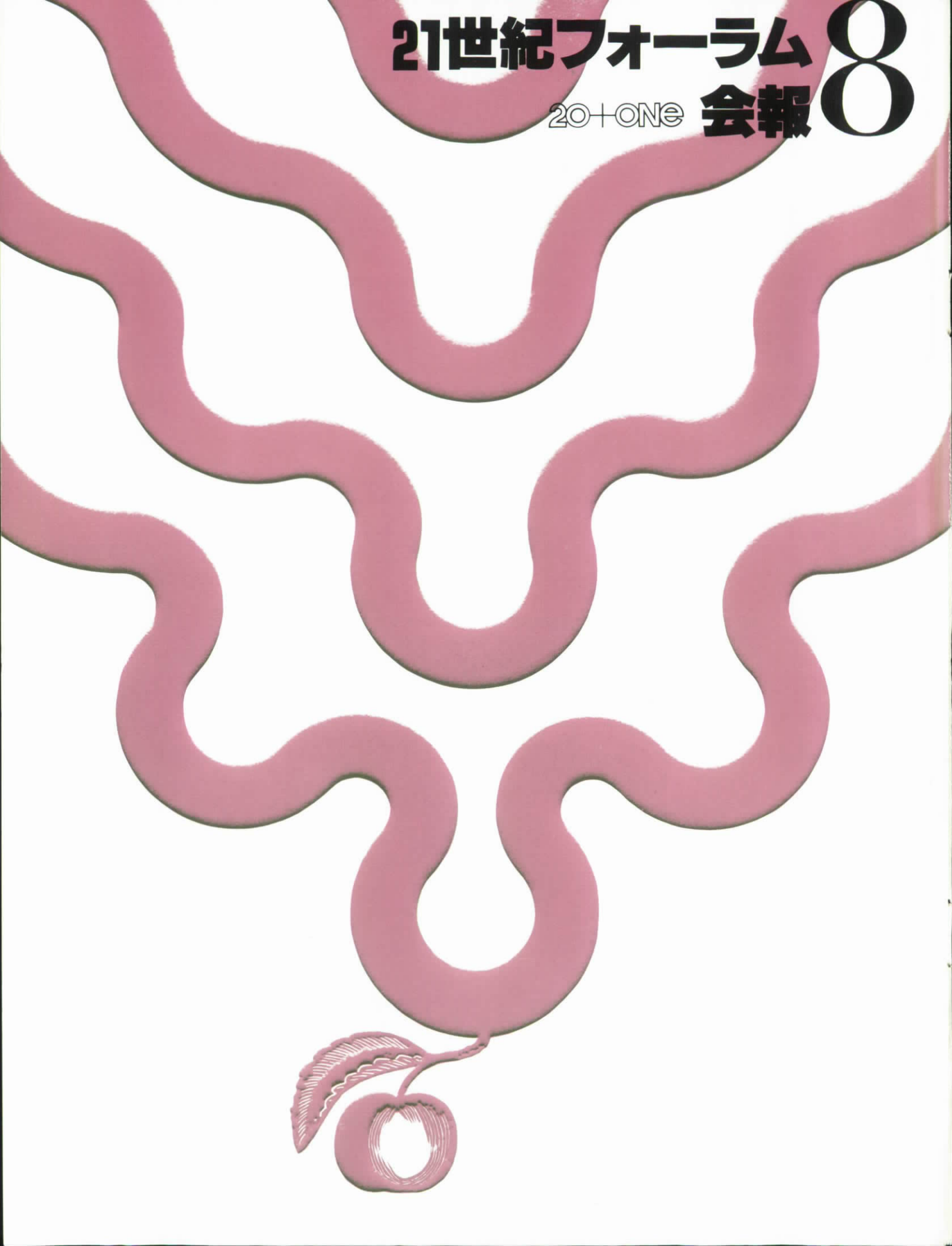
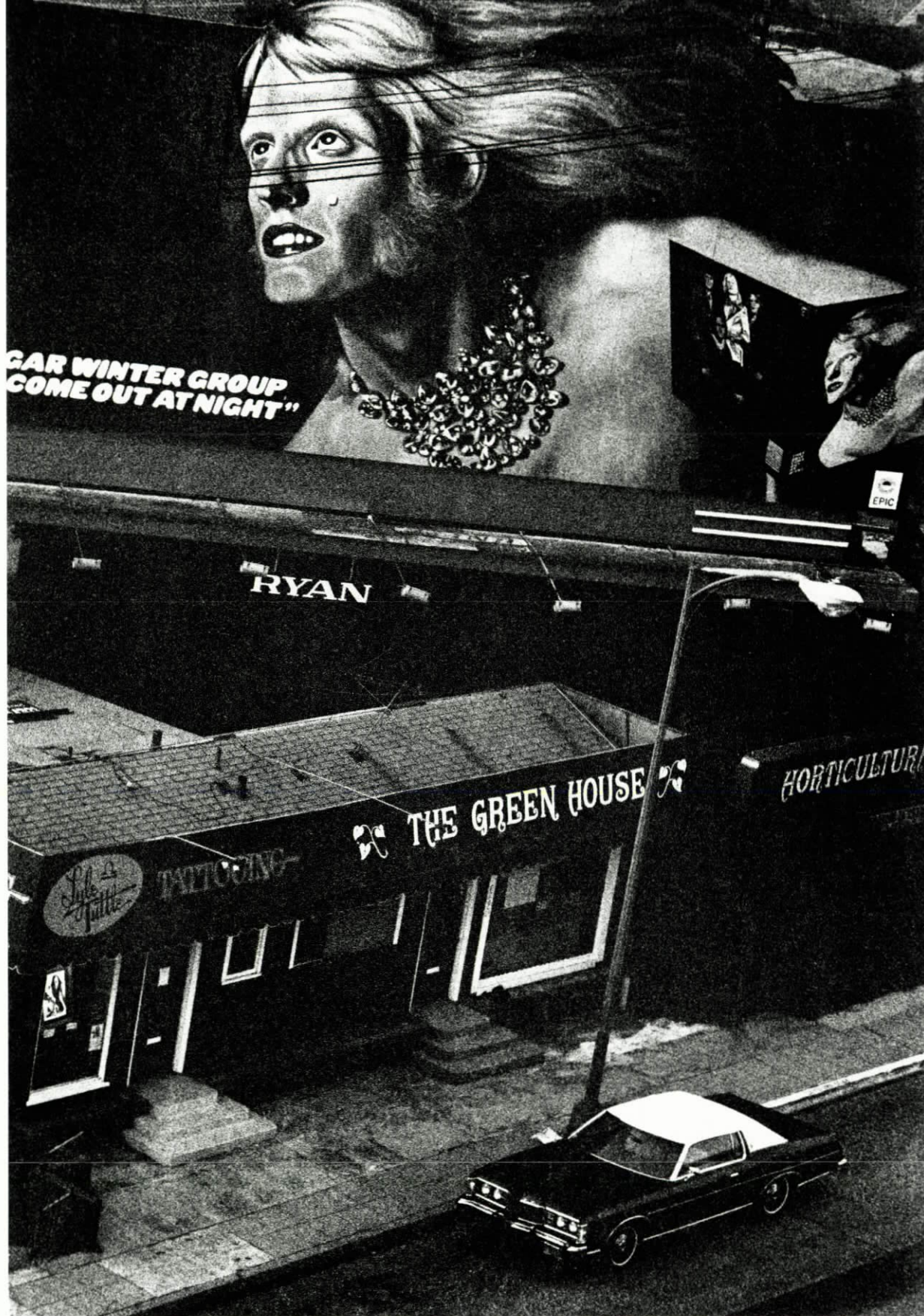


# 21世紀フォーラム 8

20+ONE 会報





A POINT OF VIEW

# ストリート

吉田大朋

人	材	養	成	に
思	う	木	田	宏
(国立教育研究所所長・大来佐武郎部会)				

人材養成が経済政策との関連で大きく取り上げられるようになったのは、所得倍増計画の頃からであろう。労働力にゆとりがあるという事態は一変し、人材養成と人材配置を計画に加えなければ、二次産業の振興を中核とした経済発展計画は成り立たないということになった。計画期間の十年間に、中堅技術者四万人、上級技術者一七万人の増員が必要といわれて、工業高校や理工系大学の拡充が急がれ、資金配分も重点的に行われた。

この時以来、人材養成と諸施策の伸長は相俟って進められるべきことという認識は深まり、経済、社会、外交等の諸施策と関連して、「人造り」が論ぜられるようになった。しかし、その後の経緯を見るに、人材の養成と諸施策の関連は、必ずしも正しく理解されているとは思われない。

人造りが経済計画の一環として取り上げられ、措置されたためであろうか。人造りに資金を投入すれば、人造りができるといった発想が流れているようである。その最も端的な政治的要請が、無医村解消策として打出された、短兵急な医科大学、歯科大学の新增設であった。土地を確保し、施設と設備に金を投入すれば、自ずから医科大学は出来、医師は養成されてくると言わんばかりの勢いであった。昨今、医学歯学の大学で金権体質が問題とされているが、その基本に、金があれば

ば人造りができるという逆立ちした発想が働いていなかったとは言えないであろう。

これと同じ心配が昨今の人造り外交について感じられる。人造り外交という資金援助をすれば、それによって当該国の人造りが進み、わが国に対する理解が深まるであろうというかのごとき論議が聞こえてくる。しかし金があれば教育が進み、友情が深まってくるというわけにならないことは、個人的にも国家的にも明らかであるばかりでなく、従来の国際教育援助においても実証済みのことである。

人造りに最も基本となるべきものは人である。次に必要なものは時間である。金はこの人と時間に対して投ぜられるのでなければならぬ。立派な教師が求められなければ、学校や大学は育たない。少なくとも、十年以上の歳月が費やされなければ、人が育つことにはならない。人造り外交、文化外交においても、このことに変わりはあるまい。その外交を支えるものは人でなければならず、友情を育てるには時が必要だからである。それゆえ、人材養成の施策は、何よりもまず主体的な活動を展開していける人を中心にして資金を投入し、時を仮してその成果の現われるのを俟たなければならぬ。他の施策と関連づける場合にも、この基本を見失ってはならないと思うのである。

# 目次

人材養成に思う

木田 宏 1

## ●特集●文化交流

〈座談会〉

### 文化交流の戦略

ダットサンから「坂の上の雲」翻訳計画まで

北原秀雄  
呉ール・J・バロン

4

〈司会〉  
加藤秀俊

日本をどう説明するか

本間長世 14

ケチャ体験——原初的祭りと科学技術  
山城祥二

山城祥二 18

文化の伝播——説話交流の条件

松原秀一 22

仏教と文化交流——聖天信仰をめぐる

前田専學 27

文化交流・私感

村上兵衛 32

#### フォーラムズフォーラム

私の近況

石炭とのかかわりあい

稲葉秀三

「ダーク元年」を三田山上に思う  
的をしぼってマイペースで

喜 早 哲  
五代利矢子

コンディションを保つことが大事

中田喜子

パレスチナ問題の本質と解決の方向

大来佐武郎部会

社会変革と労働組合

大来佐武郎部会

中国および中国人

松本重治部会

スペース・コロニーと地球

加藤芳郎部会

45

40

38

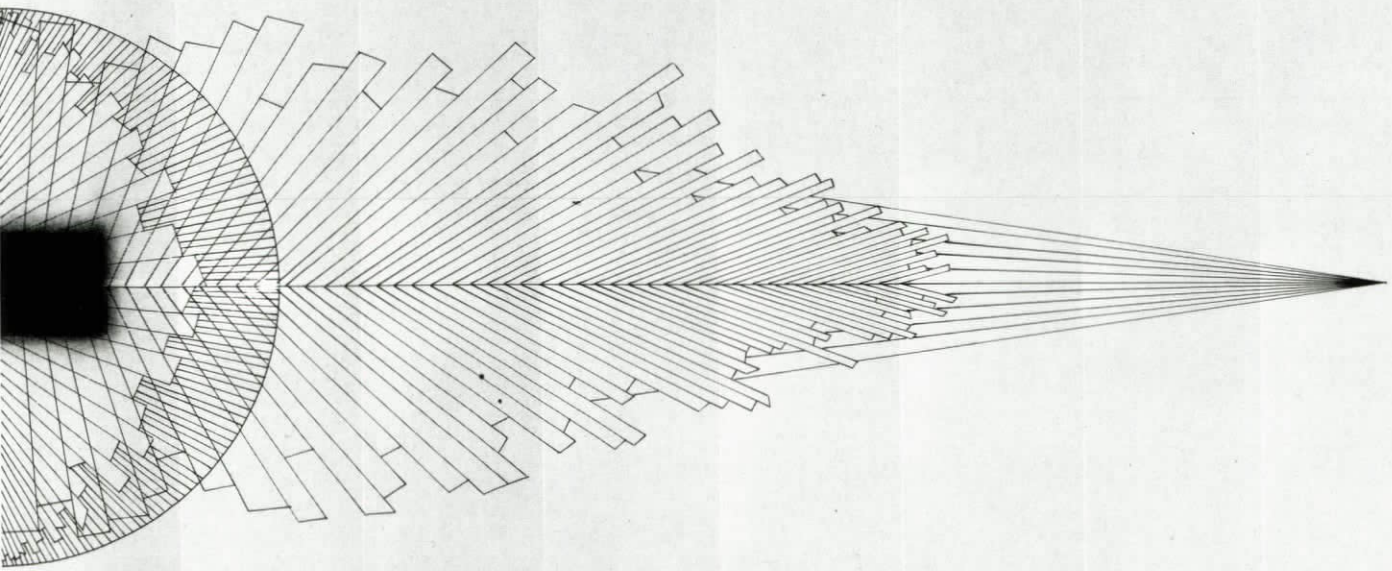
32

27

22

18

14



追悼 宮本常一先生

自由にうごきまわる旅人

加藤秀俊 46

父没スレバツノ志ヲ見ル

米山俊直 49

郷土大学のすすめ

東和町郷土大学  
開校式記念講演

宮本常一 51

カラーグラフィア

ロボット

文/日下公人

(ア・ポイント・オブ・ビュー)

ストリート

吉田大朋/深瀬昌久

〈討論〉

一九七三年と一九八五年

石油をめぐる国際情勢

〈報告〉

富舘孝夫

◆ 村田良平

笠井章弘

63

〈特別寄稿〉

砂漠の国からの便り

石油、原子力、安全保障とアラブの人々

今井隆吉

56

新関西論/最終回

上方娛樂

〈対談〉

桂 米朝

76

小松左京

エネルギー家庭学—生活様式とエネルギー消費

日本エネルギー経済研究所

72

ローカル・エネルギー—エネルギー「地方の時代」の模索

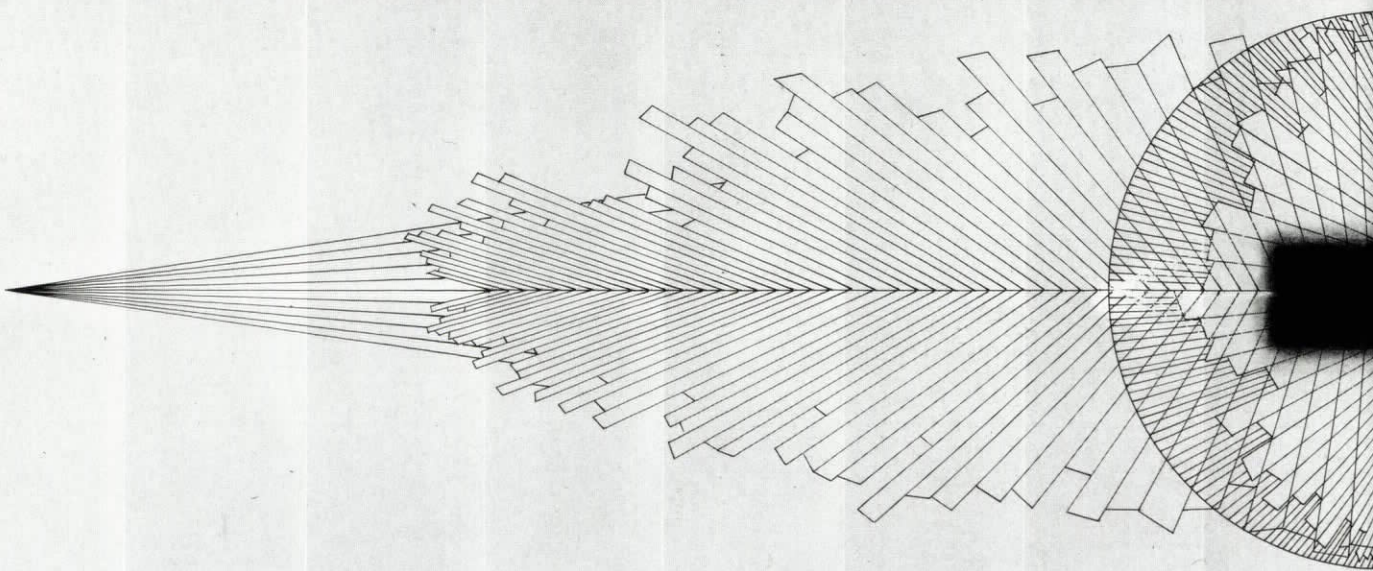
政策科学研究所

74

21世紀フォーラム部会メンバー

84

●表紙 永井一正 ●アートディレクション 大橋成夫 ●目次・本文カット 高見澤忠勝



# 特集 文化交流

●座談会

## 文化交流の戦略

——ダットサンから「坂の上の雲」翻訳計画まで——



きたはら ひでお  
**北原 秀雄**

(前駐仏大使・西武百貨店顧問・大来佐武郎部会)



ろーるじーばろん  
**Rool J. Baron**

(上智大学経済学部教授・大来佐武郎部会)



かとう ひでとし  
**加藤 秀俊**

(学習院大学法学部教授・加藤秀俊部会)

### さまざまな交流のレベル

加藤 編集部からの依頼は「文化交流の戦略」というようなことですが、文化交流についてはこれまでにもさまざまな提案、問題の指摘が行われています。この三人の話し合いで何らか新しい視点を打ち出すことができれば——というような気持ちで話を進めてまいりたいと思います。

最初、話題の緒というような意味で二人から、いま行われている文化交流について何でも結構ですから問題意識をお聞かせ願えればと思います。北原さんはフランスに長くおられたわけですが……。北原 「戦略」なんていわれるとちよつとおつかない感じですが、パブリックな立場、民間の立場、両方に身をおいた経験でいいますと、いま日本では民間主導型でいろいろな文化交流が行われています

ね。百貨店、新聞社、企業など枚挙に暇ないくらいですがそれはそれで大変結構なことだと思えます。パブリックな場では交流基金などで行われているものが民間主導型のそれに近く、ある意味での特徴があるかと思えます。私自身の好みからいえば、ナシヨナリズムに立った文化交流というのはあまり好きじゃありませんが、いずれにせよ文化交流の究極的な目標というのは、人間

の相互理解といいますが、個人を通して世界中の理解度をお互いに高めていく——そうでなければ、単なるお国自慢になつたり企業の宣伝戦になつてしまうというふうな感想をまず最初に申し上げたいと思います。

**パロン** 北原さんのご指摘はたいへん興味があります。と同時に、少し違う意見になることをまずお許しいただきたいのですが、私の考えては、文化というのはいま北原さんがおっしゃった個人の問題というより、グループの問題という感じがします。「国」も一つのグループには違いありませんが、日本と違つて、たとえば私の故郷、ベルギーでは、ベルギー人というより、ワロン人とかそういう認められ方ですね。同様に「ドイツの文化」というのは意味がなくて、「バイエルの文化」とか、「プロシヤの文化」という認められ方ですね。

日本の場合は「国」というグループはある程度文化的な意味があります。しかし、たとえばドイツではそれはただかかビスマルク以来のことにすぎないのであつて、その意味ではどのレベルでの交流かというのが一つの問題でしょうね。

同じ例はビジネスの場でもいえることです。たとえばビジネスの場での「イメージ」形成には三つのレベルがあつて、一つは製品のイメージ、二つは企業のイメージ、もう一つは国のイメージですね。国のイメージでは、たとえばフランスでは、北原さんはフランス大使をされてい

たからよくお判りと思いますが、中国のイメージは高いが日本は低い。そこで何らかの活動が必要になります。

コーポレート・イメージでみれば日本の企業はたとえば「三菱」あるいは「日立」とかいうふうには「三菱」あるいは「日立」を強く出す。しかし、欧米ではそれは薄くてたとえばフィリップスはよく知られている会社ですが、そのコーポレート・イメージは製品に直接に結びついてくる。逆に日本の企業はプロダクツ・イメージはあまり重視しない。

こういうレベルの違うもの同士を一括して「交流」を論ずるところに一つの問題点というか難しさがあるうえに、もう一つ、これも私の経験でいえば、言葉の問題があります。つまり同じ言葉を使いながら意味するところがまったく違つた。たとえば「レイバー・ユニオン」は日本語では「労働組合」だが、日本の労働組合は違いますね。日本のそれは「レイバー・オーガナイゼーション」です。同様なことが「政府」にも「企業」にもいえる。その辺にも「交流」を考へるうえで大きな陥し穴があるように思います。

### 日本語を学べば世界の名著が読める——

**加藤** 最初から大きな問題が出されたようですが、パロンさんがいま指摘されたような「言葉」の問題もあつて、日本では文化交流に努力する割にはなかなか成果が上がらない——というような感想、

苛立ちを私など感ずるときがあるのですが、北原さんはどうお考えですか。

**北原** それはね、私は少しゆるやかに見てやる必要があると思うのですね。というのは、ヨーロッパ人というのは自分たちの世界観の上に立つた国家経営方式を考え、社会の運営方式を考え、ビジネスの運営方式を考える。自分たちはこう考へる、それを受け付けないなら、それは即政治の問題だ、とこうなるわけです。そこから一歩たりとも出ない。これは私、四十年交渉してみんなそうです。

**パロン** 苦勞された……(笑い)。

**北原** ところが日本はそうじゃない。みんながアクセプトし得る方法があればそれで結構じゃないか、妥協もしましょうと。これが日本の行き方なんです。それは限度が過ぎると批判されるべきは当然ですが、日本なりのコンセンサス方式なんです。文化交流の場合でもそうで、日本人くらしい外国の文化吸収に熱心な国民はいない。私はアメリカの日本占領は見方によつては一つの典型的な文化交流のパターンだと思つてます。戦後アメリカのニュー・ライフを日本はひじょうに熱心に勉強した。日本のエリートはほとんどアメリカに招待されて勉強した。その結果どうかというと、いまや日本はビジネスのうえでアメリカよりずっとよくなつちやうだ。

**加藤** 勉強しすぎた(笑い)。

**パロン** そうそう。

**北原** やはりそこが日本の一つの強味で

もあり、民族の特質だと思えますね。文化交流というような場ではこうした民族の特質が大きく出てくる。だから、何でも見てやろう、何でもしてやろうという日本流の交流というのは、一面反省すべき点もありますが、私はそれをあまり批判する気にはなれないのです。

**加藤** それはバロンさんがおっしゃったように、日本人は「日本人」ということで一般化できる数少ない例外的な国の一つ、といった指摘と共通するものかもしれないですね。大ていの国はその国の中にいくつかの文化ユニットが複雑に存在している。日本でももちろん薩摩の言葉と津軽の言葉は違っているけれども、NHKのおかげ(?)で「日本文化」と一体化している。そういう国は少ないでしょうね。

それから北原さんのいまのご指摘、私も同感ですが、以前にドナルド・キーンさんが、日本語を学ぶと大変役に立つ、プラトン、アリストテレスから、孔子、毛沢東、スターリン、サルトル、ありとあらゆる世界の名著が日本語で読める。日本文化にはそういう意味での多様性というか、他に対する好奇心がとりわけ強いということがいえると思えます。

しかし、他面で、吸収することに熱心だが、外に対する発信能力は弱い、という指摘も行われますね。どうですか、この点について……。

## つき合いの距離と、馳走の関係

**バロン** これは一番弱い点ですね。日本人は自分について「説明」できない。「日本は別である」とか「ユニークである」というだけでは実は説明にならないのですが……なぜですか、これは。

**加藤** 日本語も含めて言葉が下手だという指摘がありますね。

**バロン** いやいや、そうではないと思います。私の考えでは、日本人は「ハラ」ではわかってるんです。しかし「頭」ではそのことについての関心が薄い。

**北原** 「われ思う、故にわれあり」というのはパスカルの有名な言葉ですが、そのパスカルと同国人のフランス人と話しているとき、なぜこうまで頑張らねばならぬのだろうと思うほど自分の意見にこだわりますね。

**バロン** アハハハハ。

**北原** 日本の場合はよほど立派なことではないと自分の意見として言わない。だからこそコンセンサス方式が成立するんだと思うけれど、フランス人ではまずそれは成立しない。

しかし、積極的に自分を主張しないこと——たしかに他国から批判されるだけの理由があるときもあります——が果たして「悪徳」なのか「美德」なのか。われわれはむしろそれは悪徳と教えられてきた世代ですが、どうも日本という「自己の主張」というのには、ただ己のためにするというだけではなく、誰かのためにする——仲間のためにするとか、自分の会社のためにする——という主張が

多い。

人間というのは「人の間」と書く、要するに日本の人間関係は人との関連においてあるのだという説がありますが、それもやはりいつてみれば民族の特性にかかわることじゃないかと思うのです。

**バロン** それはわかります。しかししひじょうに危険な特徴だとも思います。鎖国時代ならともかく、その逆の方向にますます世界が行きつつある現在では、それは危険な徴候じゃないですか。

——つ例をあげると、日本では一億の人口に対し海外からの人間は七〇万人です。そのうち六〇万人は戦前からの歴史的背景のある在日朝鮮人ですね。外国人らしい外国人は一〇万人です。スイスでは三分の一が外国人でしょう。ドイツでも何百万人という外国人がいる。ベルギーでも私の姉の住んでいる所では半分が外国人です。

**北原** おっしゃる点はその通りです。最近の例ではベトナム難民の受入れ問題などで、たしかに日本人の行動はあまり立派ではなかった。それはこれまで日本がそういう問題を避けて来れたからということも大きい理由でしょうね。

**加藤** 外人恐怖症、ゼノフォビアというのがありますね。

**バロン** でも先生、これはゼノフォビアですか？ 私は西洋人としてゼノフォビアは感じませんね。ここにグループがあると思います。そこにストレンジジャーがある。それを追い出そうとするのがゼ



ノフォービアですね。日本はグループがあつて、ストレンジヤーがきても、そのストレンジヤーは入れない。固くて入れないんです。たとえば私は日本に住んで三十二年間になります。日本人には大いにホスピタリティもあります。しかし、私は日本人のグループには入れない。これはゼノフォービアじゃないですね。

**加藤** しかし、どうでしょう。文化はどんどん入ってくる。ハンバーガーもどんどん入ってくる。

**パロン** そうそう(笑い)。

**加藤** ライフスタイルの面でも、それから人の面でもあるところまではほとんど受け入れる。つまり「距離感」が大事なんで、これ以上近づけると危ない、だから西洋人にはご馳走するんです(笑い)。私の経験では南太平洋の島がひじょうにホスピタブルですね。どこでも大歓迎、しかし長くいるとダメなんです。つき合ひの距離とご馳走の関連は密接な関係がありますね(笑い)。

**パロン** 中に入れるほうがもつとご馳走だと思つてますがね(笑い)。

### 平和憲法はどうみられているか

**加藤** 日本人の特質といった話はまだあると思いますが、次の話題に移らせていただきます……日本のイメージということですね。さきほど、イメージを三つのレベルに分けていただきましたが、主としてナショナル・イメージに関わるとこ

ろで、日本という国を外国はどう受けとっているかということについて……。

**パロン** 海外では、日本のイメージと日本人のイメージは区別しています。ヨーロッパでは日本に対するイメージはほとんどありません。関係ない国という感じですね。日本人というもののイメージはあつて、日本人というもののイメージはあつて、ヨーロッパの場合はピエール・ロテイから、米国の場合はラフカディオ・ハーンからでしょうね。ピエール・ロテイの前は Petitjean、すなわち黄禍論。これは日本人に対してです。

最近イギリスで世論調査があつて、そのなかにこういう質問がありました。「ソ連がある国を攻撃した場合、それぞれの国はどういう態度をとるか」。そこにフランス、ドイツ、米国、トルコ、南アフリカなど十七の国のリストがあつて、日本も入っていたんです。

その場合三つの可能性がある。一つは軍隊を送る、次が物資を送る、もう一つは知らん顔。「軍隊を送る」のいちばん最後

が日本で、知らん顔するトップが日本。**北原** 海外派兵ができないからですね。

**パロン** 残念ですけど、こういう反応です。

**北原** 日本は戦後、平和憲法のもとに真面目にやってきた。平和憲法は、「世界の国の公正と信義を信頼して、軍事力を持たないということなわけです。

世界の現実をみると、食糧もない、生活もできない国が、外国から援助までしてもらつて武器を集めている。しかしこ

ういうことはおかしい。日本はせつかく三十五年間平和憲法でやってきたんだから、こういう国もあるぞということもみせてやらなくてはいいかん。でもやはりアメリカがほんとうに守ってくれるかどうか心配なわけです。しかしとにかく守つてもらふということ、平和憲法のもとでやっていくほうがいいのではないかと。こういう意見の人が日本にはだいぶいるわけですね。

ただ、平和憲法の道は、けつして楽ではない。対外折衝の場合、侮辱されることが多いわけです。「いったい日本は何を考えているのか」。しかもそれを言うのは、大国の責任ある人ではなくて、われわれからみたら安全保障上、あまり頼りにならないような国の代表です。平和憲法のもとで外交官は、ナショナル・プライドを傷つけられ、ナショナル・センチテイビティを傷つけられることが実に多いのです。それにもかかわらず、日本としては忍んでやっている。軍備に金を使わず、余つた金は後進国援助に回わしましょうと。アジアにおける安定勢力としての日本のビヘイビアに対して、アジアの人は悪口もいいますが、どうだと訊けば、みんな認めると思います。

**パロン** さんからみてどうですか。外国人からみした場合、平和憲法は滑稽で無意味にみえるのか。それとも、日本人は核兵器を持たなければ意味がないことをよく知つていて、防衛に金を使わない口実に、平和憲法を振りかざしていると見え

るのか。あるいは、最近防衛力をもっと増やせとおっしゃるけれど、本心では、かつてのような軍事大国になると大問題だと思っていて、ある程度やれというのが本音なのか。欧米諸国の一般的な気持ちは……。

**パロン** 一般のヨーロッパ人には、平和憲法は理解できません。日本と米国の問題で、ヨーロッパとは関係ないと思っ

**加藤** 知らない人が大部分でしょう。**パロン** そうです。教えてもまったく信用しません。

**加藤** 防衛の問題について話が出ましたが、日本のイメージは必ずしも一つだけではないと思うんです。国や立場によって当然違ってきます。東南アジアの人は日本が軍事力を持つことに対して、再び戦争を起こして、自分たちを占領するのとかという恐怖感につながるでしょうね。同じ情報が世界に向けて共通に出されても、その情報によってつくられるイメージは二重、三重になる。

**パロン** たくさんのイメージがあることはいいんじゃないですか。

**加藤** あまり一つになつては困りますね。まだまだ問題はあると思いますが、文化交流の前提といえますか、総論的な部分はこれぐらいにして、少し各論にわたつて、交流の具体的な方途、今後の戦略といったことを後段で考えてみたいと思います。

### フランスのジャパン・フアンドの場合

**加藤** 昨年、私どもが調査をしましたところ、自動車、テレビなどは輸入品が1%か2%なんです。ところが、書物・レコード、映画……そういうものについては輸入がひじょうに多くて、輸出は少ない。自動車やテレビなど、製品については輸出国ですが、広い意味での情報については輸入国です。これはやはり輸出しなければいけないものだと思いますが、その方法はないものではないですか。

**北原** いわゆる日本の伝統文化は、ほかの国からみたら異質なものですし、しかも島国ですから、つねに影響を与えるところにはいきません。しかし戦後、ジャパニーズ・ウェイ・オブ・ライフ——畳とか障子——という面ではずいぶん欧米に出ていますね。規模は小さいけれども、分に応じたアウト・ゴーイングがなされている面もあるのではないかと思います。

たとえば、近頃パリのファッションは、大げさに言えば、日本がなければ成り立たないという面もある。いい例が京都の西陣織りです。ある西陣織りの店がたいへんモダンな日本風の模様をつくり、最初はピエール・カルダンが全部買い占めました。いまではどこの店へ行っても、「あ、これは日本だ」というものが、必ず二つ、三つみられます。日本もクリエイティブな面が十分あると思いますね。

**加藤** 文化輸出ですね。

**北原** いちばん驚くのは日本のめしです。味噌、醤油、味噌、味噌なんて、国際性が無いものだと確信していたんですが、とにかくニューヨークは、日本の町みたくになっちゃった。パリだけは、日本人と特殊なフランス人だけだろうと思っただけで、鉄板焼屋にはじまって、ラーメン屋、うどん屋、すし屋……。値段が高いのに盛況ですな。

だから、これまで機会がなかったというだけで、日本の生活様式も、現代の世界でユニヴァーサリティを持てる可能性があると思います。

**パロン** しかしそれらは珍しい食べ物に対する好奇心でしょう。これと同様に、たとえばトヨタの製品が日本のイメージになつていくかどうか。多分、ほとんど無関係じゃないかと思えますけれどもね。**加藤** たとえば音楽や文学はどうなのか。日本の音楽がどれだけ世界に知られているか。あるいは日本の文学ですね。せいぜい、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫が少し読まれている程度……。

**北原** 文学のアウト・ゴーイングを促すには、三つの要素があると思います。一つは翻訳能力です。日本語が西欧の言語と同じ系統の言語だったら、日本の文学は、もっと海外で読まれていると思います。

フランスでは、ジャパン・フアンドをつくつて大いに翻訳をやったんです。しかし、日本人がこれならおもしろいだろう

うと考えてやってもなかなか成功しない。読んでみたらおもしろい、ひとつフランス語に翻訳してみよう——こういう牽引力がもつとあって然るべきなんです。しかし残念ながら、外国では日本研究者の数が少ないですから牽引力が出てこない。結局ヨーロッパのほうで翻訳するところまでいかないから、日本のほうで翻訳してやってみよう、なるべく出そうという努力をやつと始めたわけです。

フランスの場合、ジャパン・フアンドもありますから、そこに日本研究者が集まっていますので、日本で出版された本のなかから、翻訳するものを選択していただいて、それに日本政府が金を出すわけです。これはもつとやるべきだと思えます。

### 「坂の上の雲」翻訳計画

加藤 私はそれについて、ひとつコメントがあるんです。日本紹介という文、学でも評論でも、アカデミックなものか、あるいはハイブローなものか選ばれる可能性が多い。けれども、司馬遼太郎さんの作品は、『將軍』よりも説得力があると思うのです。『坂の上の雲』を翻訳したら、ヨーロッパでもアメリカでも売れると思います……。

北原 『坂の上の雲』なんていいですね。加藤 つまり、いままでの文化交流は学者でしょう。むしろ重視すべきは大衆のレベルでの文化交流ですね。それには大

衆小説・大衆文学・大衆音楽。松本清張さんの初期の作品などは、エラリー・クイーン、アガサ・クリステイ……とまではいかないにしても、日本の推理小説の第一級のものとして読まれると思うんです。しかし、松本さんや司馬さんの作品が翻訳されたという話は聞かない。それというの、政府がお金を出して翻訳しようという、大衆小説は除外されてしまふ。

北原 おっしゃる通りです。やはり委員の選び方に配慮しなければいけませんね。加藤 私はかねてから、ある種のオプティミズムを持っていて、フランス人が飲んでおいしいものは、日本人にとってもおいしいし、中国人もおいしいに違いないし、メキシコ人もまずいとは言わないだろうと思うんです。音楽にしても、ドイツ人が聴いて愉しいものは、ほかの人にとっても楽しいだろう。そのへんのところは、「人間みな同じだ」という感じがします。

だからアガサ・クリステイの小説は、イギリスはもちろん、アメリカ人にとっても、われわれにとってもおもしろい。とすると、日本人がおいしいと思ってい

るものは、世界普遍的においしいものであるに違いないし、日本人がおもしろいと思っ

ね。ユニヴァーサル・ヴァリユー……。もちろん川端は、西洋のエリート主義者たちは好むでしょうが、日本の伝統文化に関心があるからです。現在では、もう少しポピュラーな：The man of the Street。(大衆的)の思想が必要ではないですか。

加藤 フランスの小説でも、バルザックはそれほど大衆的ではないんです、フランスでも、日本でも。しかしアレクサン

ドル・デュマの小説は……。パロン これはすごいです。加藤 フランスではみんな知っているし、日本でも誰でも知っている。川端先生だと、外国で売れても五千部とか、三千部だけれども、司馬さんの作品は百万部売れるだろう。

パロン そういうケースは、ぜんぜんありませんか。加藤 ありませんね。いままで日本はそれを実験したことはないと思います。

### 世界に類がない日本企業の海外PR

北原 この間『朝日新聞』に「歌舞伎と新幹線」というコラムが載っていました。どうも日本政府、交通公社、日航などで日本の紹介映画をつくと、歌舞伎と新幹線だというわけです。ところが、歌舞伎は初めてみたって分かりつこない。変わったものがあるなという程度。新幹線は、現代のイメージには違いないが、もつと遅い汽車だってある。

加藤 そう、そう(笑)。

北原 きれいな事だけみせても、日本のイメージづくりにはならない。経済摩擦とか、開発途上国とどうやっていくのかという悩み、サラリーマンがどんな生活をしているかという現実を素直にみせなければ、日本紹介にはならないと。ほんとうにその通りだと思えますね。

映画というところ、工場が出てきて、朝礼で歌をうたって、午後体操をやって……そんなことはみんな知っているんですけどね。

北原 JETROの映画は役に立っていると思えますよ。

北原 どんな映画ですか。

北原 「課長」という映画です。

加藤 わりあい有名ですね。課長さんの

一日の生活を描いたものです。

北原 説明はあまりしないで、朝から晩までの行動をみせるんです。

それから、ニューヨークのジャパン・ソサエティの「ビジネス・ネゴシエーション」ですね。

加藤 欧米のみならず、世界のさまざまな国、文化圏で評判のよかったものを、

北原さんのような方にノミネットしていただく、つくった側にフィードバックできると思います。「課長」について

も、JETROや通産省・外務省・国際交流基金の方は、外からのリアクション

をあまり知らないと思うんです。

北原 そうかもしれませんね。

加藤 そういう映画をご覧になったり、

小説を読んだり、音楽を聞いたりした方の、日本についての感想がどんどん寄せられてくると、何をしたらいいのか、逆に決まってくるかもしれませんね。

北原 私の経験で、一つたいへん関心を持っている例があります。たとえば日本航空です。六年前だったと思いますが、「ビジネス・イン・ジャパン」という本を出し、去年また出しました。前のエディションは三万冊でした。もちろんこれは、日本航空のために上手なPRです。けれども、それは日本にとってもいいPRになっています。

もう一つ。上智大学では二十年前から英語でサマー・セッションをやっています。多くは日本についての講義です。そこに日本航空の奨学生がくるんです。奨学金は東南アジアを対象に、一つの国に対して五名。いまでは三十人以上になりました。サマー・セッションが五週間、そのあと一週間の見学旅行。とにかく日本航空が全部費用を持つ。五、六年前から始まり、二百人近くになりましたね。こういう文化交流に対して、私はひじょうに関心を持っています。

加藤 私どもが数年前に、日本にある国際交流団体を調べましたら、三百ぐらいあるんですね。

北原 ほう、そうですか。すごい！

加藤 そのなかには、日本ネパール協会といったバイラテラルなものが、世界の国の数と同じだけあります。それに財団その他で、大きいものから小さいものま

でいろいろありまして、合わせると三百ぐらい。

そのほかに、日本の企業が海外向けに発行しているPR雑誌がありますね。日本が輸出国である関係もありますが、日本の製造業の海外PRは、世界に類がないほどのところにいると思います。

トヨタの「the wheel extended」は、アメリカのみならず、全世界の大学の先生とか、政治家とか、オビニオン・リーダーといったところにだいたい行きわたっています。

ところが私が日本にいて、たとえばフォードから、あるいはゼネラル・モーターズから、パブリシティの何かを受け取ったことは一度もない。

北原 そうです、そうです。

加藤 エア・フランスだけがファッション・ショーの案内をくれる(笑)。

### テレビ討論の反響

北原 大使時代の話ですが、大使館の文化部には、田舎の婦人会・学校などからたいへんな数の講演依頼がきます。私はできる限り引き受けて、ちよくちよく出かけました。田舎でしゃべるほうがいいんですね。パリでしゃべっても、鼻も引

つけない(笑)。

北原 そうそう。

北原 田舎へ出かけると、県知事まで来て、珍しいから大勢の人が集まる。幼稚な質問も出されますけれども、来てよか



ったという気持ちになります。

しかし、やはり最大の武器はテレビに出ることですね。テレビに出ない大使なんて、ぜんぜん問題にならない。

パロン あ、そうですね。

北原 フランスのテレビは、司会者との議論が白熱するからむずかしいですけどもね。ことに僕なんか引つ張り出されるときは、何とか日本を苛めてやろうというプログラムですから(笑)。

パロン テレビで喧嘩してもいいんじゃないですか。

加藤 喧嘩したほうが評判になる(笑)。

北原 私の経験で恐縮ですけど、フランス経団連会長のセーラックさんと一時間半の対談をやったんです。日本はこういうふうな猛烈な勢いで自動車をつくって、労働者の生活はこうで、家族全部の食事は十五分で終わりました。そういうフィルム——日本に来て撮ったんですが——をみせてから、「みなさんこれをご覧になりましたか。こういう方式で生活している国民と、どうして対等の経済関係に入れますか」。それから僕に質問するわけです。

パロン アハハハ。

北原 少し言い過ぎているかなと思いがちですが、ついこつちも感情に駆られて相当反駁したわけです。しかし大使という立場がありますから、「今夜はどうも言い過ぎたかな」と思いつつ帰ったんです。

そうしたら、「よくぞ言ってくれた、初めて胸がせいせいした」というお礼の電

話が在留邦人からジャンジャンかかってきた。

あくる朝、パリのすぐ南にできたベッド・タウンを初めて見に行きましたら、県知事さんが出迎えてくれました。「やあ、きみ、夕べテレビを見たよ。実によくやったけど、この次やるのときのためにあなたに忠告したい。フランスでは、テレビで議論する場合には、ブルータルにやればやるほど人気が上がる。この次はもっとブルータルにおやりになったほうがいい」と言うんですね(笑)。

パロン なるほど……。

北原 その日の午後パリに帰りましたら、三菱の支店長がやって来て、「うちに四十年勤めているというフランス人が、今度来た大使は実によくやるけれども、やっぱり彼もアフターオール・ジャパニーズ(やはり、日本人)で、慥勤丁寧すぎる」と言っていた(笑)。

それほどすごいです。それは民族の差で、いくら私にフランス人と同じになれといっても、なれないですよ。

加藤 なれっこないです。

北原 しかし、日本人はそういう場合、一般に反駁しませんが、それは礼儀という口実のもとに許されるべきことではなく、むしろ反駁しないことのほうが相手に悪いと思いますね、私は。

パロン 日本語の問題もありますね。日本語でしゃべるときには、いつも人間関係について注意しなければならいんです。フランス語とか、ドイツ語とか、英

語だったら、はっきり言えるんですよ。「それは意味がないよ」という言葉が自然に出てきます。

加藤 その通りです。

### なまの歴史を教える教育

加藤 日本人の持っている世界認識はひじょうに偏りがあるような気がします。外人という、すぐ欧米を考えるわけです。インドネシアの人、中国人、サウジアラビアの人を外人と呼ぶことはあまりない。外人というのは、色の白い人、英語、フランス語、ドイツ語を話す人。

しかし地球全体を考えると「欧米」という言葉でくくられる人は、せいぜい五億でしょう。残りの三十五億は、いわゆる開発途上国の人たちです。そちらに對する文化交流は疎かにされているところがある。

欧米に対しては受け入れるし、送り出す努力もしますが、日本人のなかで、インドネシアの作家の名前を一人でもあげられる人があるか。フィリピンの歴史家で有名な人は誰か、誰も知らない。チリの作曲家、これも知らない。

パロン これは大事な点ですよ。

加藤 日本の学校教育のなかで、西洋の歴史はよく教えますね。フランス王国がどうか、フランス革命はどういうものかとか、その年代まで暗記するわけでしょう。でもアフリカの歴史は教えない。インドの歴史も教えない。

ということ、子供のころから、世界はヨーロッパと、アメリカと、日本で成り立っているということになっている。

**パロン** それは誰の責任ですか。日本の学者の責任じゃないですか。

**加藤** もちろんそうです。言葉にしても、英語はひじょうにたくさんの方が勉強する。フランス語もドイツ語もする。ロシア語、スペイン語、中国語もちょっと勉強する。けれども、それ以外の言葉はほとんど教えていませんよ。

日本の将来と人類の将来を考えると、三十五億のいま悩んでいる人たちと、日本との文化交流のほうが長期的には大事な気がするんですけども。

**北原** ほんとうにそう思います。遺憾ながら、日本の学校で勉強する歴史は教科書的なんですね。独立の過程とか裏話とか、もつと生の歴史をおもしろく教えたらい、みんな興味を持つと思うのです。その点、歴史に限らずあらゆる問題について言えますね。

たとえば国連に関する講義。国際機構論という、憲章の解説をやっているわけです。以前、二年ほど東大教養学部で講義したことがあります。僕はそれを全部やめまして、国連の安保理事会ではどういう問題を取りあげたとき、どういう議論をしたかという、実際の裏話ばかりやったわけです。これは評判よかったですね。

欧米については古典だけ教わったわけです。昔は、いまは世界がすっかり変わ

ったのに、教える内容がどれだけ変わったか。これは大きな問題だと思います。

### 海外青年協力隊の貢献

**北原** 開発途上国との交流について、一つ申し上げたいのは、海外青年協力隊のことなんです。世界に六百人の青年協力隊員を派遣しており、そのうち四百人はアフリカです。アフリカでも、小さな最も遅れている国ですね。仕事は、女性が助産婦、看護婦、医療関係。男性は、ごく初歩的な機械の修理。機械の修理をできる人がいせんから、これがいちばん大切なわけです。神様のごとく慕われて、ほんとうにいい仕事をしています。

ただ、青年協力隊は若い人に苦勞させるためにやっている制度で、現地でもらう小遣いが月に一万五千円ぐらい、留守宅に二万五千円か三万円。ほんとうに少ないものです。やっている仕事は、向こうの政府からたいへん感謝されていて、むしろ大使館のアタッシェにしてやったほうがいいぐらいの仕事をしている。長い人はアフリカに十年いるんです、好きになっちゃって。

ですから、もう青年協力隊の考え方を変えてはどうか。そういう国に対するコミュニケーションの方法として、青年協力隊にまさるものはないと思います。四百人ではまだ足りないの、もっともっと出て行くべきです。ところが帰って来ても、誰も就職を斡施しない。学校を出

て四、五年そういう仕事をやっていると、大企業は採りたくないわけですね。

今度初めて、タンザニアに行っている女性を正式の外交官に採用しました。前に会議で行ったとき手伝ってもらいまして、向こうの大蔵大臣に、彼女が敬語を使った、たいへんりっぱなスワヒリ語で話したんです。大臣も感心していました。なぜこういうことをやっているのかと訊いたら、一生かかってスワヒリ語の辞書をつくりたいと。じゃ、大使館に入ったらどうですかと言ったんです。

国連の会議に行つて、文書だけ読んで頭だけで考えて、いくら南北問題を議論しても前進はない。やはり現地で彼らと一緒に苦勞した人がやらなければ……。

**加藤** いまのお話は同感というよりも、私が長年考えていたことをおっしゃっていただいてありがたいという感じですよ。

青年協力隊の原形は、ケネディ政権のもとにできた平和部隊ですね。若い人に苦勞させて鍛えようという、軍隊代わりみたいな精神が先行していた。青年協力隊で実際におやりになっている方に私も何人かお会いしましたが、つくったときの意図との間にびじょうな落差が生まれているわけです。青年協力隊という名前自体も変えたほうがいいと思います。

そこに選ばれたことは特権だというぐらいの、そういう評価をされる人々として編成していただきたい。帰って来た人がアラブ語を覚えてきたら、すぐ三井物産が石油担当にする。それぐらいの処遇

をして然るべき人材だと思えます。南の島で米づくりに従事している青年にも、フィリピンで養殖漁業をやっている人にも会いましたけれども、あの人たちは偉いですよ。

ですから国際交流は、最終的な担い手は人間、それも若い人だという感じがします。そういう人たちを処遇する方法を、日本政府はぜひ考えていただきたいと思っています。

### 問題はコミュニケーション・アビリティ

**北原** 国際交流でいつも考えていることがあるんです。つまり、対外関係において、日本人がらいコミュニケーションの下手な国民は少ないんじゃないか。これだけ大国になりながら、どうしてこうも外国人とのコミュニケーションが下手か。

人間の交流に資するためには、いろいろなやり方があるわけですが、情緒面でのコミュニケーションはわりあいできる。相手が同じアジア人である場合には、情緒的コミュニケーションは成功することが多いわけです。ところがヨーロッパ人になると、情緒は単に一つの側面にすぎず、ことに大政治家にとっては、情緒を前面に出すことは恥ずすから、全部ストップしてしまふ。どうにもしようがない。これほどまでに違うかということを感じさせられてきたわけですから。

外国語が下手だといわれますが、しかし、人間と人間のコミュニケーションは

けっして言葉だけではない。これは日本が将来、国際社会で伸びるか否かのひとつの大きなファクターだろうと思います。

サミットに出かけて行って、何とか切り抜けたなんて言っても、成田に着いたとたん、外国はすべて忘れちゃうわけですよ、日本人は(笑)。

**北原** 十年ほど海外ばかりにおり、帰ってきて生活して感じますのは、やはり日本は祖国でもあるし、気候も溫和だし、楽ですね。外国だと、食事しようと思ったら、レストランに入るか、サンドウィッチを食べるかでしょう。日本は、うどん、そば、てんぷら……軽便にして安くつかうまいものがどこにでもある。いい国なんですねえ、良過ぎる。

しかしあまりこれに慣れていくと、物事は説明しないで済むし、コンセンサスでやっていける。なま温かい湯に入ってじっとしているようなもので、「井の中の蛙」になりがちです。この点は大いに反省すべきだと思いますね。やはり、日本だけが世界ではない。自分の身の周りだけを考えるのではなく、もう少し広い視野でものを考え、行動できるように訓練をする必要があるのではないかと。どうしたら日本人のコミュニケーション・アビリティを高めることができるか。なかなか即効薬はないと思いますが……。

**加藤** たいへん重要な問題を提起していただいたわけですが、これだけで大きなテーマになりますので、機会を改めてと

いうことにさせていただいて……。

### ステージに上がった自覚を

**加藤** 国際交流、文化交流がこれほど問題になってきたのは、一つこういうことが言えると思います。

歴史を振り返ってみますと、歴史にはステージがあつて、一方に観客がいて、舞台の上に役者がいたわけです。たとえば十八世紀の役者はイギリスであり、それに少し遅れて、フランス、ドイツとかが登場して主役に回った。十九世紀の終わりにアメリカ、二十世紀の初めになるとソ連が出てきた。その間日本はずっと観客席に坐っていたわけです。ところがいま日本は、気がつかないうちにステージに上がっているんじゃないかという気がします。世界が日本をみていることは確かですね。日本はよその国を見る習慣はあつたけれども、見られる習慣はあまりなかった。

**北原** そうですね。けれども戦争のときは観客じゃなかった。大変な役者でしたよ。

**加藤** 戦争に負けて、当分ステージには上がるまいと決意したわけですよ、貧乏だ貧乏だと言つて。ところがいつの間にかまた上がつちやつた。トヨタとダットサンに乗つて(笑)。



# 日本をどう説明するか

「シヨウゲン」ブームを機会に



ほんまながよ  
**本間 長世**

(東京大学教養学部教授・松本重治部会)

## 「シヨウゲン」ブームのプラスとマイナス

アメリカの「シヨウゲン」ブームは日米相互理解のためにプラスであったか、マイナスであったか。この問いに対しては、すでにさまざまな答えが出ているし、日米両国のコミュニケーション研究者によるアンケート調査も行われたので、いずれその方面からも興味ある分析結果が得られるであろう。

私は日本で公開された「シヨウゲン」の劇場用フィルムを見ただけであるが、これは無理に長さを縮めたためもあってか筋の運びが飛び飛びで、日本人として考えられないようなところで残酷な行為がなされ、全く唐突に混淆シーンが出現し、ハラキリがひんばんに行われていたかのごとき印象を与えるなど、日本についてのマイナス・イメージの紋切型のものを

ことさらに強調しているように思われ、

ばかばかしくかつ不愉快であった。日本の外務省も、テレビ番組の「シヨウゲン」が驚くべく高い視聴率をあげたことから、日本についての歪んだイメージがアメリカ人の間に広まることを恐れ、「シヨウゲン」ブームを機会に日本についての正しい知識を普及させる努力を強めるため必要と思われる措置をとったようである。

私が「シヨウゲン」のことをはじめて知ったのは、ウイスconsin大学のアメリカ憲法史専門家S・カトラー教授からだった。彼は、マディソンからシカゴまで私を車に乗せて旅行した間のほとんども「シヨウゲン」礼賛に費し、日本研究者は何というか知らないが、これは小説としては実に面白いと力説してやまなかった。

やがてカトラー教授はフルブライト交換教授として日本を訪れ、福岡に滞在して中洲の地理にも精通するにいたったが、

東京に上ってきた時、やはりフルブライト交換教授として東京大学で教えていたJ・オーエンズ夫妻共々わが家に招いたところ、その時も「シヨウゲン」論を延々とぶって、私たち夫婦はオーエンズ夫妻のために気をもんだほどだった。オーエンズ夫人は、「シヨウゲン」のテレビ番組を面白く見たことを書いてきた最近の手紙の中で、カトラー教授のあの夜の雄弁を思い出すと述べていた。

いうまでもなく、カトラー教授は、日本に来る前に「シヨウゲン」を読んだからといって、日本滞在中にハラキリが一回ぐらい起こるだろうなどと思って来日したわけではないし、オーエンズ夫人が「シヨウゲン」のテレビ番組を面白く見たからといって、一年間の東京生活を通じて得た現代日本のイメージが消え去るわけではない。全体的に見れば、「シヨウゲン」をきっかけとして日本の歴史に対する興味がかき立てられるというのであれば、「シヨウゲン」ブームも日米相互理解の助けとなり得るといえることになるであろう。

先日、年来の友である経済学者W・ハンスパーガー教授夫妻が、しばらく日本に滞在するので再会したところ、カリフォルニア大学の日本史研究家H・スミス教授が編さんした『シヨウゲン』から学ぼう』という本を見せてくれた。フィクションから史実への導入を目指したこのような書物が広く読まれることを、ハンスパーガー夫妻と共に私も願ったのである。



日本の良き理解者であるマンスフィールド駐日アメリカ大使が、去る二月にホルルで行った演説の中でも、日本人がアメリカについて知識を豊富に持っているに比べて、アメリカ人は日本についてあまりに知らなさ過ぎるので、「シヨークン」がよく読まれテレビ番組も大ヒットしたことは喜ばしいことだという趣旨のことが述べられている。

### 専門家の影響力

た作品が残酷イメージを用いているという事実が、大衆へのアピールの必要条件となっているらしいことも気になるのである。アメリカの大型テレビ番組で大成功を収めたのは、「シヨークン」の前にナチスによるユダヤ人迫害の悲惨を描いた「ホロコースト」や、アフリカからさらわれて奴隷にされたクンタ・キントとその子孫の物語である「ルーツ」などがあるが、そのいずれもが残酷な場面を含んでいる。

けれども、「シヨークン」ブームを手放して喜んでもいられない問題も、ないわけではない。ひとつは、残酷、ハラキリ、混浴というようなマイナスの紋切型イメージがともかく依然として登場することである。ひとたび形成されたイメージが、いかに強く抱かれ続けるかは、日本の対米イメージがいかに変わらないかをふり返ってみてもすぐ分かることである。先日、娘が見ていたテレビの歌の番組で、何とかいう男性二人のコンビの歌手のひとりが、司会者に海外旅行をするとすればどこへ行きたいかと聞かれて、アメリカを挙げ、「アメリカへ行けば軽薄になりますから」と無造作に語ったのを聞き、軽薄な文化の国としてのアメリカのイメージが、アメリカの大概の歌手よりはずつと軽薄に見えるこの若者の頭に入っていることに興味を覚えたことがある。

さらに、「シヨークン」の作者が、これも当然のことながら、日本研究専門家ではなく、日本研究促進のためにこの作品を書いたのでもなく、日本研究家たちはこのブームにあやかっただけで、アメリカ人の日本への関心を深めようとしているのだという事実も認めなければならぬ。社会学者で日本を何度も訪れているN・グレイザー教授は、アメリカ人の対日イメージ形成に影響力が大きかった書物は、日本研究専門家でない人によって書かれたものが多いとして、R・ベネディクトの『菊と刀』（いうまでもなく、ベネディクトはかつて日本に来たことがないままにこの書物を書いた）や、H・カーソンの『超大国日本の挑戦』や、Z・ブレジンスキーの『ひよわな花日本』などを例に挙げたことがある。その後E・ライシヤワー教授の『ザ・ジャパニーズ』のような概説書が出て、知識層のアメリカ人のための良い日本入門書となっているようであるが、一般的にいって、日本専門家は専門

家であるがゆえに、一般の知識人にも大衆にもあまり影響力がないというグレイザー教授の説明は、残念ながらもたかなり妥当するのではないかと思われる。

もつとも昨年十一月にライシヤワー教授にお目にかかった時には、アメリカ国民の対日理解は以前よりはずつと良くなったという意見を伺ったし、何よりもE・ヴォーゲル教授の『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が、アメリカでも三万五千部売れてビジネスマンや政治家の間で話題となり、ヴォーゲル教授は一週平均十件の講演依頼を受けるようになったというのであるから、専門家も大いに活躍しているといつてよいのかもしれない。しかし、他方では、日米共同プロジェクトで日米の社会科学教科書で相手国がいかに描かれているかを調査した時、カンザス大学の日本史専門家G・グットマン教授が、自分は念のためアメリカの教科書も調べてみたが、日本に関する記述においていかに教科書執筆者が専門家を活用していないかを知って驚きあきれたと述べているのである。

### 地域研究と国際研究の統合

日本が今後文化交流を深めてゆかねばならない国がアメリカばかりでないことはいうまでもないし、国によって交流の仕方が異なるべきであることももちろんである。しかし、戦後の日本が最も密接な関係を政治的・経済的・文化的に結ん

できた国はアメリカであって、アメリカとの文化交流の経験は、少なくとも間接的に他国との交流についても教訓を与えてくれるはずである。現在の状況の下で日米文化交流の今後のあり方を考える時、どのような課題が横たわっているということになるだろうか。

さきほど、専門家の影響力が限られたものであることに触れたが、それだからといって専門家は必要ないというような結論を出すのは大変な間違いである。地域研究の専門家が有効な影響力を発揮し得るような専門研究が、推進されねばならないのである。たしかに、地域研究に一種のジレンマのようなものがある。とって、専門化が進めば進むほど対象地域の独自性を強調する傾向が一方で出てくるし、他方では細かい問題に深入りして、対象地域の特徴を総合的にし全体的に把握することがかえってできなくなるという場合が生ずる。けれども、すぐれた地域研究の業績が出れば、それは他のオピニオン・リーダーたちの認識を改めさせたり深めさせるのに役立ち得るはずであるし、それがまわりまわって一般国民の常識にまで浸透してゆくべきものなのである。

その場合、スタンフォード大学のR・ウオード教授（現在日米友好基金の委員長でもある）が述べているように、対象地域が限定されている本来の地域専門家（エリア・スペシャリスト）と並んで、各国間にまたがる政治・経済・文化等の

問題を研究対象とする国際学専門家（トランスナショナル・スペシャリスト）の両者が相補って、国際研究（インターナショナル・スタディーズ）を進めることが望ましい。しかし、残念ながら、国際研究ならびに外国語教育に関する大統領任命の委員会の報告書によると、アメリカの国際研究は近年不振であって、相当な振興策を実施しなくては国際理解を深めるという要請に十分にこたえることが難しいようである。日本では、新しい学問分野としての国際関係論が諸大学で講ぜられるようになり、地域研究促進の重要性も認められている。地域研究に重点を置いた新しい大学院大学建設の構想も具体化しつつある。しかし、日欧経済関係の摩擦が大きくなって今さらながら気づくことは、近代日本の発達においてヨーロッパ文化の影響があれば大きかったにもかかわらず、地域研究としてのヨーロッパ研究がいかに不十分であり、専門家ががいかに少ないかということなのである。地域研究専門家の交流は、今後においても極めて重要である。

### 独自性理論の限界

しかし、専門家だけに任せておいたのではやはり十分でないことはすでに見た通りである。今後の文化交流においては、日本と対象国のオピニオン・リーダーの交流がもっと深められねばならない。その際重要なことは、日本を含めそれぞれ

の国のオピニオン・リーダーが自国の社会と文化の特徴をどのように外国の人びとに説明するかという問題である。特に日本人の場合は、外国文化を吸収することに秀でていて、日本語をひとつマスターすれば世界の文学作品の傑作は皆読むことができると言われながら、外に対して自分を説明するのが下手だと言われているので、この問題は深刻である。

注意しなくてはならないのは、日本の独自性を必要以上に強調し過ぎて、日本人はやはり神秘的な不思議な人間のだと思わせてしまう危険におちいることである。日本製品の輸出が増大するにつれて、最初はダンピングだという非難が浴びせられたが、最近では日本市場が外国に対して閉ざされているため貿易不均衡が生まれるのだという批判がなされている。日本の独自性を強調し過ぎることは、日本の閉鎖性というイメージを強化するのに役立つばかりであらう。

実際に、日本に独自のものとされているものでも、たとえば「根回し」のようなことは他の社会でも当然されていることであるし、終身雇用制が日本独自であるといっても、若い方から先に解雇されるのと、「窓際族」などと呼ばれて高齢者から順に退職をすすめられるのと、どちらが安定した制度であるのかは、にわかには定め難い。平等主義を建前とする他の先進民主主義諸国よりも、日本の方が実質的な意味で社会的平等化が進んでいる面もある。何かにつけて日本はユニ-

くだと言いつ出すのは、知的怠惰のあらわれであることもあろう。

その上、日本の独自性を強調する以上は他の諸文化の独自性も認めざるを得なくなり、結果的には文化理解のブロック化を促すようなことにもなりかねない。

それだけでなく、アメリカなどではナショナルリズムの傾向が再び強まり、外国に対する関心が以前より薄れつつあると言われている。日本は市場としても入ってゆけないし、文化もその中に真に入ってゆくことができないということにならないような文化交流を、考えねばならないのである。

しかし、独自性をふり回すことだけが相互理解の障害ではない。各国、各民族の歴史的伝統の違いに基づく文化の多様性を無視して、観念的に人類愛の普遍性を信ずることが、いかに誤解を招くかについては、すでに多くの教訓が示されているはずであるが、依然として「心と心のふれ合い」というような素朴な国際主義が説かれている。そのような素朴な普遍性の信仰に対しては、おのおのの文化にはそれぞれのスタイルがあり、文化の総体としての性格ないしデザインがあつて、それは他の文化に属する者にとって理解可能ではあるが、その存在を無視してはその文化の中にある人の行動や思想を正しくとらえることが難しいということをお説かねばならない。高校生の作文を読んだり、留学のための奨学生選抜試験の面接で学生が語るのを聞くと、善意に満ち

理想に燃えてはいるが、国際理解についてあまりにも素朴な考えを抱いたまま、人類の平和に役立ちたいという若者が現われて考えさせられることが多い。

### 国際化とは開放化

要するに、文化交流が目指すべき相互理解は、比較の視点に立ちながら、独自性論的決定論におちいらず、素朴な普遍性に浮き上がらず、ドイツ史研究家野田宣雄教授が述べておられるように、『西洋の没落』の著者シュペンゲラーが試みたような、「各文化を全体的な関連のもとに一つのシステムとして把握しようとする努力」することであり、さらに進んで、「文化が一つのシステムとしてどのような時間的リズムのもとに内的緊密性をたかめ、また弛緩し、あるいは解体するのか」を探ってゆくことであろう。しかも、交流という以上は、互いに自国の文化についても相手国の文化についても対話や討論を重ねてゆくというのでなければならぬし、二国間に限らず多角的な議論の交流が進められてよいはずである。

経済学者の西山千明教授は、国際化とは開放化であると主張して、開放化の意味を、「自国の社会や経済や文化を、外人へ向けて開くこと」であり、「異邦人の垣根をできるだけ低くすること」だと説明しておられるが、文化交流による相互理解が進むことが、そういう意味での開放化につながるものでなくてはならぬ

のである。

もちろん、日本人だけが開放化ができないというのではない。アメリカ人は最も開放的であると自他共に認めているかもしれないし、たしかにさまざまな意味で極めて開放的な面があることは、アメリカの大学制度と日本の大学制度を比較しただけでも明らかであるが、たとえばグラント・ウッドの寓意的な作品である「アメリカン・ゴシック」——農民とおぼしき老夫婦が、よそ者を内へ入れないという、かたくなな表情で並んで立っている絵画——などを連想すれば、アメリカ社会にも閉鎖性がひそんでいることに気づかされるのである。

外国の文化に対して生き生きとした関心を抱き、外国語をマスターし、外国に対して自己を開くというのは、どの国の国民にとっても本来並々ならぬ努力を要することであるに違いない。日本も、少数の外国人の異国趣味の対象でとどまっていた間はおそらく気が楽だったが、知れないが、今日のような経済大国となっていたるところで摩擦を起こし、日本の成功に学べという声が上がることになってしまった以上は、日本社会の特質ないし日本文化の魅力を外国人にじかに感得してもらえないような条件を整えなくてはならないのである。文化交流は、大きく言えば日本という国が今後の国際社会で孤立せずに存続し繁栄するための必要条件であり、個人のレベルでは自己の生を充実させる道であると言えよう。



# ケチャ体験

# 原初的祭りと科学技術



やましろ しょうじ  
山城 祥二

(芸能山城組組頭・筑波大学講師・国際交流研究部会)

たとえば、われわれの住む社会を文化的、情報的生態系として見た場合、果たして、そういう新しい表現手段のもたらす空間が人間の遺伝子に指定された望ましい環境に合致するかどうかという科学的配慮などは、まったくなかったといつてよからう。

このような近代合理主義の持つ限界から、高度産業化社会に至って、長期の熟成で完成されていた伝承のなかで、われわれが科学技術をもって無思慮にもつくり変えてしまった芸術・表現の世界は少なくない。人間の生物学的必然性に高度に適合した文化遺産のなかではこうして見失われてしまったものは計り知れないのではなからうか。そしてまた、このような文化的諸要素の欠乏が、現代社会の精神的荒廃に拍車をかけているようにも思えるのである。そこで私は、このような人類本来の文化の実体とそれに対する評価とをわれわれの社会にもう一度取りもどす手段として、科学技術を使えないか、という実践を伴った研究をここ数十年間続けてきた。それは最近になって、芸能山城組の音楽・芸能・まつりへの取組みで比較的順調に実を結びつつあると思われる。その一端を、ここではバリ島の芸能「ケチャ」を中心にして述べてみたい。

## ケチャとの出会い

「地上最後の楽園」と呼ばれるインド

## 科学技術と芸術

今年一月に公表された『国際科学技術博覧会基本構想』は冒頭に「基本理念」を掲げ、その中の四つの「新鮮な視点」の一つとして次のような提言をしている。

「科学技術と芸術の融合——科学と技術の達成し得たものを生かし、新しい表現・新しい芸術の視点を生み出したい。」

科学技術と芸術とは、現在最も縁の薄いものと考えられている。それを結びつけるには、いったい何を意味することになるのだろうか。「基本構想」にはこれに關して「現代の科学技術の不幸のひとつは、科学技術の世界と芸術の世界が互いに背を向けあっていることにある」と述べられている。

こんにちの常識とは異なるかも知れないが、科学技術と芸術とは、本来は一体化し分かち難いものであった。ところが、産業革命以降の近代化の過程の中で、しだいに別の道を歩みはじめた。そしてこんにちでは、芸術はひたすら表現世界のみを追求するスペシャリストのものとなり、科学技術はそれとは逆に、感受性や情念とはまったくかけ離れたものと考えられるに至っている。

とはいえ科学技術と芸術とは、従来からまったく無縁だったわけではない。たとえば映画・放送、ミュージックシンセサイザーなどは、科学技術によって産み落とされたものである。しかし、これらは、新しい技術を開発し、それによって人間に幸福をもたらす、といった近代合理主義的な発想の域を脱していない点において、ある限界を見せている。

ネシアのバリ島にはさまざまな芸能が現存し、それらは原初的精神世界の健在、表現の豊沃、質的透逸などの点において、最近世界的にも著しく評価を高めている。なかでも人間の表現の極致として第一にあげられるのがケチャである。ケチャは、バリ島に古くから伝わる土俗的・呪術的な習俗と、古代ヒンズー叙事詩・ラーマヤナ物語とが結びついてきた神代さながらの群衆芸能である。灯火を囲んで円く座った百数十名の男達が「チャクノチャクノ」と鋭いパルスのような叫び声を複雑にかみ合わせてリズムを刻む。このリズムの中で、ラーマヤナの登場人物たちが舞劇を進行させ、観る者を陶醉の境地へ誘うのである。

この神秘的なケチャに魅せられる人は多く、バリの人の手を借りずバリ島以外の地でこれを演じてみよつという試みは、ヨーロッパなどでも何度か行われたらしい。ところが、優秀な音楽家や舞踊家たちが束になってかかっても、一度として満足にケチャを演ずることはできなかった。バリ島ならばどの村でも、ごく普通の農民たちが演じるものなのである。なぜこのようなことになったのであろうか。

私は、その原因は分析と総合とによる西洋芸術のアプローチ方法にあったのではないかとみている。西洋芸術とバリ島の芸能とは、発想・感覚の点でまったく違うものである。しかし西洋芸術の背後にある近代合理主義では、たとえば芸術

の理論ひとつをとっても、自らの体系を人間の究極の姿と考え、自分のものさしひとつで他のすべての芸能を測り裁くことができないという考え方が、最近に至るまで支配的だった。したがって、ケチャについても同様に、彼らのハカリでのみとらえていく、ということが行われ大きく的外してしまっただけではないかと考えられる。

ところで、実は私も、この危険な畏れケチャの魅力にとりつかれた一人である。今から十何年も前、当時私は既成のベル・カント合唱の枠を脱し、ブルガリア民族合唱など、さまざまな新しい合唱の模索を開始していた。そこへ、東京芸術大学の小泉文夫先生から、現地録音されたケチャのテープを聴かせていただいたのがそもその始まりである。しかし、もちろん私とて、当時から西洋芸術とケチャとの根本的な違いなどに気付いていたわけではない。それどころか、その時には単なる音楽だと思っていたのだから、私自身いかに近代的発想にとらわれていたかがわかる。とまれ、私は一聴しただけでそれに魅せられ、ぜひ自分たちの手でやってみたいと思った。

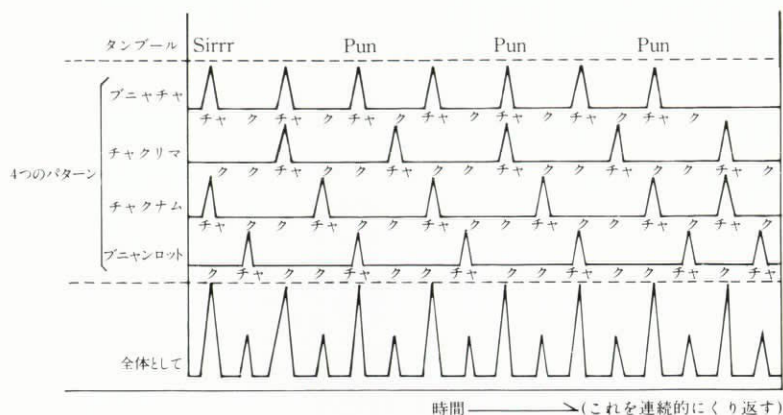
そこで小泉先生にご協力をお願いしたところ、先生はあらためてバリ島に行かれ、詳しく調査してくださることとなった。しかし、東京で首を長くして待っていた私に届いたのは、あまりに複雑なため、再現は絶望的」という先生のお手紙だったのである。それほどまでに、ケチ

ヤは難攻不落の芸能であったといえる。しかし、それでもなお私はあきらめきれず、小泉先生から資料をいただき、さつそく実験にとりかかった。

### 方法論への模索

この芸能への初めての取組みは、われわれには全く手も足も出ないという結果に終わった。

私はまず、当然のことながら、従来の近代芸術的発想に基づいた分析と総合とによるアプローチ方法をとった。一般に、こうした芸能を身につけようとするときには、それを構成する各要素に分解し、そのひとつひとつの技術をみっちり訓練し、習得してからあらためてそれぞれの専門家を集め、ブレンドしなおす、という方法をとる。これは科学的すなわち「分ける学」的方法である。しかしこうした方法により扱えられることがらも非常に多いのであるが、それを総合してみても、少しもケチャにはならなかったのである。これまでの方法ではとうてい不可能、と認めざるを得なくなった。そして、どうやらケチャは今までわれわれが表現領域や日常生活の中で使うのとはかなり違った能力を要求するものではないか、と思いついたのである。そこで、一歩下がって方法論それ自体へのアプローチを試みることにしたのである。まったくの手づくりで方策を探るのであるから、まこと



に不細工で、さんざん失敗も重ねたが、これまでの方法ではだめであったところを打破するのに役立つものも幾つかは見つけられたようである。

なかでも特に効果的と思われるのは、今日私が「複写(同一化)と比較(相対化)」との融合、と呼んでいるひとつの方法である。それは、分析・総合にくらべれば一見能率の悪い不合理なやり方と思われるであろう。しかし、ケチャへのアプローチにおいては、実際に最も効果的だったのである。こうしたさまざまな接近法により、われわれは結果的にケチャを自らの手で上演することに成功した。ほば現地同様と言われるような水準で演技できたというを通じて、われわれははじめてケチャとは何かを実体験として把握できたのである。

### システムの芸能

ここで、ケチャが実現した結果として判明して来たその内容について、若干の説明を試みてみよう。

まず、ケチャは非常に集团的・システムの的な芸能であることがわかった。ケチャは、百五十人以上の男性が複雑かつ精密な幾つかのリズムパターンを一緒に合わせていくことを基本とする。その中には、部分・階層ごとの生きたまとまりがあり、それ自身が制御機能を備え、それがさらに有機的に結びついて多重システムを構成している。

クラシックのオーケストラのように、指揮者に各パートが直結する、といった単純なシステム観では、とてもそれらをとらえきえることはできない。

また、このリズムは即興的に変化していくものであるから、複雑なシステムを制御する必要も生じてくる。そのための情報は、ケチャのいたるところに飛び交う仕組みになっている。なかでも、合唱隊の中のタンブール(拍子とり)、ポポ(テーマソングを唱う)、ダーク(音頭)という三つの制御機構から発信される信号は特に重要なものである。これらの制御装置の相互作用により、情報のフィードバックが行われ、ケチャが全体としてスムーズに進行してゆくのである。

また、フォン・ベルタランフィーはその著書『一般システム理論』の中で、「システムにおいては、その全体は部分の総和以上のものである」と述べているが、この芸能の中でそれはありありと実感された。一人一人の技能や部分的表現がそれほど高度なものでなくとも、それがシステムとして組み上げられると、全体としては超絶的な表現が生み出されるのである。

さらに、ケチャには分野に分けるとたとえば音楽・美術・舞踊・演劇・呪術などというものにあてはまると思われるさまざまな要素があるが、それは分けていけばきりがなく種類が多いようにも思えるくらいに多数であり、かつ渾然一

体でもある。ただこれらの諸要素を加算的に統合させても、ケチャを演じることが可能となるわけではない。ケチャによって生み出されるこのような位相空間の本質を理解するには、実体験によるほかはないのである。そして、ここでは、ケチャを演じることによって発生する快感がいちばん大きな問題となる。

### 群れのメカニズム

バリ島の人々はケチャを演じるうちに強い陶酔を感じ、トランス状態になるといわれるが、山城組でもさまざまな試行の結果、ついに同じような体験が得られるに至った。こうした芸能には、何種類もの麻薬を摂取するのと類似の生理的効果があるのではないかと私は考えている。しかし、こうした効果とそれによる快感とを得るためには、脳内に一定の資格をもった情報が正しい手続きでインプットされねばならない。従って、ケチャの成功と快感発生とは、相互作用の関係にあると考えられる。最近になって、中毒にはならないが麻薬と同様の快感を起すエンドルフィン類をはじめさまざまな神経伝達物質が脳内に自然に生産されていることが発見され、私の仮説を裏付ける材料となっている。ケチャによってこうした人間の生命のもつもう一つの局面を自分自身の体験として再発見することができたのである。

さらにまた、この芸能を支える最も根本的なものが、バリ島の村の組織であることがわかった。バリ島の村々は、まさに伝統的共同体と呼ぶにふさわしい条件と機能とを備えたものであるが、それはわれわれ現代文明社会に住む人間にはすでに失われてしまっているものである。われわれは、この、群れのメカニズムともいべきものを、ケチャへの取りくみの中ではからずも教えられることとなった。実はその結果として、芸能山城組という一つの共同体が誕生したのである。この群れは、成長してこんにちに至っている。そして、『未来を試行する若者集団』としてさまざまな実験的性格の濃い活動に取り組みつつある。

### ケチャからまつりへ

さて、このようにして、ケチャへのアプローチはかなりの成果をあげることができた。次にわれわれは、ケチャをも含め、もっと多くの要素を包括するもう一階層上のシステムとして、人間本来のまつり空間の構築へとこの発想を拡大してみた。さまざまな考察・試行を経て、まつりこそは人間の表現活動の中でも最高位に属するもののひとつであるという結論に達し、まつり創りを課題として取り上げたのである。

その試みのひとつとして、一九七六年以来毎年一回行っている「ケチャまつり」

があげられる。日本の伝統的なまつりの姿を損うことなく、それとケチャとを結びつけたこのまつりは、『未来のまつり』の原型を探るものである。ここでも大脳生理学などの諸科学を援用し、快感の発生する際の人間の状態をかなりつぶさに検討することが大きな土台となっている。このような土台の上に、ひとつの挑戦として、ケチャのような原初的な芸能を演じるには最も不適と思われる超現代都市・新宿新都心の超高層ビル街の真中において場所を求め、このまつりを繰り広げて見た。その結果は、当初の予想をはるかに上回る手応えとなって返って来た。『魔天楼に響く原始の叫び』（『シテイロード』）、「現代人が忘れていたもの、まつりの原点があった」という感じ。血が騒いだ。熱くてよかった……（加藤しげき、音楽評論家）などの反響からも、このまつりの意図は何分か達成されたのではないかと考えている。

今日ではこの「ケチャまつり」もすっかり定着した観があり、東京の夏の風物詩として、毎年一週間にわたって新宿の夜を彩っている（今年もまた、七月二十七日から八月二日にかけて行われる予定である）。

### 「分けない学」

われわれは、このような試みを通じて、現在まつりと科学との一体化というテー

マを掲げるに至った。近代西洋文明の発想に基づく科学は本来「分ける学」であり、物事をひたすら客観化し、分割することから始まるものである。しかしその限界が現代人類のかかえる歴史的境界ともなっている。そこで、従来の科学のこともその客観性を失わず、さらに全体性をも損うことのない「分けない学」という新しい科学の姿勢、たとえば先に述べた実験を重視する「複写」と「比較」との融合などを加えることにより、まったく新しいアプローチを生み出そうとするのである。こうした方法は、先にも述べたように、ケチャへの挑戦やまつり創りの実施などのなかから新しく築き上げてきたものである。このようにして今、実体となって現われた学問的姿勢は、芸術的姿勢とまったく渾然一体化して分かち難いものである。つまり科学であり、同時に芸術でもある。

私自身の行動を通じて確認した以上の事柄に関して、冒頭に紹介した「科学万博」のスローガン、「科学技術と芸術の融合」は決して絵空事ではなく、十分に現実性を持つものと考えることができる。このような発想と行動とが、「科学万博」の基本構想にいわれる「現代の科学技術の不幸……科学技術の世界と芸術の世界が互いに背を向けあっている」状況を打破する方向への、ささやかな役割を果たせるならば幸いに思う。

# 文化の伝播 —— 説話交流の条件



まつばらひでいち  
松原 秀一

(慶応義塾大学文学部教授・国際交流研究部会)

## 異文明の理解

二十世紀の日本で暮らしている我々の生活は、極めて多くの外来文明に依存している。文字、衣服、食料、住居、自動車から社会制度に至るまで、外国の文化の恩恵を蒙っていないものはない。

しかし他方、我々の生きている世界が日本文化の世界であることも紛れもない事実である。多くの日本人は外国人には日本文化は分らないと信じているし、事実、西欧文化に範を取ってつくった社会制度も日本にしか見られぬ現実を生んでいる。社会問題となっている大学入試制度など、中国の科挙の制度を十九世紀に

採用したイギリス、フランスの制度を明治に日本が採用したものが、全く日本的現象をつくり出しているし、西欧の技術によって日本がづくり、輸出している自動車は欧米で問題を起している。自動車の品質を保証している生産法も品質管理法も日本が欧米に学んだものであるのに、本元の国々よりも良い成果を挙げたのである。

すでに日露戦争の最中にアナトール・フランスは「白き石の上にて」で西欧から資本主義と軍事を教わった日本が西欧の脅威となるのは不合理と考えるヨーロッパ人を皮肉って、黄禍論と同じく白禍論も成立することを説いている。アナトール・フランスのこの著作が柳田国男、和辻哲郎等に深い影響を与えたことは平

川祐弘氏の『和魂洋才の系譜』に詳しいが、近代日本がヨーロッパ文明に深く浸透されたことは、かえってヨーロッパに対して悩みの種となっているわけである。しかも現在では日本も西欧もアメリカも相互依存関係を止めることができない。日本はまた、イスラム圏、インド文明、アフリカ等の要素と対面せざるを得なくなっている。他国の文明を摂取して来た日本は、日本型の文化を異文明に理解して貰う必要に迫られはじめている。外人には日本のことは分からないといっているのではない状況が生じている。

われわれが「われわれ流」に外国文明を勝手に理解していたように、他国も日本を我流に解釈していくわけだが、世界が小さくなり、お互いに接触しあつて暮



らすようになると以前と異なり摩擦が問題となってくる。誤解による創造性の幅も狭くなる。これは新しい情況と考えることもできる。いったい、異文明の理解とはどういふものであろうか。その一端を東西の説話の伝播に見てみたい。

### キリスト教の聖者になった仏陀

東洋から西欧に伝播した説話のひとつに仏陀伝がある。インドに生まれた仏陀伝はイスラム圏にも伝わり、西欧にはギリシアのキリスト教徒を通じてビザンティン世界にギリシャ語訳となって伝わったが、その際、ボデイサトバの名がアラビヤ文字でBとYが点ひとつの差であるため混同され、カトリック聖者伝となった時は「聖ジョザファト伝」となった。ビザンティン世界からラテン語訳によって西欧にもたらされた「聖ヨザファト伝」は、ただちに各国語に訳され、祝日も十一月二十七日に定められ、広く信仰された。十六世紀末にはポルトガルの宣教師によって本邦にもたらされ「聖ばるらくと聖じよざはつの御作業」の題の下にキリシタン版『サントスの御作業』に入り一五九二年に刊行されている。この『サントスの御作業』中にはシリアから西欧に伝来した「聖あれしおの御作業」も含まれており、説話の伝播に聖者伝集は多くの例を提供している。

「聖じよざはつ伝」はヨーロッパでは英

独仏語はもちろん、スペイン語、イタリア語、プロヴンサル語から北欧諸語にも訳され、中世の百科辞典といえる十三世紀のボウヴェの聖ヴァンサンの『知識大観』(Speculum totius)にも、聖者伝集成として著名な『黄金伝説』にも入って広く親しまれた。

聖ジョザファトはインドの国王の子であり、城門で老・貧・病・死を見て俗世を厭い、聖者にあつて信仰に目覚める話である。この聖者伝をカトリック聖者伝として十六世紀に受け取った日本人が仏陀伝との類似に気付かなかったとは思えない。十七世紀末、西欧でも類似に気付く人が出、十九世紀にこの聖者伝が仏陀伝であることが立証されると聖人暦からは取り去られたが、この伝記中に含まれる寓話のいくつかは独立の作品となつたり「二つの小箱」の話のようにシエークスピアによつて『ヴェニス商人』中で利用されたりしている。獣に追われた旅人が井戸に隠れ木の根にすがつて難を逃れたが、見上げると木の根を鼠がかじつて井戸の底には毒蛇が待っているという、日本でも良く知られている話も、「聖ジョザファト伝」では一角獣に追われた旅人が木の上に難を避ける話となつて含まれている。この話は漢訳仏典中にもあり、わが国の『太平記』にも言及があるが、漢訳仏典の多くでは追う獣は象であり、『太平記』では虎に、井戸は大河に、木の根は草の根となつている。

仏典には寓話は数多くあるが、西欧の

「聖ジョザファト伝」には十ほどの寓話が入っている。その中、独立の作品を各国で生んだものは、四つほどである。この十の寓話中、他の作品に利用されたものは多いが、利用の度合には差がある。即ち容易に広く使われていくもの、伝播に適したものと、広がりにくいものがある。広く伝播するものは受容者の文化に応じて変形もしていく。老病死苦に出逢つて人生に疑問を抱く王子が賢者に出会つて改宗する枠組みは、仏教でもイスラムでもキリスト教でも利用できるものであった。仏陀伝はカトリックの聖者伝に変わり得たのであった。

しかしこうして広がるには細部で変更を加えなくてはならない場合が多い。純粹なままでは他の文化圏には受け容れられないことが多い。この細部の変更はまた文化の発展や相異を明らかにしてくる。仏教はインドに発し中国、韓国を経由して日本に渡来する間に日本的な形となった。しかし本質的に仏教としての共通性は残っている。同様にキリスト教もパレスティナに発し、西欧の宗教となる間に種々の変化を蒙っている。変化しなければ西欧の宗教になり得なかつたであろう。

### ユダとオイディプス伝説

イスラエル民族の間の一神教は、汎神的世界観、地母神信仰の地中海世界に広

がり、ゲルマン、スラヴの世界にも広まったが、受容されるために変化を余儀なくされた。その一例を中世ヨーロッパに広く行われたユダの伝記に見てみよう。

ユダは日本人のイメージでは「邪悪な裏切り者」であるが、実際に新約聖書を見てみると福音書ごとに解釈はまちまちであり、単純に割り切れない謎の人物であることが分かる。

ユダは祭司長の送る群衆に「わが接吻するものはそれなり、これを捕えよ」とあらかじめ打ち合わせておいてキリストに近づき、「わが主よ」と言って接吻してキリストを捕えさせた。このことは「マタイ伝」も「ルカ伝」も伝えている。ところがユダについて最も多く語る「ヨハネ福音書」ではこの接吻もユダの自殺も言及されていない。ヨハネ伝では「最後の晩餐」の時キリストは「汝等の中の一人、われを売らん」と言って弟子たちを驚かせる。ペテロと「もう一人の弟子」がそれは誰かと尋ねると、キリストは「わがひとつまみの食物を浸して与うるはそれなり」と言ってユダにひとつまみの食物を与えた。この折に悪魔がユダに入ると記している。

キリストはしかもユダに「なんじが為すことを速やかにせ」と言い、ユダは席を離れたが、弟子たちは財布を預かるユダが祭用の買物か施しに立ったと思い、キリストとユダの対話が分かっている（「ヨハネ伝」十三章）。「マタイ伝」「マルコ伝」「ルカ伝」共にユダは十二使徒の一

人と明言し、「ヨハネ伝」ではイエスはユダの足も洗っている。

ユダという名の弟子は二人いて、裏切ったのは「イスカリオテのユダ」といわれるほうであるが、この「イスカリオテ」の解釈にも諸説がある。これがもし「ケリオトからの人」の意であると十二使徒中唯一人、ガラテアの出身でないことになるそうである。このような点を探していくほど、ユダの人物、行動には捉えにくい点が出てくるばかりである。ペタニアで、ある女がナルドの三百デナリもする油をイエスの身体に注いだ時、周囲の人は女を咎め、イエスは女を弁護せねばならなくなった。この事件は四福音書とも伝えているが（「マタイ伝」第二十六章章、「マルコ伝」第十四章、「ルカ伝」第七章、「ヨハネ伝」第十二章、共観福音書）では弟子達が多く憤慨したのであって、油を惜しんだのをイスカリオテのユダに帰するのは「ヨハネ伝」のみである。「ルカ伝」「ヨハネ伝」ともに、女が髪で油を拭いたとし、「ルカ伝」が、女は罪人であったとするところから、長い金髪のマグダレナのマリアとして絵画では描かれるようになっていく。福音書でユダについて決定的な事実として語られている事実は、イエスを売ったことであり、このことから多くの悪人らしさが伝承の中のユダ像に加えられたと考えられる。「ヨハネ伝」のユダの言行も、ユダの行動の動機、解釈、合理化の努力として捉えることができる。

\*

ユダの行動は後世の人にとっても分かりにくいものであった。アナトール・フランスは『エビク羅斯の園』（大塚幸男訳・岩波文庫）で「予言の成就のためにこの男が銀三〇枚のために神の子を売ることが必要であつた。さればこの裏切り者の接吻は、後に聖遺物としてあがめられる槍や釘と同様、キリストの受難にとつて必要な道具の一つである。ユダが居なかつたらキリスト教の玄義は成就せず、人類は救われなかつた筈である」というパラドックスを取り上げ、芥川龍之介も「西方の人」の中でユダを論じ、武者小路実篤、武田泰淳、太宰治から河上徹太郎まで、日本人によるユダの弁明も異文化理解の例として扱える。

西欧でもさまざまな合理化が試みられているが、その中でも広く行われたのはユダの行為を出生の因縁にする解釈である。この説明は、十三世紀の聖者伝説の集成である『黄金伝説』(Legend Aurea)に要約された形がのっている。レゲンダ・アウレアはカトリック教会の早禱の際に朗読される聖者伝として、二八〇ばかりの聖人の伝記をジェノワの司教であったヴェラツツエのヤコブが集成したもので、「伝説」という訳語は原義とは合わない。ユダはもちろん、聖者ではないのでユダの項目はないが、ユダの死後、十二使徒の欠員を補充する際に選ばれた聖マツテア（「使徒行伝」第一章）の項に、ユダの伝記が語られているのである。

ヴェラツツエの至福者ヤコブによると、かつてイエルサレムにルベン、またはシモンといわれる男がいた。妻はシボレアといった。ある晩シボレアは夢で、生まれてくる子が種族を滅ぼすだろうと知った。月満ちて子供が生まれると両親は悩んだが、殺すこともできず、この子を籠に入れて海に流した。籠はスカリオットという島に流れつき、この島の女王に拾われる。子供のない女王は大いに喜び、こっそり育てさせる一方、妊娠をよそおった。そして子供を産んだと称しユダを見せ、島中が王子の誕生に喜んだ。ところが女王は、ついで本当に妊娠し王子を産んだ。二人の子供は順調に育ったが、ユダは王の子と遊んでいて、からかったり争ったりして泣かせてしまう。女王はユダを叱ったり叩いたりしたが、いつこにユダは王子をいじめるのを止めないので、とうとうユダは捨児であったことが公表されてしまう。事実を知ったユダは人知れず王子を殺してしまおうが、追求を恐れてイエルサレムに逃れ、時の総督ピラトに仕える。

二人は馬があい、ユダはピラトの側近となった。ある日ピラトが宮殿から隣りの果樹園を眺めると、たわなに枝になつて果物が目につき、どうしても食べたくなり、ユダは壁を乗り越えて盗りに入った。ところがこれこそユダの父ルベンの家であった。盗人に気付いたルベンはユダと争い、ユダは石で父の頸骨を打ち、父とは知らずに殺してしまった。果

物を持って戻ったユダはピラトに事件を報告したが、ルベンの死体は夜まで発見されず、変死とは思わずにことは処理されてしまったので、ピラトはルベンの家邸をユダに与え、未亡人となったシボレアをめとらせた。結婚後しばらくしたある日、シボレアが深い溜息をつくのを見聞きとがめたユダは理由を尋ねる。シボレアは世の中に自分ほど不幸な女はいない。私は産んだ子を海に溺れさせ、夫に先立たれたばかりか、悲しみのうちにピラトにお前と結婚することを強いられたと物語った。ユダも自分の身上話をする。その間にユダは自分こそ父を殺し母をめぐってしまったことに気付き、深い悔恨に身をせめられる。そして母の勧めで、イエスのところに罪の赦しを求めに行くことになる。

ここでヤコブは、「ここまでの話は本来は公認されぬ外典によっているもので、真偽のほどは読者の判断に任せる」と断っている。イエスはユダを弟子とし、使徒の一人として選び、会計係とした。彼は収入の十分の一を自分の取り分としていた。三百デナリの香油がイエスに注がれたのは、彼には不当と思われたので、イエスを三百デナリの十分の一、即ち、自分の取り分である三十デナリで（「マタイ伝」第二十六章）売ったという説もある。直後に後悔し首を吊った。身体はさけ腸は地に散ったが、口からは何も出なかった。

主イエスの口に触れた（ユダの接吻）

口が汚されるべきではなく、悪企みをした腹から死ぬべきであるからである。裏切りの言葉の出た喉は当然、繩でくくられ、宙吊りで死んだのは、人間の場所（地上）でも天使の場所である天でもなく、デモンどももの領域である空中で死んだというのである。地上の四方で三位一体を示すべく、主イエスが十二人選んだ十二使徒が一人欠けたのに気付いたペテロは、七十二人の弟子から二人を選んで、くじを引き、マツテアが選ばれることになる。

以上がレゲンダ・アウレアによるユダ伝の梗概で、中世の合理的解釈であるが広く行われた。

このユダ伝が、西欧の伝統的テーマとして有名なオイディプス伝説であることは説明を要しまい。知らずに父を殺し母を姦したエディプス王の悲劇は、王の息子達が互いに殺し合い滅んでいくテロバイ王国物語として、古く『オディセー』十一歌にも言及があり、イヨカステ王妃、アンティゴネー、パルテノペー、ヒッポメドーン、ティレジアース等の姿を西欧の文学に遺した。アイスキュロス、ソポクレスも扱い、ラテン時代にはセネカ、スタテイウスの題材となった。中世フランス語文学が生まれるとすぐに「テロバイ物語」が書かれ、十三世紀には散文訳もできるが、このテーマは常に焼き直して、中世には俗語文学では新しい作品を生まなかった。その点ソポクレスの「オイディプス王」の上演が、十六世紀にイ

タリーのヴィセンチアで再演され、近代劇の展開に大きな役割を果たしたのは印象的である。

中世期には禁忌があったかとも見えるこのテーマは、ルネサンス以降コルネイユ、ヴォルテールが取り上げるところとなり、アンドレ・ジイドの「エディプス王」、ジャン・コクトーの「地獄の機械」(マシ・アンフェルナル)に至るのである。西欧人の心に呪縛的であるかのように何回も取り上げ続けられているこのテーマは、中世期に独自の作品をなぜ残さなかったのであろうか。

オイディプス王がわれわれに悲劇の主人公となるのは、彼が、自分のあらゆる善意にもかかわらず、暗い運命から逃れられない点であろう。父を殺す運命を知ったオイディプスは、真の父と思っていたポリュボスのもとから、運命を逃れようと旅に出て実の父を殺すことになる。スフィンクスの謎を解く智力も運命をいかんともなし難いのである。オイディプスは運命の操る駒であり、その点では免責されている。

ギリシヤ悲劇の宿命観はキリスト教世界観とは相容れない。「ユダ伝」はどう処理したであろうか。作者は注意深くユダに自分の将来の行動の予言を知らせぬように配慮していると思われる。ユダは自分の宿命を知らずに行動しているようである。父殺し、近親相姦はユダの犯した邪悪な罪になるが、しかし、たとえ本人が知らぬにせよ、もし出生にまつわる宿

命があればユダは免責されてしまう。

この点で想起されるのは、兄妹相姦より生まれた「聖グレゴリウス」の伝記である。罪の子の出生に宿命はない。生まれた子は海に流されある島に流れつき、修道院で育つが、自分を捨てたと知って出自を知ろうと旅に出て、知らずに母をめぐってしまふ。偶然に自分の行為を知ったグレゴリウスは自ら、海上の岩島に鎖で身をつなぎ十七年間苦行をし、選ばれて法王にもなったという伝説である。

これは中世説話集『ゲスタ・ロマノールム』に収録されている。十三世紀にドイツの作家ハルトマン・フォン・アウエがこの伝説から作品をつくった。一九三八年にはこれが『岩の上のグレゴリウス』の題で刊行され、これに題材を採ったトーマス・マンの小説『選ばれし人』によっても知られているわけであるが、この伝説には宿命の予言は全くない。兄妹相姦によって生まれ、母を姦するほど罪深い人間でも、痛悔により、神に法王として選ばれ得ること、贖罪の可能性、神の慈悲の強調に話は変わっているのである。しかし兄妹通じて生まれた子は、忌むしい途をたどるといふ型があるのも見逃せない。

オイディプス王のテーマは文学として新しい作品を産みにくかった。しかし深く表象的なこのテーマは、ユダの系譜に姿を変え、『グレゴリウス法王伝説』では、神の慈悲を顕現させる役割を果たし得るところまで到達したといえよう。

### 変形を恐れぬ決意が交流を生む

オイディプス伝説は宿命のテーマを捨てて伝播し得たのである。これについて、学生時代教室で西脇順三郎先生がオリジナリティーについて言われたことを想起する。先生は独自であるというだけでは意味がないことを説かれ、良いものは必ず真似をされることを、まずいためだれも真似ない「峠の茶屋の草だんご」の「独自性」で説明された。

文化の伝播では変わる部分、変えても良い部分と本質的な部分をしっかりと捉えることが肝要であろう。交流を考えるには変形をやたらに怖れない決意が必要であると思われる。

# 仏教と文化交流



## 聖天信仰をめぐる

まえ だ せん がく  
前田 専學

(東京大学文学部助教授)

文化交流の必要性が叫ばれるようになって久しく、筆者の所属する大学の文学部にも昭和三十九年に文化交流施設が設置された。少なくとも古代においては、

おそらく移住、遠征、植民、交易、伝道、求道等々に付随して、文化の伝播・移植・交流が自然に行われたのであろう。しかし近年は、交通機関、放送・通信等の伝達方法の長足の進歩に伴って、意識的・計画的に文化の交流をはかり、相互理解を深めることが、国家的規模で推進されるようになってきている。

文化交流といえは、何か分り切ったことのように思われるが、その意味するところは必ずしも明瞭であるとは言えない。文化交流という以上、本来は、二つ以上の文化伝統の間で、相互に、伝播・影響・移植等が行われることを指しているのだから。しかし一般的には、一方的な伝

播・影響等をも含めているのではなからうか。

また時間的にも、同時または同時代に行われるもののみ限るか、あるいはさらに長い、限定を受けない時間の流れの中で起こるものをも含めるかも問題となろう。もし文化交流を、文化の同時代ないし同時代的相互伝播・影響と規定するならば、交通機関・伝達方法の未発達であった時代には、文化交流はほとんど不可能であったと考えられる。

時間的限定をしない場合にも、日本文化を中心に考える場合には、ほとんど外国文化の一方的な影響、伝播・移入であって、文字通りの文化交流が行われ始めたのはそれ程遠い過去のことではない。文化交流についての総括的議論をする程の時間的余裕も紙数も与えられていないので、本稿においては、仏教とともに

インドからわが国にもたらされた聖天<sup>しんてん</sup>信仰を紹介することにした。

### 聖天様のルーツは ヒンドゥー教の神ガネーシャ

昨年七月、金沢大学へ集中講義に出張した折のことであった。ある日、講義を済ませた後、同大学のY教授に案内されて金沢見物に出かけたが、途中、はからずも鬼川の聖天様で知られる、片町二丁目の高野山真言宗養智院を訪れた。

この聖天様を探す気になったのは、たまたま近くを歩きながら、その近くが金沢のかつての色街であるという事から、おそらくどこかに聖天がお祀りしてある寺があるに違いないという発想からであった。東京では浅草観音の近く、聖天町にある聖観音宗本龍院の待乳山聖天、品

川区大井関ヶ原町にある天台宗大福生寺の大井聖天などが知られており、今でも諸種の災難を除き、諸願成就を果たす神、財宝・夫婦和合の神として、とりわけ水商売の人々の信仰を集めている。少し古い調査ではあるが、昭和三十五年頃には、全国でおよそ二四〇箇所<sup>○</sup>に聖天がお祀りしてあるといわれる(『聖天信仰の手引き』大井聖天堂、三版、昭42。以後『手引』と略す)。

聖天は、日本では一般に、天尊、歡喜天、大聖歡喜天、大聖歡喜自在天、誑那鉢底、毘那耶迦としても知られ、觀世音菩薩が大慈悲心の力によって、歡喜天という天部に属する神の姿をとったものと信じられている。

この歡喜天の像は、他に見られない異様な姿をしている点に特徴がある。すなわちその身体は人間の形をし、首から上が長い鼻をもつ象面をしており、手が四本であったり、ある場合には六本であったりする。また身体は一つで、手が六本三つの象頭をもつ像もある。しかしもつとも有名なのは双身歡喜天と呼ばれるもので、象面の男女の二尊が互にしつかりと抱き合っている姿の像である。このような姿のためであろうか、一般に秘仏として公開しないのが通例である。金沢の聖天様も秘仏とされ、筆者も直接お参りするとは許されなかった。このような異様な神様は一体どこから来たのであろうか。

この聖天のルーツを辿ると、途中の変

遷についてはよく分らないが、結局ヒンドゥー教の重要な神々の一つであるガネーシヤ(Ganesha)に行きつく。ガネーシヤとは神群の主を意味し、同じ意味を示すがナパティ(Ganapati、誑那鉢底)という名称も用いられる。

ヒンドゥー教ではシヴァ神とヴィシュヌ神とが最も重要な神であるが、ガネーシヤはこのシヴァ神を父としている。シヴァ神は別名をマハーカール(Mahakala)といい、大黒はこの語の訳語であって、七福神の一人である大黒様のルーツである。かれの妻はパールヴァティー(Parvati)であり、ガネーシヤは両神の間に生まれた長男である。

名前としては早くインド最古の文献『リグ・ヴェーダ』(紀元前十二世紀から、十世紀頃成立)に見られるが、現在の形で登場するのはインドの国民的『大叙事詩』の一つである『マハーバーラタ』(前二世紀から紀元二世紀の間に成立)においてである。それ以来今日に至るまで広く一般に崇拜されている。

このヒンドゥー教のガネーシヤがいつの頃かさだかではないが、仏教の守護神として、仏教の中に組み込まれるに至り、仏教とともに日本に将来されたのである。

### 好物は甘いお団子

日本で聖天を礼拝する時には、三礼を行い「帰命頂礼、自在神力大聖歡喜双身天王、雜羅山中諸大眷属、悉地成就」と

唱える(『手引』六五ページ)。これは、雜羅山に住んでおられる聖天様や御眷属の衆生救済の御誓願を心から信じ、身も心もすべて聖天様におまかせ申上げます、という程の意味であるが、この中の「雜羅山」ということばが、はからずもそのルーツを示唆している。「雜羅山」とは、伝説上ヒマラヤ山中にある、シヴァ神の住所とされているカイラーサ(Kailasa)山のことである。

ヒンドゥー教のガネーシヤのもつとも普通に見られる像は、聖天と同じく象面人身の姿をし、垂れさがったお腹をし、その乗物である小さなねずみの上に乗っているか、あるいはねずみが側にかしづいているかである。かれの手は四本であり、それぞれ貝(あるいは睡蓮、円盤、棒(あるいは斧)をもち、さらにかれの好物である甘い二種の団子モーダカ(modaka)をもっている。

日本にある単身の聖天像の中には、右手に宝袋を、左手に大根をもっているものがある。その場合、宝袋は財産・相愛和楽等一切の福の元が無尽にその中に入っていることを示し、大根は健康を象徴しており、聖天を祀る寺にはこの宝袋と二股大根の紋を用いるところが多い。

インドのガネーシヤとはその持物が異なっている。しかし興味深いのは、聖天への供物としてお団(歡喜團)を用いることである。これは宝袋に似せて作ったものとされており、インドのガネーシヤの持物モーダカと密接に繋がっているの

あろう。お団は米と餅米とを蒸して搗いた皮に餡を入れて油で揚げた、こげ茶色をしたお菓子である。筆者は幸いにもこれをお土産に頂くことができたが、今日では、金沢にはこれを作る所もなく、わざわざ京都へ注文しているとの事であった。生駒山や待乳山のような大寺では坊さんが済戒沐浴して造るといわれている(『手引』一七六ページ)。

インドのガネーシヤは肉食で、そのためにお腹が垂れさがっており、(布袋腹(Lambodara)という別名がある程である)が、とくにモーダカはかれの好物である。ある時、蛇がガネーシヤをびっくりさせたために、かれはあわてふためいて乗物であるネズミから落ちてしまった。ところが運悪く、その衝突で、かれの大きなお腹がはつきりと開いて、今食べたばかりの大量のモーダカがごろごろと転がり出てしまった。そこでかれは再びモーダカをお腹につめ戻し、そのにくい蛇を捕えて、それでお腹をしばって二度とばつくり開かないようにした、という伝説がある。

### 象面人身のいわれ

聖天と同じく、ガネーシヤも象面人身であるというのは前に述べたが、その理由についてもヒンドゥー教の伝説がある。ある日、シヴァ神とパールヴァティー女神は、一対の象が交尾しているのを見て、

自分達も(象の型)で楽しもうと相談した。その結果、象面人身のガネーシヤが生まれた、という。

別の伝説もある。シヴァ神には入浴中のパールヴァティー女神を驚かせる癖があった。女神はそれが嫌いで、ある日、シヴァ神の留守中に、自分の身体をふけやあかて少年の像を作り、自分の入浴中、その浴室の番をするように命じた。丁度その時シヴァ神が帰宅し、浴室に入ろうとしたが、その少年が妨害したので、シヴァ神は怒って少年の首を打ち落してしまったのである。悲嘆にくれる女神を慰めるために、シヴァ神は一番最初に手に入った首をその少年の胴体につけた。その首がたまたま象の首であったという。ある伝説によると、人間は小宇宙を、象は大宇宙を表わし、象面人身は小宇宙と大宇宙との一体性を示しているといわれている。

### 障害を取り除く神

ガネーシヤは、本来は破滅・不運をもたらす障害神、作障神であり、成功の妨害者と考えられ、ヴィナーヤカと同一視される。ヴィナーヤカを怒らせると、かれは呪いをかけ、その結果、王子は王国を継承できず、娘は花婿を得ることができず、妻は子供が得られず、学生は成功せず、あらゆる企ては失敗に帰すると信じられている。

しかしこの作障神としての属性は、次第に専らヴィナーヤカに移され、ガネーシヤ自体は一般に障害を取り除く神として崇拜されるに至っている。むかしアビナンダナ王子が神々のために大きなお祭りを行おうとした。しかしその席に天界の王インドラ神——『リグ・ヴェーダ』時代からの神であり、同じく仏教の守護神とされ、日本では帝釈天として崇拜されている——を招待しなかった。それをきいてインドラ神は激怒して破壊神であるカーラ(時間)——シヴァ神を指す——を呼び、かれにアビナンダナ王子の祭りを止めさせるように命じた。そこでカーラは障害魔神(Vighnashura)となってアビナンダナ王子を殺害した後、世界中を駆けめぐり、時には姿を顕わし、時には姿をかくして、あらゆる祭りを妨害した。

このためにヴァシシュタ仙等はほとほと困り抜いて、創造神ブラフマー(梵天)の許に、保護を求めて赴いた。その時ブラフマーは、ガネーシヤ以外のいかなる神もカーラを征服する力をもたないといひ、カーラを超越した唯一の神ガネーシヤに祈るように命じた。それにこたえてガネーシヤはその障害魔神を退治し、かれを自分の保護の許におき、自分に忠実に仕えさせたという。

こうしてガネーシヤは別名障害王(Vighneshvara)と呼ばれる。万が一ガネーシヤに祈らず、ガネーシヤを崇拜しないことがあれば、必ずや障害が起るものと信じられている。それ故にすべての祭りの始

めには△二杖の神、障害魔神と障害王、ともに喜びにならんことを」と唱えられる。またヒンドゥー教の書物は「ガネーシヤに帰命する」という祈願文で始まる。南インドには、子供が入学すると、「へハリ神よ、聖ガナパティに帰命する」と唱えて、文字の学習を始める地方があるときいている。商人が経済的困難に立ち至ったり、破産したりすると、ガネーシヤの像を逆様に立てることによってその苦悩を表わすといわれている。

日本では聖天は、一般に十一面観音の化身と見做され、観音が衆生済度の方便として、ガネーシヤに姿を変えて現われ、ガネーシヤのもつ力を示して衆生を救う（『手引』二三七ページ）と信じられており、障害を取り除く神とされている。しかし聖天を信じている間はよいが、信じなくなるとすぐ罰をあてられるとか、約束したことを守らないと罰があたる、などといった、「へこわい神様」として見られている面もある。これはガネーシヤが作障神であったことによるものであろう。

## 学問の神

ヒンドゥー教徒の宗教生活、日常生活において、ガネーシヤが文字の守護神、聖典の筆記者、学問の神として重要な役割を演じていることは注目に価する。ベナーレス・ヒンドゥー大学のキャンパスの中には大理石のガネーシヤ像が祀って



ガネーシヤ神



聖天像

あるが、かつて筆者が同大学を訪ねたとき聞いた話によると、試験の時ともなるとたくさんのお客様が来るとのことであった。日本の天神様に相当するのであろう。日本の聖天にはこの面は全く失われているように思われる。

ガネーシヤが利発である——というより、むしろ奸智にたけていることに関しては興味深い伝説がある。ガネーシヤにはカールテイケーヤ (Kartikēya)、またの名をスカンダ (Skanda) という弟があった。かれは軍神であり、スカンダと言う名称は「アレキサンドロス」に由来

し、その神の姿はかれの活動が投影されていると主張する西洋の学者もある。日本では韋駄天として知られ、「韋駄天走り」などということばの中に生きている。

ところがガネーシヤとカールテイケーヤの兄弟は、二人の娘シッデイとブツデイーにともに恋をしてしまうのである。そこで二人は、世界一周の競走をして、勝った方がこの二人の娘と結婚することができるとにした。走ることに自信のあるカールテイケーヤが一所懸命に地球を駆けめぐって帰ってみると、ガネーシヤはすでに二人の娘と結婚していたのである。カールテイケーヤが走り回っている間、ガネーシヤは家に留って地理に関する古文書を研究して、その文書をたくさん引用して自分もすでに世界を回って来たということを証明し、その競走の勝者となったという。またガネーシヤはその父シヴァ神のまわりをひと回りして、自分は宇宙の主のまわりを回ったと宣言して、その競走に勝ったという別の話も伝えられている。

## 性の世界

ガネーシヤは、前述したようにガナパティともいわれ、ヒンドゥー教徒に広く崇拜されている。いつの頃かはつきりしないが、おそらく七、八世紀の頃であろうか、ガナパティを崇拜し、かれを永遠に実在する世界の第一原因であり、かれ



のもつ幻力マーヤーによって、ブラフマ一等の神々をも創造すると説くヒンドゥー教の一派ガナーパティ派が成立した。この派の中には、手に蓮をもち、ひざの上に坐っている妻によって抱擁されている象面人身のマハー・ガナーパティを崇拜する者もあり、崇拜の形式も、飲酒や性交を含む左道密教的なものであったらしい。とくにウッチシユタ・ガナーパティの崇拜者達は極端で、かれらにとつては、男性はヘーランバ（『ガナーパティ』と、女性性は性カシヤクティと同一視して行われる乱交が最高の崇拜行為であったといわれる。

ガナーシヤは、マハー・ガナーパティなど三十七種類もの形をとるとされているが、筆者の知る限り、日本で見られる双身歓喜天像のような姿のものは少なくともインドでは未だ見出されていないようである。しかしインドにおいてもまたチベット等においても男女抱合の像そのものは珍しいものではなく、ガナーシヤが双身の姿をとるに至ったこともマハー・ガナーパティ等の存在を考慮すれば決して理由のないことではない。

しかしインドやチベットなどとは異なつて、日本では双身像を秘仏として公開していないのは、日本人の性意識などに関係があるのであろうか。日本の仏教では性の問題はタブー視されて来ており、法然は肉食妻帯しても念仏さえ唱えれば往生できると、日本で初めて大胆に説いたが、自らはついに妻帯しなかった。そ

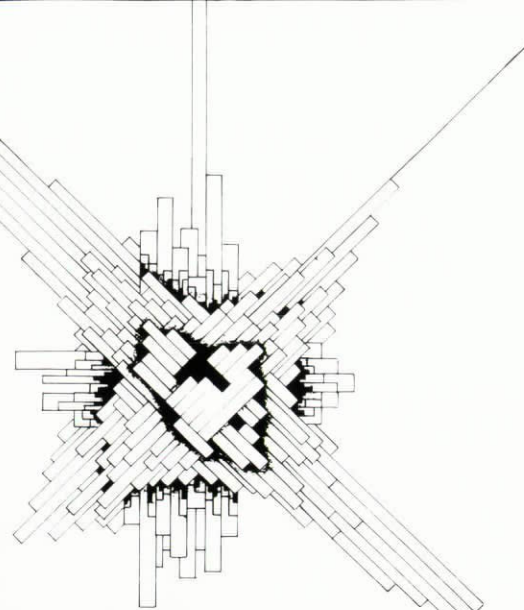
れを初めて実行に移したのは親鸞であった事は周知の事実であるが、それも多くの深刻な精神的葛藤を経てからであった。親鸞を妻帯にふみさらせた契機を推測せしめるものに『親鸞夢記』がある。若き親鸞——当時は善信といった——がおそらく性に悩み、六角堂に参籠した折、救世大菩薩が僧形をとつて示現し、親鸞に「行者宿報にて、たとひ女犯すとも、我れ玉女の身となりて犯せられむ。一生の間、能く莊嚴して、臨終に引導して極楽に生ぜしめむ」と告命したという。歓喜天が双身の姿をとつたことについては、この夢記を想起させるような話が伝えられている。

ある時、親鸞菩薩が、常にいろいろの障害をひき起している歓喜天をその大慈悲心から仏教に帰依させようと思ひ、まずヴィナーヤカの娘の姿をとつて歓喜天の前に姿を現わした。歓喜天はその娘を見て、大いに愛欲の心を起し、娘の身体に触れようとした。その時娘はかれを拒絶し、「私はヴィナーヤカの娘に似ているが、昔から仏教を信じ袈裟を身につけております。もし本当に私に触れたければ今後はいつまでも仏法を守り、また諸々の修行者に障りを与えず、害毒の心を起さぬことを約束できますか。それができればその時こそはじめて、貴方は私の親友になるでしょう」といった。親鸞はそれを誓ったので、娘は笑みを含んで相抱いたという（『手引』二二〇ページ）。

地へ至る手段としてストレイトに認めていこうとするインドとは異なつて、双身合体をできる限り美化し、それをオブラートに包んで飲み易くしようとする努力がはつきりと感知される。

文化と変容

ガナーシヤが、ヒンドゥー教徒の間でシヴァ神、ヴィシュヌ神、並びにそれぞれの妻神に次いで幅広い人気を得ているのは、おそらくかれが障害主であることと文字・学問の神である点によるのであろう。日本の聖天は、何時、どこで、いかなる変容をうけて来たかは定かではないが、ガナーシヤの持つ文字・学問の神という属性は欠落してしまい、インドのガナーシヤには全くないか、あるいはあるとしても顕著ではない夫婦和合の神という属性が強調され——歓喜天という名称も原因となつているのであろう——一般民衆の広範な尊崇をうけることなく、主として水商売の人々の信仰の対象に留まった。一方では双身のガナーシヤを受け入れながら、他方ではそれをできる限り美化し、さらには秘仏化して公開をばかる所に、屈折した日本人の性意識の一端を見る思いがする。このような事実は異質の文化伝統間の交流を考ふる上で、何らかの示唆を与えているように思われる。



# 文化交流・私感



むら かみ ひょう え  
村上 兵衛

（日本文化研究所専務理事・松本重治部会・国際  
交流研究部会）

## 結果としての「交流」

私は、現在、財団法人・日本文化研究所（会長・東畑精一）をお預かりして、日本文化の海外普及——というか、海外のできるだけ多くの人びとに、日本文化をより深く理解して貰う、という仕事に携わっている。しかし、いわゆる「文化交流」をやっている、という実感は、ほとんど持っていない。

そもそも、この日本文化研究所は、私も言い出しっぺのひとりです。私じしん、日本文化というものを世界の中で考えてみたらどうなるだろうか、そういうことを考えてみる研究所が、日本にひとつくらいあっても良いのではないか——という、きわめて単純素朴で、私に關してい

えばいささかエゴイスチックな望みで、八年ほど前に発足したものである。

所員は数人いるだけで、東畑会長の言に従えば、日本でいちばん小さな研究所のひとつに過ぎない。出発に当たって東畑先生は、二つのことを言われた。組織を大きくする必要はない、そして、もうひとつは「君の好きなことをやれ。そうしなければ長つづきしない」と。自分に経営能力のないことを棚に上げて言えば、私はおおむね右の先生の言葉に従って、今日までやってきた。

日本文化とは何か。そんな大それたことを考えてみようと思ふたものの、しかし実際、「事業」をはじめるとなると、漠として掴みようがなく、とりあえず日本の文化の英語版による紹介の本の制作からはじめた。文学から手をつけ、歴史・政治・経済、日本文化を理解するために

基本となる現代名著の要約——といった仕事をすすめる一方、日本の文化のひとつの特色をなしているのではないかと思われる俳句、短歌、茶道、華道、武道、盆栽等、庶民の中まで広がっている参加芸術ないし芸能および武道（適当な総合的名称がないので、私は、これを「生活芸術」と呼ぶことにした）について日本・米国・カナダをフィールドに調査研究を行ったりした。

そのような仕事の過程で、私は多くの海外の人びとと知りあった。文学についていえば、古事記から開高健にいたる四十ほどの作品、作家についてのエッセイのアンソロジーを編集するため、世界中の人びとに書いて貰った。歴史については聖徳太子から川端康成に至る小論文を、同様、世界中の日本文学者・歴史学者を動員してまとめた。『日本文化百選』

Hundred Things Japanese) という本は、「初詣」「雛祭」「萱」「ふんどし」「立小便」といった日本の風俗習慣、事物から「公議」「団体」「余白」「間」といった社会における人間関係や美意識についての、外国人によるエッセー集で、好評を得たために、『続・日本文化百選』(A Hundred More Things Japanese)も発行した。それだけでも、百人を超える海外の人びとと共同作業をしたことになる。

それらの人びとの大部分に私は会い、注文を出し、議論し、なかには意見の相違で喧嘩別れをした人もないではないが、ほとんどのひとと、今日もつきあっている。むろん、手紙によって寄稿を依頼したひとも多く、手紙で内容について議論を取り交すのは、かなり骨が折れたが、それでもお互いに満足したものに仕上がると、その思い出は苦労が多かったほどいつまでも残る。時どき手紙を交換し、いつか会える日を楽しみにする。そして、実際に研究所のベルがとつぜん鳴り、本人が「今日は」とそこに立っていたりするの、本当に心温まる体験である。

また、海外で、そのような「一緒に仕事をした仲間」に会うのも、いっそう楽しい思い出になる。昨年の秋も、ニューヨークで寄稿家のひとりであったシャロン・アン・ローズさんに何年振りかて会い、一夕、グリニッチ・ヴィレッジを案内して貰いながら、愉快に過ごした。

また、研究所が、日米間の「視聴覚交

流ワーク・シヨップ」を主催したとき、講師のひとりとしてお招きしたジャクソン・ベイリー教授を、インディアナ州のリッチモンドという小都市にあるカレッジに訪ねたときには、大歓迎をしてくれ、校内のみならず隣接オハイオ州の日本文化普及に熱心に携わっているグループの会合に案内して貰うなど、印象深い一夜をそこで過ごした。

——こう書いてみると、私も結構「文化交流」に携わっていることになるが、それはあくまで結果であって、目的ではないような気がする。文化交流というもの、のむずかしさも、たぶん、その辺にもあるのではないだろうか。

### リチーさんの再三の「喧嘩」

私は、西欧ならびにその文化の影響力のつよい地域の人びとが、日本文化を知るといふことは、大切なことだと思っている。それは、一方では、日本への理解者をふやし、ある意味での日本の安全保障に役立つこともあるが、むろん話それには止まるものではない。とかく、西欧の文化を唯一の価値基準として育った人びとが、日本の文化を知るとは、世界の多元性を知ることであり、同時に彼ら自身の文化(アメリカ人ならばアメリカの文化)を、より深く知ることである。大きくいえば、そのことは世界の共存、世界の平和に寄与することだろう。

むろん、海外の人びとに多くまじわれれば、こちらもその影響を大きく受ける。それは知識としてよりも、相手の文化の肌合いといったものを理解するようになることである。

私が研究所をはじめたころ、私のなかには、やはり「毛唐」という観念が巣喰っていた。この言葉は、いわば明治以来の日本人の西欧コンプレックスの所産で、研究所では当初からそれを禁句にはしていたが、口に出す、出さないは別にして、それは多くの日本のインテリの心理のなかに存在している。

私も、しばしば西欧人の理屈っぽさ、しつこさ、うんざりした。早い時期に仕事を手伝って貰ったエドワード・ファウラー君が、なにか文句を言い出すと、結果までには二時間も三時間もかかるのであった。今から考えてみると、相手も日本文学の研究者の卵だから、日本的な遠慮、遠まわしな表現をかなり採り入れながら議論しようとするので、いっそういやらしいことになったのではないかと思うが、とにかく私はしばしばうんざりし、あまり遅くなるので、「とにかく夕飯でも食いながら話そう」と、その議論をさらに深夜に持ち越したことも、いっさいならずあった(当時、私の中に、西欧人には一歩も退くまい、曖昧なところで逃げ出すまい、といった気負いがあったことも事実である)。

私が、西欧人との議論の仕方、総じて会話の仕方を覚えた(と思う)のも、こ

のテッド（エドワード）君や、詩人肌のドナルド・リチャーさん——黒沢、小津作品をはじめ、多くの日本の映画を海外に紹介した——のお蔭だった、と今にして思う。このリチャーさんとは、意見の相違から再三にわたり「喧嘩」し、ひそかに「毛唐め」と舌打ちしたことも、何度かあるが、本人の繊細な気質と、西欧人らしい鋭い精神の双方を理解するにつれて、親しみを感ずるようになった。

また、テッド君も、その後、カリフォルニアに帰って勉学をつづけ、また一年ほど日本に再留学したときには、二カ月に一度ほど麻雀で徹夜し、その勘定のつけをカリフォルニアの彼の家で清算しよう、と別れたまま、ここ二年ほど会っていない。

それはともかく、私が「アメリカ人」について学んだことがあるとすれば、まず、このリチャーさんやテッド君からであつた。

### 卵は卵、というわけではない

人間の交際が或る程度深まり、そして海外に旅する機会がふえると、相手の国の文化についても、認識は少しずつ深まって行く。たとえば、こんな話はどうだろうか。

昨年、私は、研究所で年一回出版している雑誌『日本文化』に、近ごろ売り出しの向田邦子さんに寄稿して貰った。向

田さんは「日本の女」と題するエッセイを書いてくれた。その内容は、日本のホテルの食堂で、アメリカの中年および老年の女性客たちが、朝食を注文するときの光景を見ての感想である。

彼女たちは、それぞれに「ポーチド・エッグ」「プレーン・オムレツ」と、めいめい違ったものをほつきりと注文し、しかもポーチドが料理を運んできたときには、二人の老婦人が「違う」と突り返した。それについて、向田さんは、ほつきりした自己主張を立派なものと認めながら、同時に日本の女たちの見栄と同時に、含羞、つつしみといったものに思いを致し、卵は卵じゃないか、と考える。

このエッセイは、一般の日本人には好評を得たようで、その証拠に、日本の雑誌から、いい記事を抜萃して海外に知らせる英文雑誌『ジャパン・エコー』にも翻訳転載された。しかし私じしんは、向田さんの感想に半ばうなづきながら、半ばどこか可笑しい——と思っていた。が、どこが可笑しいかは定かたなく、疑問はそのまゝ意識の底に眠ったままになっていた。

その夏から秋にかけて、私は一月ちかくアメリカを旅し、そして少しづつ謎が解けてきた。それまでの欧米旅行において、私はあまり熱心な朝食摂取者ではなかった。簡単にいうと、欧米式（ここではアメリカ式）朝食があまり好きではなかったのである。しかし、その旅では毎日よく朝食を摂った。それもホテルで

はなく、ホテルに近い「朝めし屋」とか、大学のカフェテリアが多かった。

そして改めて気づいたことは、アメリカの一般の朝食では、温かい、料理らしい料理といえは卵しかない、という事実であった。だからこそ、卵にはふつう茹で卵から始まって（近ごろは面倒なのでポーチド・エッグで代用するところが多いが）、スクランブル、目玉焼（これも一面か両面か、そして焼きぐあいの注文がつく）、オムレツ、そしてつけあわせとしてのハム、ベーコン、ポテトが、たとえ大学のカフェテリアであろうと、備えられているし、注文可能である。そして私じしん、いつの間にか、今朝は何にしようか、と真面目に考え、その日によって「トウ・エッグズ・フライド。オーバー・イージー」とか「エッグ・ワン・ポイルド。スリー・ミニッツ」などと口走っているのがあった。

そして、さきに触れたベイラー教授を訪ねたとき、朝、夫妻ごいっしょで大学の近くのカフェテリアに案内され、ここでもやはり卵の前だけは行列が渋滞し、「料理」されている光景に触発されて、やつと向田邦子さんのエッセイの「可笑しさ（不足の部分というべきかも知れない）」に気づいた。

私は、ベイラー教授に、向田さんのエッセイの大意を説明し、彼女は「卵は卵じゃないか（腹に入ってしまったら皆おなじ）」と感じたわけだが、「しかし、アメリカ人にとっては、朝、どんな卵を食べる

かは、重大問題のようですなあ。卵は卵、とは行きませんね」と、言った。

するとベイリー教授は、真面目な、おごりかな態度で答えたものである。

「そうです。それはじつに重大な問題です。卵は卵、というわけにはいきません」

そこで私はつけ加えた。「日本人が、もし鯖を注文して、そこに鯖が出てきたならば、これは違うと突っかえすでしょう。

それを見たアメリカ人は、フィッシュ・イズ・フィッシュと笑うかも知れませんが、しかし日本人にとってはこれは重大問題、魚は魚とはいかないでしょう」

向田さんが指摘したように、日本人と西欧人の自己主張の仕方、程度が違うというものは、たぶん正しいだろう。しかし、「彼らにとつての朝食における卵の意味」を理解しないで批判するならば、それはちょっと気の毒——というのが、私の結論である。そして東西の、いや東西に限らず、異国の文化には、つねにこういう誤解がつきまとうものであり、いくら相手の文化を深く知ったつもりでも、なお誤解は残るだろう。そして、誤解が最後まで残るといふことを、当然のこととして平静に認識できることも、文化交流のひとつの効用である。

### コスタリカを知らない平和主義者

いわゆる開発途上国の人びととのあいだでは、日本人はより多くの誤解を犯し

がちである。私は、コスタリカのヒルダ・チェン・アプイ教授とはじめて会ったときのことを忘れない。

私は、何気なく「コスタリカの人たちは、日本についてどれくらい知っているでしょうか」とたずねた。すると彼女は、やや毅然とした面持で、つぎのように答えたものである。「日本人がコスタリカについて知っているよりは、コスタリカの人間は日本についてよく知っています」

たしかに日本人の中で、中米の、メキシコの南にヘソの緒のようにつながっている「小国」が、どういう順序で並んでいるか、知るものはほとんどいない。私

じしん、コスタリカが九八パーセントの「白人国」で、生活レベルはそう高くないにしても、教育のさかんな、軍備を廃止した国——とは、アプイ教授に会うまで知らなかった。

私が、はじめてこの国を訪ねたのは昨年春のことだが、アプイさんと再会して夕食をともしたとき、私の無知から、またちょっとした議論になった。私が、

メキシコやブラジルの印象から、「ラテン・アメリカでは大学の人文系教授の地位が低い」と言ったことにアプイさんは反論し、しばらく応酬がつづいたのである。

コスタリカでは、けっしてそのような事実はなく、むしろ尊敬されている、というところで（事実その通りであった）、私は「コスタリカを除いて、ラテン・アメリカでは……」と言わなければならなかったのである。

コスタリカが軍備を放棄した国家である事実も、私を驚かせた。日本のインテリのなかでも、その事実を知っているものはほとんどいないのではあるまいか。日本では「世界に軍備を持たない国家などない」といった議論が堂々とまかり通るが、これなども日本人がいかに世界を知らないか、というひとつの見本である。

私は、日本のいわゆる進歩的知識人や社会党などの人たちが、それを知らないのを、とくに興味深く思っている。ラテン・アメリカの旅から戻って間もなく、

たまたま河上民雄さんに会ったので、私

がその「事実」を告げると、社会党の国際局長である河上さんも、さすがにちょっと驚いていた。

私は、なにも河上さんを揶揄（えげ）うつもりで、こんなことを書いていたのではなく、罪はわれひとともにある。私じしん、日本にはたして軍備が必要か——という命題を、ずいぶん考え悩んだ時期があるのに、世界にそういう国が出現したことに

ついては、まったく知識がなかった。

コスタリカは、言うまでもなく政情不安定な中南米に位置し、かつ、地つづきの国境を持っている。そしてなお軍備を廃止したその「思想」や現実、歴史、とくにその外交は、日本のように「平和国家」を唱える国では、第一に研究の対象としてしかるべきものだろう。にもかかわらず、その「事実」すら知らないということは、日本の「平和主義」が、いかに軽薄な基盤のうえで議論されてきたか

——と反省させられる。

私は、さきに、西欧ならびにその文化の影響をいちじるしく蒙った地域では、日本文化を知ることが、世界の平和のためにも役立つ、と言った。その考えは変わらないが、しかしいわゆる開発途上国に対しては、一方的に「日本文化」を押しつけることは、むしろ間違っている。いまコスタリカの例を挙げたように、まず相手を知る——ということが先行し、あるいは少なくとも平行して行われなければならない。そうでなければ、かつて西欧の犯した文化帝国主義の轍を踏むことになる。

### ウジミナスの成功

私が、さきのラテン・アメリカの旅でもっとも感銘を受けたのは、むしろ「文化交流」などという範疇で論ぜられることの少ない、日本の在外企業の存在であった。それも華やかな商社などではなく、製造業である。

新日鉄（当時の八幡、富士製鉄）が中心となってブラジルで行われたウジミナス製鉄所の建設は、おそらく世界の開発途上国援助のなかでも、もっとも成功したひとつと聞いて間違いないだろう。現在は経営をほとんど委譲され、能率を上げている同製鉄所のブラジル人幹部たちは、口ぐちにつきぎのように言っている。

「日本人から仕事に対する熱意と愛社精

神を学びました。この社員は責任感がつよく、会社の成績があがることを誇りに思っています」

「従業員の定着率のこんなに高い製鉄所は、ブラジルにはありません。日本の派遣者から勤勉さ、仕事に対する誇りを学びました。われわれは日本をよきパートナーと考えています」

「ウジミナスは、他の製鉄所と違う独特の雰囲気を持っている。それは愛社心と熱意だ。日本人が、われわれの意見を十分聞いてくれ、教えてやるといった高圧的な態度を取らなかった、謙譲の美德の結果と、思う」

そして製鉄所のあるイパチンガ市長のつぎの言葉は、日本企業のもたらしたものを、いっそうよく物語る。

「日本人は技術だけでなく、心をここに残してくれた。のんびりしたブラジル人が勤勉な日本人について行くことは大変だった。しかしウジミナスは見事に結果した。フランスやドイツとの合弁事業も国内には多いが、ウジミナスほど成功している例はほかにない。これは日本人がウジミナスに魂まで打ちこんでくれたおかげだ」

じつをいうと、私は東京の新日鉄本社およびサンパウロ、リオ・デ・ジャネイロの駐在事務所を取材しただけで、イパチンガを訪ねていない。この部分は、読売新聞の西部版に掲載されたルポルタージュによるものだが、リオのイシブラス（石川島播磨による米大陸随一の造船所）

を訪ねて得たところから、この記事の真实性を首肯することができると。

ウジミナスの建設は、戦後、ひじょうに早い時期のもので、良い悪いは別として、当時の日本人（派遣者）は初生で、一種の使命感を持っていたように思われる。今日の海外派遣社員は、ノウ・ハウを多く蓄積し、合理的ではあるだろうが、はたしてウジミナスのような成功をもたらし得るだろうか？ 私は、それに興味を持って、当時の派遣社員にたずねてみた。

「そうかも知れません。当時の第一線の派遣者には、この事業に失敗したならば、今後、日本の鉄鋼業の海外進出の機会は永久に失われる——という悲願に近い思いがあったことは事実です。設備のひとつひとつが稼働するごとに、日本人、ブラジル人の隔てなく、肩を叩きあいながら、日伯両国旗の下で「ビーバー（万才）」を唱えて乾杯した、あの充実感は決して忘れられません」

たとえばブラジルへの日本企業の進出について、一般の日本人のアタマにあるイメージはどのようなものだろうか？ イパチンガ製鉄所やイシブラス造船所が、ブラジルで持っている意味——それは欧米資本の為し得なかったなにか——について、どれだけの情報を得ているだろうか。われわれが知っているのは、むしろ日本在外企業のわるいイメージではないだろうか？ その情報と現実との落差に、私は少々おどろき、かつ感銘を受けたの

である。

### 「おのれの利益」に誠実に

むろん、日本で多く報道されたように、「生意気な」日本の商社マンは少なくない。とくに日系人とのあいだには、さまざまなトラブルがあったし、とくに日本のエリートどもの日系人蔑視の感情を、私も知らないわけではない。

しかし、同時に多少の誤解もある。たとえば、日系の優秀なエリートたちに、日系企業の評判が悪いのは、右のような日本人の感情ばかりでなく、組織論としても存在する。また日本の企業では上下の給料差が少ないのも、嫌われる有力な原因である。ブラジルでは（ラテン・アメリカ全体に言えることだが）、大学卒業者、すなわちエリートと一般労働者の地位、給与には天地の差がある。日本の在外企業では、比較的にいえば、かなりその格差が少ない。ということは、エリートが優遇されていないことであり、日系人（彼らはブラジル人である）エリートには嫌われる。

日本のマスコミは、そのような分析にまでは立ち入らない。とかく日本人のワルクチを言うほうがウケる——といった偏向がある。もちろん、日本人の欠点について批判することは大いに結構だが、それが表面的であったり、また一方における貢献をまったく無視するのも、困り

ものである。さきのウジミナス製鉄所の連載記事が、旧八幡製鉄のお膝許の西部版に載っただけで、東京はじめ他の地域では掲載されなかったのも、なにか今日の日本の新聞のありかたを語っているように、私には思われた。

こういうことを言うのも、私が企業の提灯を持たんがためでは、むろんない。私は、「日本の経営」は、ある種の革新的なもの、世界にもたらずのではないか、と思っているからである。日本の生産性の高さは、従業員の教育・資質の高さによるところが多いのは事実だが、それを生んだのは企業の経営思想である（さらに、その土壌は、日本の社会、文化ということになる）。

今日、日本の社会は、おそらく世界でもっとも平等な社会として組織されており、それが日本の産業の労働生産性、従業員のエネルギーを引き出す大きな要素になっている。北米や中南米にあっても（私は、それ以外のところはよく知らないが）、日本の企業はしばしば同じ原理に傾く傾向がある。それは、その地域の伝統的文化に対する一種の挑戦であり、それはやがて今日とは違った意味で高く評価されるべきが必ず来るだろう、と私は思っている。

日本の在外企業の人たちは、必ずしも意識的に日本の経営を導入したわけではない。むしろ、その土地において、どうしたら経営が成功するか、儲かるか、生き残れるか、労働者の能率・生産性が上

がるか——という真剣な探求の結果、おのずから日本の経営の色彩が現われたのである。なぜなら、彼らは日本の経営、というより、自分の会社の経営のやりかたについては、よく知っているからである。

紙数が尽きそうなので、話をはじめに戻そう。私じしん「文化交流」を目的として仕事をしたとは思えないことは、冒頭に述べた。私の目的は、もっと単純直截で、日本あるいは日本文化を、より深く、より広く海外に知らせる、ということであった。そして、多くの外国の日本研究者たちに、日本について、いわば彼らの同国人に知らせる場を提供し、その場において彼らといっしょに仕事をし、助言し、あるいは逆にやりこめられ、そして結果として個人的にも、あるいは研究所じたいとしても、「文化交流」が行われたのだ、と思う。

もし、それが、たとえば出版というより具体的な仕事をつうじてでなかったならば、私はけつして真剣に彼らと格闘しなかつたらう。また、私が誠実に彼らとつきあおうとしたかどうかとも疑わしい。「おのれの利益のために誠実につきあつた」というのは矛盾ではないのか、と指摘されるむきもあるかも知れない。私は、そういう問いにたいしては、それはその通り、と答えるより方法がない。

## ● ● 稲葉秀二さん



### ■石炭とのかかわりあい

人はその人生のなかでいろいろなかわりあいをもつ。与えられた主題「石炭と私のかかわりあい」について、「稲葉さんは矛盾したことを平気でやっている人だ」という批判と非難を一部の人たちから私は受けている。「本当にそうなのだろうか」。これを自分で問い直してみたい。

第一に、今から三十数年前の終戦直後、私は「日本が廃墟から国民生活と経済を再建していくためには、石炭を増産し、これをテコに鉄や肥料の供給増加をせねばならない」ということを強く主張していた。そればかりか、これを実行するために、政府機関のなかに自ら入って働いた。第二に、昭和三十年代になってから、私は「日本がさらに産業や経済を大きくし、完全雇用を達成し、国

民生活を充実し、近代産業国家になるためには、エネルギーの基礎を石炭から石油にきりかえねばならない。日本の石炭産業は思いきって合理化をせねばならない」ということを強く主張した。これが日本のエネルギー政策になったことは「存じのとおりのだ」。

第三に、世界では一九七〇年にOPEC攻勢、一九七三年に第一次石油危機、一九七九年に第二次石油危機が発生した。これにともない省エネルギー、石油にかわるエネルギーの開発が各国のエネルギー政策の至上課題となってきた。そのなかで、原子力の開発と併行して、世界一石油依存度の強い日本は、石炭の使用を優先的にやらねばならない。特に海外炭を開発、電力に石炭をもつとたくさん使用せねばならない、「こう主張されている。私も同感だ」。

さていろいろの批判はありうると思うが、「われわれは社会の変化に即応して、いかに生きていくかをつねに追及していかなければならない。こういう立場にたつならば、私は自分の主張してきたこと、行動してきたことは、矛盾したとは思わない。社会のつながりと変化、時の要素

などを考えなければ理論や政策というものの価値はないと思う。これが私の今の信条である。どうであらうか。

(茅誠司部会)

## ● ● 喜早哲さん



### ■「ダーク元年」を三田山上に思う

本当に久しぶりに、母校・慶応義塾の三田の山へ行ってきた。変わらぬのは、あの赤煉瓦の図書館と、塾監局前の銀杏の木だけ、あとは説明されて「ハア／ナルホド！」と驚くだけの変わりようだった。懐かしかったのは、当時、谷口先生の設計で有名だった学生ホールが、そのま

まの姿で移転され、山食(学生食堂の名前)の建物として使われていて、猪熊弦一郎氏の壁画も、そのまま保存されている事だった。あの壁画の下に僕ら、即ち当時の慶応ボーイの青春があったのだから……。その山食で、その頃からいる山食のオバさ

## 私の近況

んに会い、その頃と味の変わらないライスカレーを食べて山を下りてきた。

素晴らしい一日だった。

といっても、懐かしさだけから三田の山を訪れたのではない。「螢雪時代」という、今の学生には読めないようなタイトルの受験雑誌の取材で行ったのだが、取材の仕事が終わっても、何か立ち去り難い、今にも次の授業が始まるような錯覚に陥りそうな感じがしたが、まわりにいる学生に「あつ／ホンモノのダーク・ダックスだ／先輩サインして下さい」とか「先日父がお会いしたそうで」とか「先日父がお会いしたそうで」とか「先日父がお会いしたそうで」といふなどと言われると、いやおうなしに現実を引き戻されてしまう。もともと、今やわが倅どもが、この三田の山へ通っているのだから無理もないのだが。

しかし、学生ホールが保存されていることは本当に嬉しかった。この学生ホールで、早稲田、同志社、関西学院のグリークラブとも、何度か交歓会が行われたし、毎年卒業してゆく先輩達の「サヨナラパーティー」も、ここで行われ、今のダーク・ダックスの前身も、よく歌ったものだった。



それから三十年。  
よっし再び学生時代の原点に戻って歌い始めよう。三十年目の今年は、「ダーク元年」だ。そんな決意が、フツフツと湧いてきた。二月の肌寒い三田の山だった。

(国際交流研究部会)

## 五代利矢子さん



### ■的をしぼってマイペースで

この三月、十五年ぶりに転居することになり、本来ならば、ポツポツ荷物の整理など始めなければならぬのですが、相変わらず審議会はじめあちこちの委員会・懇談会・研究会などの仕事や、座談会の司会、レギュラー対談、それに地方講演などあつて、わけもわからずに走り回っていますので、気になりながらも何も手をつけておらず、もうなんとかなるさと聞き直っている始末です。引越をきっかけにして、書類の大

整理も断行したいし、ファイリングも工夫して、必要な書類がサッと出て来るようになどとあれこれ考えることはあるのですが、結局のところ未整理のままの書類や本一式をドサリと新しい住いに持ち込んで、整理はいずれ——ということになりそうです。

私の年代は、友人たちも七十歳後半から八十、なかには九十歳の親御さんの面倒を見てそのお世話に明け暮れる場合も結構多く、高齢化社会は看護というサイドではもう始まっているといえます。そんな実感もあつて、今年は少し高齢化社会の問題をいろいろな角度から調べてみたいと思います。高齢化問題とかかわりの深い健康問題も、その予知・予防のシステムや、老化のチェック等にも興味があります。健康づくり振興財団の企画委員会にも参加しておりますので、相談をする側からの要望や、どういうシステムがいいかなど、ユーザーサイドの取材もしてみたいと思つています。

同時に自分自身の健康管理のためにも、いまま少し運動する時間を作りたいと思います。せめてコースに出て他の人を待たせることのない水準

に達したいとも思っています。

いずれにしても、今年はまだ間口を広げず、的をしぼってマイペースでいきたいと願っています。

(茅誠司部会)

## 中田喜子さん



### ■コンディションを保つことが大事

二月に始まった連続テレビドラマ「出逢い」に出演中の中田喜子さん。乙羽信子さん、池内淳子さんというベテランとの共演だ。舞台は木場老舗の三姉妹(池内・小川知子・中田)は誰も後を継がず、自宅を売ってそれぞれ商売を始めた。中田さんの演ずる下の娘は喫茶店。さき頃の新聞によると、何と四十パーセントを越えるという高い視聴率だそうだ。昨年「生まれて初めて」舞台を経験した。橋田寿賀子作の「離婚」やはり「初日はこわかった」とのこと。いちばんむずかしいのは「コン

ディションを保つこと」。四時間の長さ、四組の夫婦プラス一人という登場人物の少なさ、昼夜二回の公演。そして週一回の休演で二カ月間。うかがっただけで、その重労働のほどがわかる。今度は、「小さい小屋で、短かいもの。二十日間ぐらいという形でやってみよう」。

十二月、一月は「少しお休みした」。「スキーにでも……」との質問に、「スキーはやらないんです。日に焼けるし、けがでもしたら、みなさんにめいわくかけるって母にも言われて」とのこと。確かに、ヒロインが突如抱帯姿で登場というのは、ドラマもぶちこわしだ。

さて「連想ゲーム」だが、年が明けて、女性軍の調子も上向き。キャプテンのヒントが頼りだから、ついつい真剣な顔つきになってしまふ。「むずかしい顔をしないでください」とスタッフの声。もう一つ、楽屋裏の男性軍の素顔を。「これはゲームなんだから、ムキにならないで」と言いながら、「敗けるとブスツ」としているとか。

「出逢い」は八カ月の放送。舞台ばかりでなく、こちらも健康管理がいちばん大事。(加藤芳郎部会)

## 私の近況

## 大来佐武郎部会

●昭和55年12月22日

テーマ「パレスチナ問題の本質と解決の方向」

スピーカー―北原秀雄(前駐仏大使・西武百貨店顧問)

出席者―大来佐武郎、木田宏、小林陽太郎、滝田実、中根千枝、林雄二郎、松山幸雄

まずこの問題は、パレスチナ三〇〇〇年の歴史を踏まえないければ、理解は難しい。紀元前一〇〇〇年にエルサレムを中心にユダヤ人が栄えたが、紀元前七二〇年のアッシリア侵入以後、支配者はめまぐるしく交替し、紀元一七七年にはローマの植民地となった。このときから「ディアスポラ」が始まった。七世紀からアラブイスラムが定着し、一六世紀以後第一次世界大戦までオスマントルコの支配下にあった。一九一七年に「バルフォア宣言」が出され、一九二二年には英仏によるパレスチナの委任統治が始まった。アラブは無視されユダヤ人優遇策がとられた。その結果は、第二次大戦後の独立戦争にまで至るのである。現在のパレスチナ問題は三〇〇〇年の歴史の延長線上、つまり本質的には変わっていないと言えらる。さらに近年、石油価格の上昇によって、アラブ側の経済力が強化されたことは、パレスチナ問題の

解決に少なからぬ影響を与えよう。

現在、パレスチナ問題の解決には、次の三つの方法が考えられる。

一つは、ベギンが現在遂行している政策である。つまり、現状を維持し、永久占領を考えている。  
二つめはベレス案である。ヨルダンとの交渉によって、何らかのパレスチナ・エンティティをつくるというもの。これは自治という形をとるか、ヨルダンとの連合国家になるのかは、その段階で決めればよい。ただ、この案が受け入れられるためには、PLOの何らかの合意が必要となる。  
三つめは、外部にパレスチナ人のセルフ・デターミネーションの権利を認めるものである。その場合おそろく、ウエスト・バンクとガザにパレスチナ国家ができると思われる。  
今後二〇年間で、石油に振り回されるいまの事態が、終わるかどうかはわからない。日本は確かにクリーン・ハンドだが、だからといって樂觀視することはできない。アラブ側には、日本人は自分の利益のためには動くが、我々の苦勞を分かちあってくれないとの思いが強く、フランスなどに対する評価と対照的である。つまり、彼らは話に来てくれる。日本は非アラブ・非ユダヤの国として、人間的交流を密にするような積極的な対応が望まれる。

## 大来佐武郎部会

●昭和56年2月10日

テーマ「社会変革と労働組合」

スピーカー―滝田実(アジア社会問題研究所理事長)

出席者―北原秀雄、篠原三代平、中根千枝、ロベール・J・パロン

労働運動の流れは大きく四つの段階に分かれる。第一にロバート・オウエンのユートピア的社会主义の時代。次にマルクス・レーニンによる科学的社会主义。続いて無政府主義が影響をもった時代があった。その後、民主主義を通じて社会変革をすべきだというフェビアン主義が生まれ現在に至っている。  
労働組合の世界組織には、世界労連(WFTU)、国際自由労連(IFTU)、国際労連(WCL)の三者がある。世界労連はソビエトが資金を出す公称一億五千万人の共産主義国の労働組織であるが、財政は不明確で構成組合も政府統制のものが多い。  
国際自由労連は約六〇カ国が加盟しており、日本では同盟と総評が一部加わっている。ここでの活動は、EC、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの四地域に分かれており、状況もさまざまだ。アジアでは日本が力を入れており、比較的順調であるのに対し、アフリカでは弾圧がきび

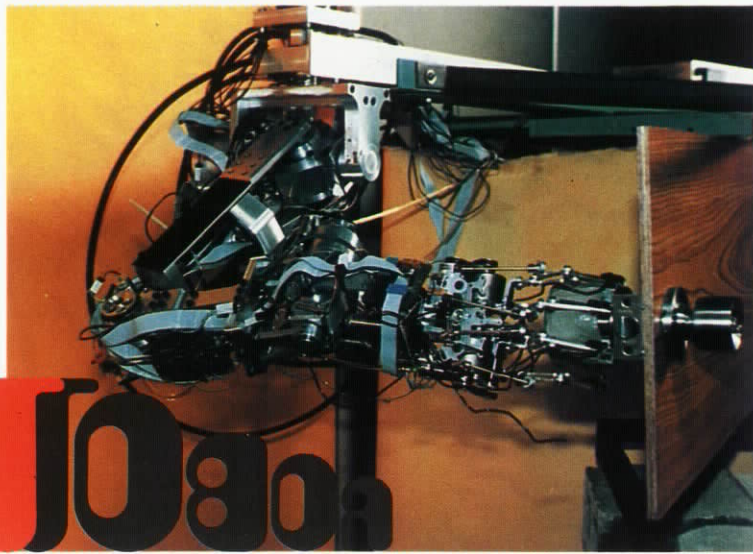
しく、ラテンアメリカでは援助をしているアメリカ自体が自由労連を退している。国際労連はキリスト教系の労組であるが、弱体だ。

現在、労働と経済の両分野から見ると、低成長(マイナス成長)、失業者の増大、インフレの進行の三つが暗い影を投げかけている。これに対して労働組合はどのような対応を行うべきであろうか。

この難問を克服する鍵は「参加」にある。つまり、労使間における対等・協力・分配の公正をいかに調和させ、共通の認識と目標を持つことができるかにかかっているといえる。これは社会主義国にもいえることである。

日本の経済発展が世界から注目される中で、企業別労働組合、終身雇用制、年功序列型賃金が日本独自のものとして指摘されている。これは労働使協議を重点として、産業国家、世界に至る「参加」のシステムの一つのモデルともいえよう。一方、比較的早く労働組合ができたイギリスなどでは、組合の目的が抵抗運動と権利闘争に向けられ、既得権の存続に重点を置いた。それは新技術を拒否し、結果として経済発展を参考にする。日本は労働使関係を参考にすることは組織的に無理であり、参加の形態は、各国の実情に即して模索されるべきであろう。

トルク位置制御方式をもつ人工の手W.A.M-6  
早稲田大学理工学部加藤一郎教授



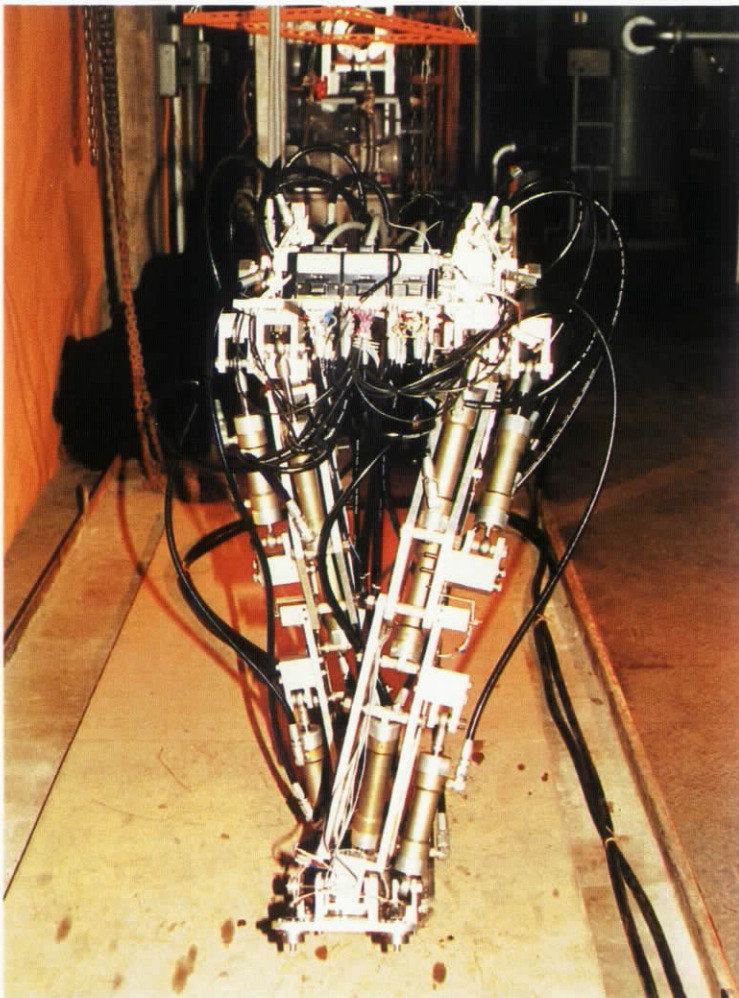
# ROBOT JOB

日本長期信用銀行参与 日下 公人  
中世ヨーロッパの農民は、エサをや  
らなくても一日中働きつづける木馬が、  
アラビアにいると信じて憧れていた。  
そんな木馬が本当にあればよいのに  
という人類の昔からの夢は、まず原動機  
付き機械となり、いまはロボットにな  
っておおかた実現に近づいてきた。

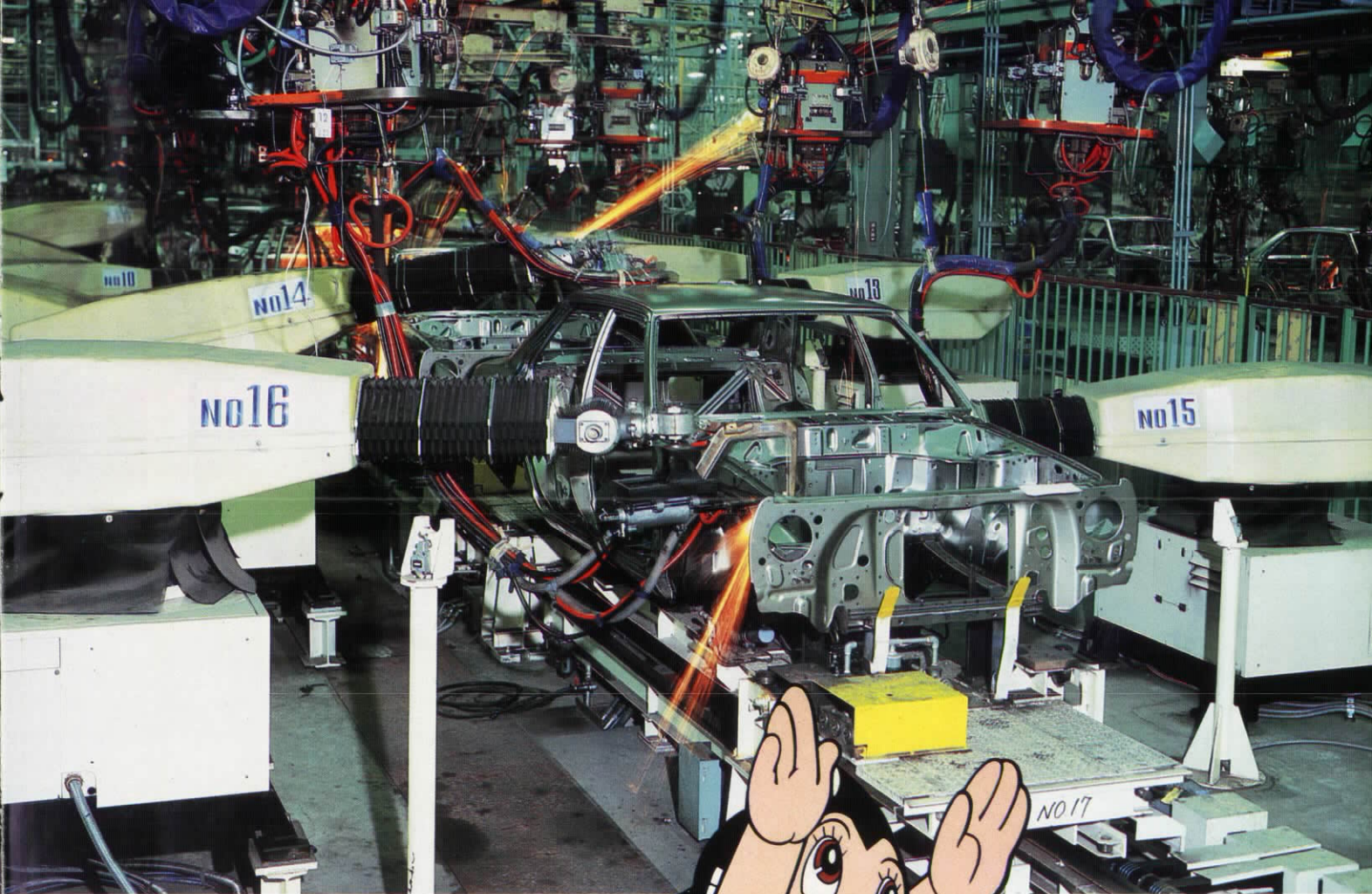
アメリカ・ロボット協会の調べでは、  
日本では、世界のロボットの半数にあ  
たる七、五〇〇台のロボットが働いて  
いる。

ロボットは命令以上のことはしない  
が、命令されたことは文句を言わずに  
必ずする。夜でも昼でも、無照明でも  
冷暖房なしでも、与えられたプログラ  
ムの通りに作業し、プログラムを変え  
れば直ちに新しい作業をする。熟達す  
ることはないが、熟練工がロボットの  
手をとって教えると一度で覚えてその  
通りに作業する。自動車の床下の狭い  
ところへもぐりこんで溶接でも何でも  
する。人間は苦しい単調な仕事から解  
放され、そのかわりロボットの発明・  
改良・メンテナンスの仕事をするよう  
になった。日産自動車ではロボットに  
一号機、二号機とは名づけず、山口百恵、  
松田聖子と名づけて可愛がっている。

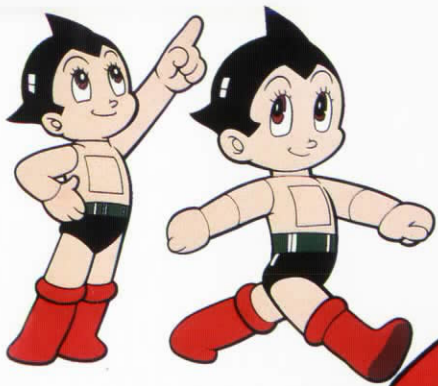
ロボットの性能は、これからセンサ  
ーとマイコンによって飛躍的に進歩す  
るだろう。一時間当たりの労働コスト  
も量産で急速に低下するだろう。世界  
はその夜明けにいる。ロボットの増加  
が働く人の幸福につながるか、それと  
も失業の苦しみにつながるかが大問題  
だが、日本は多分、幸福への答えをみ  
つけるにちがいない。



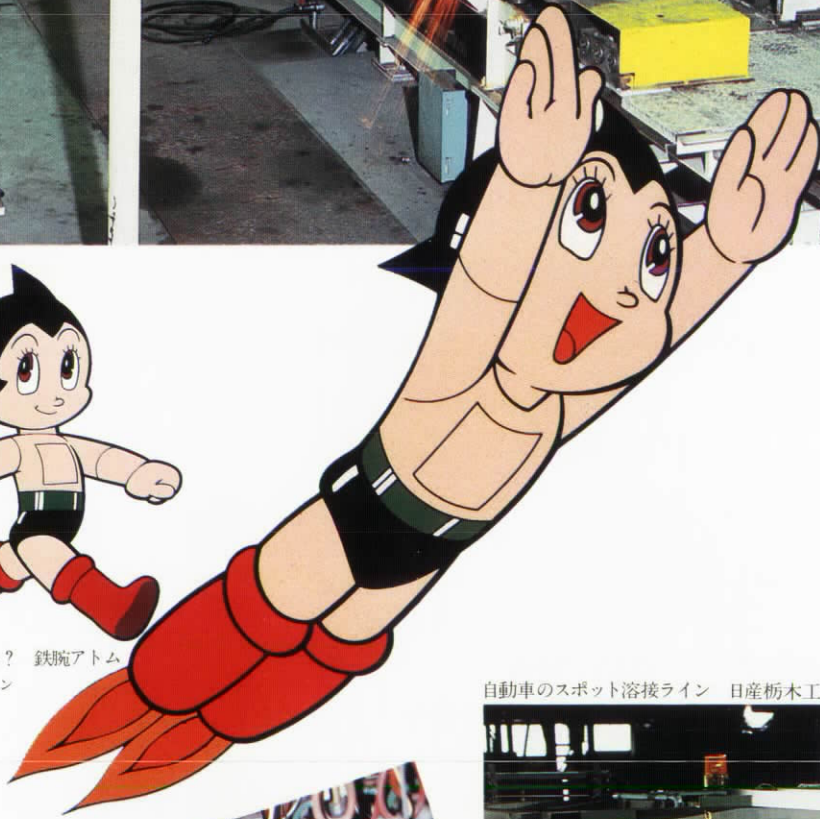
二足歩行機械 W.L.I.9.D.D. 早稲田大学理工学部加藤一郎教授



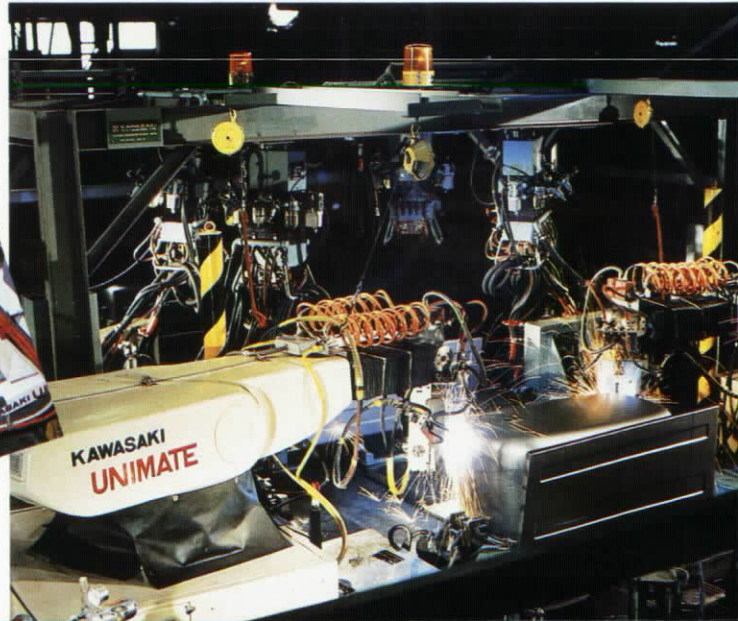
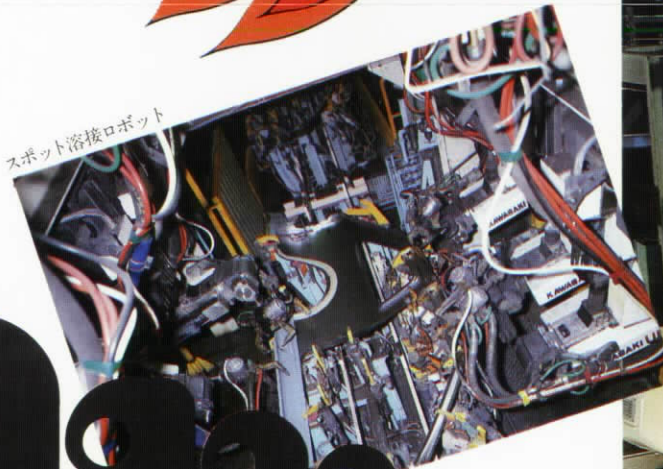
自動車のスポット溶接ライン 日産座間工場



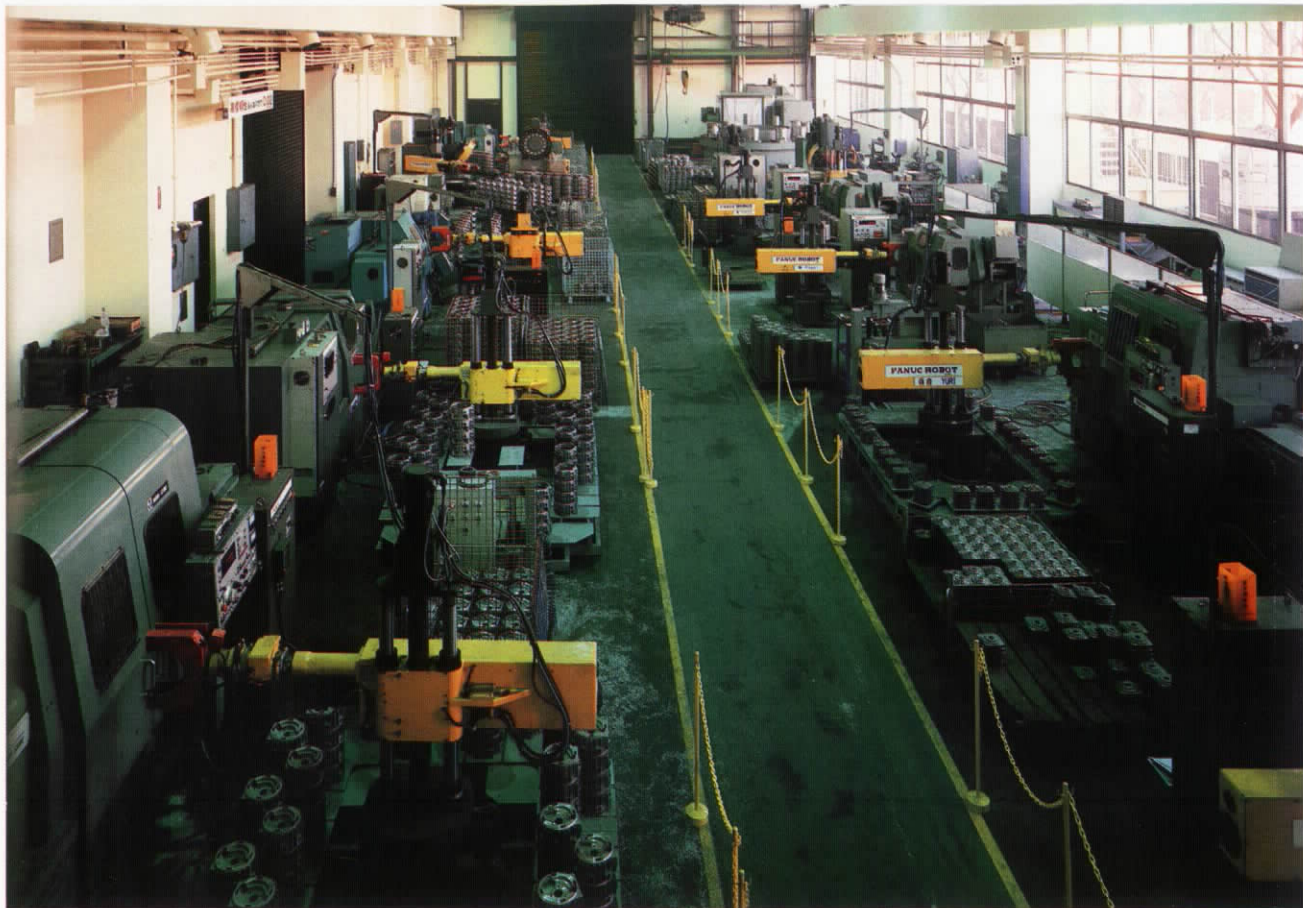
人間とロボットの共存を予言する？ 鉄腕アトム  
© 日本テレビ・手塚プロダクション



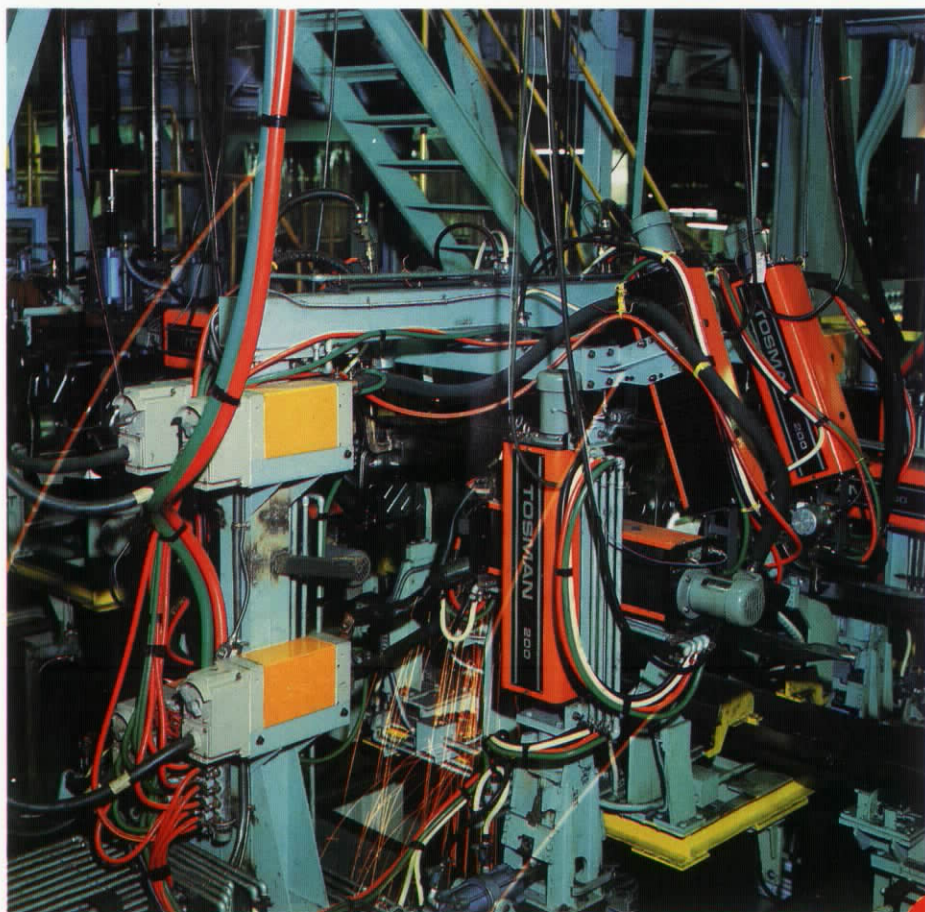
自動車のスポット溶接ライン 日産栃木工場



**TO800**



機械部品加工ライン 富士通ファナック本社工場

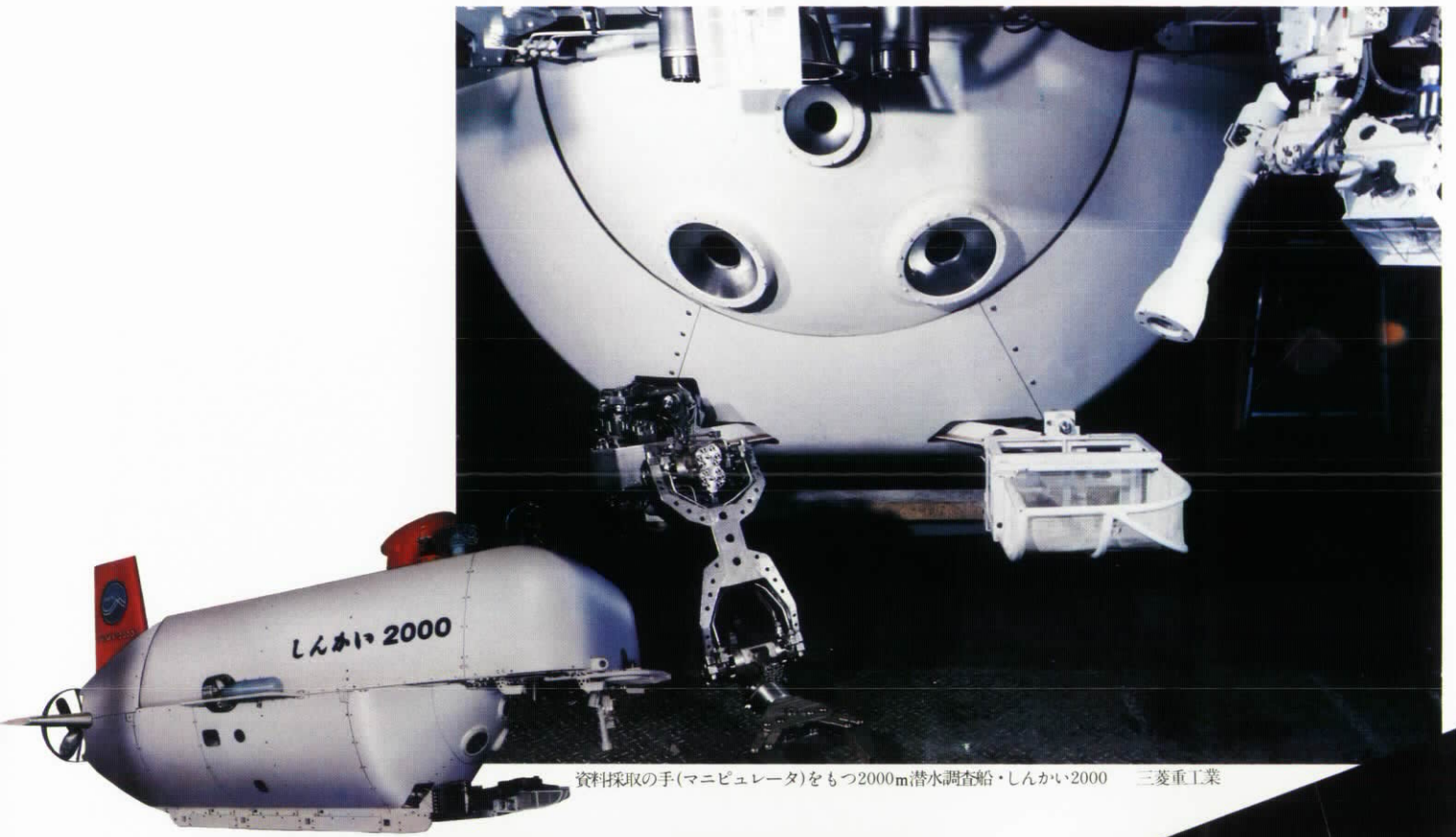


マルチアームロボット(同時多点溶接ロボット)

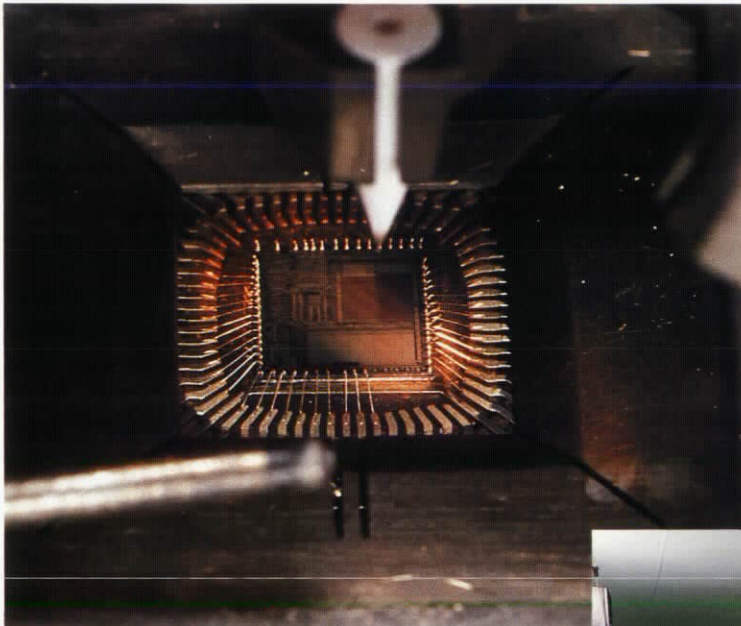


人気絶頂のアニメーションのヒーロー・ドラえもんはネコ型ロボット

# ROBOT



資料採取の手(マニピュレータ)をもつ2000m潜水調査船・しんかい2000 三菱重工業



ICのワイヤボンディング 日立製作所武蔵工場



マイクロマウス競技会でデザイン賞を獲得した「ゴンス」



マイクロロボットが迷路を抜ける速さを競う「マイクロマウス競技会」



視覚機能をもつ自動ワイヤボンディングロボット 日立製作所武蔵工場

## 松本重治部会

●昭和56年1月21日

テーマ―中国および中国人

スピーカー―岡崎嘉平太(全日空相談役)

出席者―松本重治、前田陽一

中国との関わりは、高校生時代に中国人留学生との交際のなかでいわば「日中運命共同体」的な考え方を抱いたことに始まる。当時日本は、アジアにおいて唯一の完全な独立国として列強に伍し、中国を圧迫する立場にあったが、むしろ、アジアの独立をはかり、文化を復興し、貧乏を開放しなければ、日本自身が安泰ではないと考えた。日本銀行に入ってから、欧米に駐在員を置くならば、北京にも置くべきだと進言したことがあった。

戦争中は中国にいた。共産主義になったとき、日中友好はもはや不可能ではないかと心配したが、昭和二十七、八年から「いっぺん中国を研究してやろう」と奮起し、日本国際貿易促進協会や党書貿易を通じて、中国人に接触するようになった。

昭和三十七年に周恩来に初めて会った。彼が、恨みを忘れてアジアとともに守ろうと言ったことに共鳴し、運命共同体的なことができるのではないか、日中国交回復は早くやるべきだと考えた。日本の将来のことを

## 加藤芳郎部会

●昭和56年2月5日

テーマ―スペース・コロニーと地球

スピーカー―大林辰蔵(東京大学宇宙航空研究所教授)

出席者―加藤芳郎、大山のぶ代、川野一宇、砂川啓介、坪内ミキ子、富田純孝、三橋達也、渡辺文雄

地球の人口は近年爆発的に増えつつある。一千年前に一億、百年前に一〇億であったのが、現在は四〇億になり、今後増加率が衰えないとすると、計算上では五百年後に全陸地面積での人口密度が一平方メートルあたり一人になり、千五百年後にはなんと地球と全人間の重さが同じになる。そこで人類は新しい居住先として宇宙に目を向ける必要がある。

ところが太陽系内の他の惑星は生存環境が劣悪で、例えば火星はマイナス四〇度Cの寒冷な世界であり、人類の生存に適するように改造することは至難の技だ。

そこで注目されるのが宇宙空間である。地球軌道の近傍にはラグランジュ点と呼ばれる、地球との相対位置が変化しない点が五カ所存在する。そこは広大であり、無重力なのでコロニーの建設には大変都合がよい。

最初はスペースシャトルを使い、地球から資材を運搬する。運送費は一割あたり一〇万円位ですむ。

しかし最終的には原料はすべて月から調達することになる。月の成分は地球とよく似ており、極言すれば、石をしばれば水が、あぶれば酸素や窒素がでる。加えて、月は重力が地球の六分の一で、ラグランジュ点までの資材運搬ははうり投げれば自動的に到達する。

スペース・コロニーの規模だが、最終テストプラントは全長三二キロ、直径六・四メートルの円筒形で、回転周期一一四秒、最大収容人口二千万人を予定している。側面の三方に窓をもつけ、巨大な鏡をとりつけ、二四時間周期で開閉させると人工的な昼と夜ができる。もちろん主エネルギーは太陽である。このような構造物自体は現在の技術レベルで不可能ではない。むしろ、コロニー内の環境造型に芸術的センスや、高度な技術が要求される。

そこで一九八〇年代後半をターゲットにした小規模モデルを考えてみよう。全長二キロ、直径二〇〇メートル、人口一万人として全重量が五〇万トン。うち二万トンを地球からの持ち出しとすると、経費概算は九兆一千万円となる。これはアポロ計画とはほぼ同額で、各国政府の支出予算を総計した額の二割程度でおさまる。

二十一世紀の後半には、コロニーの人口が地球を追い越し、最終的に地球は一〇億人程度が住む人類繁栄の記念碑的存在となる。

# 追悼 宮本常一先生



二十世紀フォーラム・加藤秀俊部会の宮本常一先生が去る一月三十日、その七十三歳の生涯を閉じられた。『足の民俗学者』といわれるほど全国各地を丹念に歩かれ、日本の民俗文化の発掘にとめられた先生の急逝を悼む。先生は山口県大島郡東和町のご出身で、小学校の訓導時代から民俗学の道に入られた。昭和十四年には渋沢敬三氏の主宰する「アチック・ミュージアム」(後の日本常民文化研究所)の研究員となり、戦後もひきつづいて全国各地の農山漁村・離島の民俗文化の発掘にとめられた。昭和三十六年には『日本の離島』でエッセイストクラブ賞、『瀬戸内海の研究』で文学博士の学位をとられた。最近是中国、アフリカにもその足跡はおよび、本誌第五号ではアフリカ体験のエッセイを寄稿された。先生の業績の偉大さをいま改めて振り返り、その急逝を悼みつつ、本記事を送りたい。合掌。

## 自由にうごきまわる旅人

(学習院大学法学部教授・加藤秀俊部会)

加藤秀俊

### 足跡

宮本常一先生とはじめておめにかかったのがいつであったか、じつははっきり

おぼえていない。だが記憶にあざやかにのこっている宮本先生との出会いは、高田宏さんの編集していたエッセイ・スタンダード石油のPR誌『エナジー』の座

談会である。そのときの特集はたしか「日本の人間関係」というタイトルで、宮本先生のほかに、これも故人となられた松方三郎先生がこいつしよであった。もう



## 立場

これは十数年むかしの話だったが、宮本先生は観念的な村落共同体論や封建制論には見向きもなさらず、どこそこの村の慣行はこう、どこ地方での講の機能はこう、と、じつにこまかく具体的な事例によって、日本社会での人と人とのつながりが因ってきたるゆえんを語られるのであった。

じつさい、どうしてあんなにたくさん知識が宮本先生のなかにつまっていたのか、わたしにはいまだに謎としかおもえない。ある若い研究者が宮崎県のある山村を訪れ、そこでの見聞を報告したりすると、宮本先生は、ああ、あの村ですら、墓地にいつてみましたか、あそこでいちばん古い墓は寛政期でしたね。ところで、あそこから何とか峠を越える道の入口にタバコ屋さんがあったでしょう、あのタバコ屋のおばあさんは元気でしたか、などと、つぎつぎに問い、かつ語られるのである。あまり知っている人もいないだろう、というので、得意げに報告する若き研究者はこういう宮本先生のお話をきいて、出鼻をくじかれるのであった。わたしじしんも、なんべんこういう思いをしたかわからない。とにかく日本国じゆう、どこに行っても宮本先生の足跡がのこっているのである。かつて菅江眞澄がそうであったように、宮本先生もまた、おどろくべきエネルギーと好奇心にみちた旅人であり、先生の著作はわたしなどにとって、日本を知るための水先案内のような案内をはたしてくれたのだ。

とくにわたしが深く感銘をうけたのは、日本のどの村に行っても、村の人たちが宮本先生をなつかしみ、尊敬していることである。由来、学者というものは、どこかにとりすましたところがあり、農村調査、などというともっともらしい顔つきであれこれと調査活動をするものなのだが、そういう学者たちはともすれば村の人たちの貴重な時間とゆたかな経験を収奪することになりがちだ。かれらは村の人たちを研究の「対象」としているのであって、ほんとうに村人たちの立場に立ち、村人たちとともに思索したり行動したりすることをしない。なんとか大学よ、という話はほうぼうの村で聞くけれども、そういうとき、大学の先生というのは、かならずしも好意的に迎えられていない、ということにわたしは気がつく。貴重な資料だ、というので土蔵のなかをひっかきまわし、結局のところたくさん古文書類を借りて大学の研究室にはこび、その後いつさい音沙汰なし——そういうひどい実例もわたしは何度か耳にしている。

宮本先生はこの点でまことに対照的であった。先生はどの村に行っても、わたしも百姓じゃ、ちよつと話を聞かせてもらえんかね、とアゼ道に腰をおろし、その日のうちに、村の人たちと友だちになつてしまっている。そして、イロリをか

こんで世間話をなさる。その世間話の背景になっているのは、あれだけゆたかな経験なのだから、村人たちは、いつのまにやら聞き手のがわにまわつて宮本先生の話に耳をかたむける、といった次第。もちろん、先生も村人たちから多くのことを学ばれたにちがいないが、それにもまして、村人たちは先生から知識を吸収することができたのである。そこでは、知的収奪のごときものはこれっばかしもなく、むしろ、先生は惜しみなくその知識と経験を日本の農山漁村の人びとのために放出なさつたのであった。だから、宮本先生のお名前を口にするとき、村人たちの眼は輝く。

## 経験知

ふしぎなことがあるもので、いまから五年ほどまえ、わたしはハワイの日系人のあるグループにお世話になったことがある。学習院の学生諸君を連れて、ハワイ日系人の研究、というきわめて初歩的な勉強をしたのだが、このグループの人たちは、山口県の周防大島の出身者たちであった。そして、うかつにもそこでわたしは宮本先生がこの周防大島のご出身であることをはじめて知った。学生たちのうち、熱心な二、三名は、ハワイから帰ってきてまもなく、周防大島を訪ねている。ほんとうに世間はせまいものだとおもう。わたしじしんはまだこの先生のご出身地を訪ねていない。お墓詣りかたがた、ちかいうちに行つてみるつもり



でいる。

いまとなつてはとりかえしのつかないことだが、わたしにしてみれば、もっともっと多くのことを宮本先生からひき出して、じぶんの知識をふやしておきたかった。たいへん不謹慎な冗談だが、わたしたち何人かの仲間のあいだでは、数年まえから、もしもできることであるならば、宮本先生の脳細胞のすべてを移植していただきたい。そのために、じぶんのこれまでの記憶や知識がぜんぶ消えたと

しても本望だ、といったような話題がよく出た。それほどに宮本先生の頭脳のなかにたくわえられているすべてのものを吸収したい、という気持がつよかったのである。わたしはこれまで幸運にも、たくさんすぐれた先生たちとめぐりあい、多くのことを教えられながらまがりなりにもここまで生きてきた人間である。しかし、その多くの先生がたのなかく、宮本先生はわたしにとって特別な先生であった。これまでなんべんもくりかえしてきているように、先生はとにかく、日本の社会、とりわけ村のなかでの具体的事実をほとんど無尽蔵といつていいほどにご存知だったのである。わたしも、生意気に、日本のあちこちの村を歩き、農民や漁民の話をきいて、貧弱なファイル・ノートのごときものをつくったりしてきている。しかし、わたしが日本の村について知っていることなどタカが知れているのである。宮本先生の知識量とわたしのそれとをくらべたら、太陽とケシ粒くらいの差がある。とうてい、くらべものにならないのだ。本ならいくらでも読んで勉強することができ。だが宮本先生の経験だけは、ご本人から折にふれうかがう以外に方法はない。それを、わたしは、もっと吸収しておくべきだった。

## 旅人

わたしの頭のなかにある宮本先生は、肩かけカバンをひっかけて、どうだい、

やっとなるかね？と、無造作においでになるイメージである。そして、昨日は佐渡に行ってきた、これから能登にゆくところじゃ、といったふうには、その肩かけカバンひとつで自由にうごまわる旅人のイメージである。その先生の姿をみるたびに、わたしは旅愁にさわられ、先生のようにありたい、とおもった。キザな言いかたをおゆるしいただけるなら、先生はわたしのあこがれの人物だったのである。

宮本先生は、やさしいお人柄だった。先生に魅せられない人はいなかった。だが同時に先生のきびしさもわたしは知っている。二十一世紀フォーラムの部会をおてつだいだくことができたのは、わたしの光栄とするところであつたけれども、カツオ漁の巻き網漁法に対する先生の批判などはじつに強烈であつた。魚の濫獲を責める先生の表情には、怒りと悲しみがこもっていた。わたしはそういう先生の表情を一生忘れないでいたいとおもう。そして宮本先生の偉大なお人柄と哲学を、その片鱗でもよいかから、次の世代につたえてゆくことがわたしの義務だとおもう。ひとは、その人生のなかで師と仰ぐ人を持つことによって幸福でありうる。わたしは宮本先生を持つことによってしあわせだったし、そのしあわせは一生つづくだろうと信じている。

# 父没スレバソノ志ヲ見ル

(京都大学教養学部助教授・加藤秀俊部会)

よねやまとしな  
米山俊直

一月三十日朝、宮本常一先生が逝去された。つい三百まえ、私は上京したので、

お見舞しようとして果たせなかった。じつはそれ以前にも機会があったのに、仕事にかまけて逸していた。おなくなりになるとは、思っていなかったのだ。

\*

昨年の六月に京都でひらいたシンポジウム「錯乱と文化」のときが、最後にお目にかかった機会ではなかったかと思う。精神科医たちとやったこの集まりで、先生の発言は出席者の心を打った。医師たちはその後先生を訪ねて、アドバイスをもとめている。

\*

お目にかかることはこのように、実際にはけっして多くなかった。しかし私は先生を身近かに感じていた。その思いがいまは強い。何かあれば先生に訊ける。着想が浮かべば聞いていただけ。やろうとしていることには、きっと先生のはげましが得られる。そういう思いこみが私にはあった。おそらく、多くの人がおなじような気持ちではなかった。

\*

それだけに、先生の御逝去は悲しい。こちらが死ななにかぎり、再会の可能性はない。しかも、その可能性もありうるかどうか、わからないのである。

\*

四半世紀もまえに、先生の紹介で私は東北を旅し、栗駒山麓の村で千葉光男さんと会った。そこで一年間の住みこみ調査をした。私にとってはじめての本格的なフィールド・ワークであった。その機会を作っていたいただいた先生の学恩は大きい。

\*

先生の風貌はなおまのあたりにある。先生の話しぶり、そのお声は、いまでもあざやかに耳もとに残っている。独得のポーズがあり、一種のてらいさえあった。それも懐かしい。

\*

はじめて先生にお会いした——というより先生の姿を見たのは、私がまだ大学三年の夏だった。郷里で大規模な調査があつて、たぐさんの学者がやってきた。私は村役場のアルバイトで、そのガイドや発掘人夫をした。先生は奥様とご一緒だったと思う。宿のままで平山敏治郎先生と大声で話されていた。平山先生が「よいライバルがやってきたな」というようなことを言われたのを、妙に記憶している。

\*

栗駒の千葉さんに紹介していただいたのは、それから数年後のことになる。私

は大学院を休学にして、アメリカに留学

し、いささかの調査費をもらって帰京して、東北のどこかで住みこみ調査をしようとしていた。先生とは東京の小さいレストランでお会いした。ほかに何人か紹介していただいたのだが、最初に訪ねた千葉さんのおかげで、栗駒三ノ迫をフィールドに選んでしまった。

\*

その後もいくつもの思い出がある。鹿児島での学会のとき、鈴木満男、伊藤幹治の両君と、先生のあとを追ってお話を聞いたことがある。みんな期せずして先生のファンだった。

\*

おなじ民族学会が慶応であったとき、レセプションで、有賀喜左衛門先生と談笑される先生をそばでながめていた。話は中世史のことだった。

\*

これも学会のとき。たしか熊本だったが、報告中の会場の横の呼出しスライドに、「浪沢先生秘書の宮本さん、受付まで」という文字が出た。先生ご自身はどう思われたか知らない。私はひそかに、なんといういいかただと腹を立てていた。先生の屈辱を代理で感じていた。先生をぬく学者がこの会場にどれだけいるというのだ。立派な先生をそういう言い方で呼

び出すとは。

世間には——とくに思いあがった大学人のなかには、そういうかたちでしか宮本常一を評価できない人たちがいたのだろう。いや今でもいるかもしれない。

しかし他方、先生を敬愛する人も少ない。日本全国に、先生に傾倒する人がいる。ジャーナリストにも具眼の士がいる。若者にもいる。たぐさんのすぐれた若者が先生のもとに集まり、よい仕事をいくつもしてきた。

学歴のような世間のモノサシにこだわらず、偏見のない目で先生を見た人が、先生のファンになるのである。その層は厚く、裾野はひろい。そしてそのなかには、渋谷敬三、柳田国男のような、先生が師事された先達たちも入る。渋谷さんの「わが食客は日本一」(文芸春秋・昭和三十六年八月号)は先生を紹介する文章。それが雄弁に物語っている。

五十四歳になるまで、二十三年間も沢家の「食客」だった。とか、一年のうち三分の二は貧しい調査の旅に出ているとか、それにもかかわらず郷里の農業もやっついて、とりいれなどには帰省する、とか、先生の伝説的挿話はすくなくない。その生き方や経歴には、世間一般の常識のモノサシでは計測不能な、ケタ外れの一面がある。余人の真似できない、強烈

な個性なのである。

それは、通常のサクセス・ストーリーなどとまったく別の、非凡な人物の、勇ましい高尚な生涯」というほかない。「民族学の旅」(文芸春秋刊・昭和五十三年)は先生の自伝だが、随所にそれがうかがえる。

郷里での幼少年期、肉親からの影響も見逃せないが、青年期の先生が近松や万葉集、あるいは長塚節を精読し、また歌集を編んでいることに注目しておきたい。

また、シヨックなのは、昭和二十年七月九日の空襲で、「原稿二万二千枚、採集ノート百冊、写真その他焼失」と年譜に

あることである。すでに当時『民間暦』

や『家郷の訓』など著作があったとはいえ、のちの著作集二十五巻、『私の日本地図』十五巻、『日本民衆史』五巻など、たぐさんの著述がその後の業績なのだ。おどろくほかない。

つけ加えておきたいのは、先生が離島振興法の成立・施行にまでごきつけ、また林業金融調査会に百三十冊の報告書をつくって、のちの山村振興法成立の基盤をつくったことである。先生はその点で、ただの博識な民俗学者、エッセイストでない。ただ体制を批判している評論家でもない。日本の底辺についての積極的な、政治的活動家といえる。先生自身、やや自嘲をこめて「廊下トンビ」になり、役所や国会に働きかけたというが、無私の立場の先生の説得が、国政を動かすことになったのだから。これも利益誘導のひとつだらうが、その利益がどこへむかったかを見れば、おのずからその御用学者とのちがいは明らかだ。

二月二日、国分寺駅ちかくの東福寺で、先生の葬儀が営まれたが、参列できなかった。お通夜にだけ、川添登、粟津潔両氏らとおまいりした。「父没スレバソノ志ヲミル」という。私は本堂の祭壇のそばに坐り、僧たちの読経をききながら、先生の遺志のどこを、どのように継いでゆけばいいか、ばんやり考えていた。



■写真・昭和55年6月 加藤秀俊部会にて(左から宮本先生、米山先生、加藤先生)

# 郷土大学のすすめ

みやもと つねいち  
宮本常一

## 東和町郷土大学開校式記念講演

「郷土大学」というユニークな試みが、

宮本常一先生の郷里・山口県大島郡東和町（周防大島）で開かれている。開講は昭和五十五年三月二十五日。本稿はその発案者であり、学長でもある宮本常一先生の開校記念講演を再録したものである。再録に当たって、御子息・宮本千晴氏（日本観光文化研究所）、須藤護氏（同）および郷土大学の御協力を得ましたことを感謝致します。（編集部）

## 規格化された知識 企画する知識

郷土大学というものを考えつきまして、是非とも実行してみたいと皆様におはかりした次第でございます。

今日、皆様方、新聞を読みテレビを御覧になりいろんな知識を得ていると思うのですが、その知識に固持するところ、

芯になるものが少ない、芯になるものがないからそれが蓄積にならない、蓄積にならないから知識にならない。

皆様方いろんなものを見、聞き知っておるように思うが、直接に役にたつていない。つまり世間話を聞くと同じようなことすましている訳なのです。それにはいろいろの理由があります。

たとえば、私はテレビによく出ますけれど、テレビというのは、ある枠があるのです。そしてテレビは私に何をして何をしゃべってくれということをまず注文します。こちらがしゃべりたいことを思うまましゃべらされることにはないのです。それよりは、全体としてまとまりのよいことが要求されます。

つまり規格品を皆様方は聞かされているにすぎない。

そればかりでなく、今日までの学校の教育をみましても、高等学校までの教育はまったくの規格品なのです。教科書なの

です。その教科書をみな習っているのです。

そこには本当の教育というものがいかなと得られない。あるいは実践社会に入らないと得られない。

大学の教育というのは、何をしゃべらなければいかというきまりはないのです。それぞれ研究し勉強しておることをその先生が講義すればよいのです。ですから私は大学にいる時は、民俗学を教え、生活造形史などを教えていましてが、民俗学の講義の中で私が何をしゃべってもかまわない。これをしゃべっていい、これをしゃべってはいけないというのはないのです。つまりそこではじめて学生諸君が先生の本当の人格に接することができる。それが大学のいいところなのです。

高等学校までというのは規格品なんです。規格品をやぶる先生もたくさんおります。テレビもラジオもすべて規格品です。

どれほど規格品であるかということに

ついて、もう大分古い話になりますが、宮本という判事補がおりそれを判事に任命しない事件がありまして、その事を『週刊朝日』が中心になりまして、くわしく報道して政府の態度がまちがっているんだということを書いたことがあります。ところがそのあとすぐそれに対して政府の圧迫が加わってまいります。それがどのような圧迫かと申しますと、とにかくおまえのところへ今配給している紙はストップする、一切ストップせられると新聞が出せない、それは紙をもらわないと日本では新聞は息の根をとめられるというところで、御承知の大きな謝罪文を出しましてそして『週刊朝日』の編集長は責任を負っておりたわけであります。

しかしこれはどちらにあやまりがあったのだろうか。一方民衆が正しいことを主張しようとするためにはどれほどの努力をしなければならぬかということを人権中心におこなっている訴訟問題をごらんになるとよくおわかりになると思います。

しかし政府のしていることは正しいのだという考え方があり、また政府が最も大きなニュース源をもっています。

これは社会主義国以外にはない例なのです。なぜそうなのだといえますと日本の大新聞はみんな中央で動き、あらゆる材料ニュースソースを政府からもらいます。したがって政府の都合の悪い事を書けば、政府から袖にされるようなことも

おこります。

無数にそれがあるわけです。言論が自由だというけれども、私は本当に自由だと思っただけです。たとえば首相が民間人と対談します、ああいう対談なんて三回ぐらいリハーサルをします。これはいけない、これはいけないで、質問の中でみな削っていきます。はじめは本気になって国民の代弁者のつもりで話しているが、本番のときはもう気がぬけてしまっていると、首相と対談した人がはなしてしまいました。

私はそういうことが行われている間は本当に世の中の進歩はなくなるんじゃないかと思えます。みんななれあいになって、一方どこかに大きなヒズミがおこってくる。

大事なことは規格化されることではなくて、みんなが企画し、お互いがお互いに発見していくことである。その発見していく一番大事なものになることは何であるかと、やはり自分が今住んでいる場を、その生活の場をもとにしてその中から新しい生き方を見つけてゆくことです。

## 郷土でもものを見 考える場を

それはまず、郷土をみなおすと同時に郷里でものを見て、それが大変大事なことになるのではないだろうかと思ふので、そのための郷土大学を考えたい

のです。特になぜ「大学」と名前をつけたかと申しますと、今までこの町でたとえばたくさん講演会をなさる、その講演をなさる場合にもたいがい町の広報の規格にそった話をしてもらいます。私なども講演をたのまれていきますけれども、こういうことについて話をしてくれないです。ですから話したいという話を話すということは、非常に少ないわけです。そういうものを皆様がいくら聞かれても、それは本当の血になり肉になるといふことではないわけです。ここにどうしても皆様方の目でものを見る、ものを考える、しかもそれはその実感、自分の体感、その郷里におけるその実感を通して見ていく、感ずる。これが大変大事なことではないだろうか。しかも大学と名をつけたのは、さきほど申しましたとおり、自主的なものであり、講師の人格、思想をそのまま述べていただき、その中から学びとる、講義の内容は大学、大学以上のものではないと願うことなのです。

本来知識というものは蓄積できるものです。しかし、今新聞なんかで得られている知識というものは蓄積できません。しかし郷土大学では一人一人がそれを積み重ねて、それぞれ個人としての考えを持つということにしたいのです。

流行というものがあつた。流行つてのが積みかさなって世の中が発達していくものでしょうか。流行におかれると時勢におかれるように思いますが、はたし

てそうでしょうか。ミニスカートがパンタロンにかわってから世の中が進歩しておりますか。そうじゃなくて目先を変えただけで、目先を変えることが進歩だと思っただけは困るのです。

本来知識というものは蓄積されなければならぬのです。しかし今、我々が知識と思っているものでなら蓄積につながないという事は、知識ではないってことです。これをこういう場で蓄積することのできるものにきりかえていく。学問というのは、あらゆる事物の中から価値を見つけ利用を工夫し、それを積み重ねていく一つの作業だと思えます。

いろいろなものを蓄積し、その蓄積したものが実は豊かな世界です。

## 連帯感が 生み出すもの

次に豊かな世界の中で一番大事な基礎になるものは何かといいますと、連帯感を持つということではなからうかと思えます。今皆様方がどの程度に連帯感を持っているかでございます。

私が最近沖家室へ行つて話をしたときは皆様一人一人の間に横への連帯感ほそれほど強くなかったと思います。ところが橋を架ける、橋が架かる、そこである人に来ていただきまして、皆様と橋を架けるに對して、我々がどうしたらよいかと話しあいました。すると島民全

体が島の問題を考えるようになり、連帯感が生まれてきて自分一人の問題ではなく全体がよくするにはどうしたらよいか問題になって来ました。

さらにそういう連帯感というものは、最近では次第に強くなりつつあります。町の地形模型を作ったり、民具を集めたり、民具の調査をしたりしていくうちに、これまでこの町で生きてきた人たちの生き方に共感を持つことができるようになります。その共感があるからお互いに生きてゆけるのです。そういう共感がより深まったものを我々は信頼感といいます。信頼感のもてる社会を作つてゆく、そういうふうなものはどうして生まれてき、そして共感を持つようになるかという、我々自身がいろいろな願いを持ち、その願望を実現させてゆこうとする。すなわち夢を託すものがなければいけない。今の多くの人達を見ますと、夢を託すものはほとんどなくなつてきているのではないのでしょうか。たとえばこの東和町に住んでおられます、ここに住んでおつてもしかたがないんだ、いきのよいものは皆外へ出ていき、残つたものは我々のような者が残っているんだという気持を持つたときには、他人に対する信頼感も連帯感も消えてゆくのです。むしろこの郷里をこれから先、どうしたらよいか考えたときに、始めて夢がわいてゆくのです。その夢というのは、僕が食べてゆく夢でなく、現実になってゆく夢でなくてはならない。それは知識の蓄積の中から生ま

れてくるのです。そういうようにしていくためにはまず自分自身が成長していかなければならないのです。

それからもう一つ大事なことはただ眼前の利を追うだけではなく、自分の心をひかれるものに賭けて見る。一見無駄と思われるようなことにも自分というものをたたきつけて見ることです。画家なら画家がすぐれた絵を書くときに、この絵が何万円に売れるだろうと思つて描いた絵はないのです。対象に没入して描いてそして描きあがつたものの中に価値があつた。それはわれわれの世界でも同じことが言えるのです。

それは何のためになるかと言いますと自分自身が持つておる可能性を生み出すことではなからうかと思われます。自身の可能性といいますと、自分はここまでできる、何ができる、それを試す機会を持つことができる。修養だとか教養だということは本来自己自身の持つ可能性を試すことではないかと思ひます。

こういうことをする場が今まで非常に少なかったと思ひます。人間の持つ可能性の高さが束になって具現されたものを我々は文化だと言つておるのです。

## 豊かな郷土を 創るために

そうしますと、今日東和町で戦争が終つて三十何年がたつていますが、我々はその間に文化つていふものを意図して作

りあげていただろうかというところ、ゼロに近いのではないだろうか。それがあればまだもう少しこの地に人は踏みとどまったはずだ。魅力がないから出てゆくの、これだけは将来に残しておこうというものを三十五年という間に作って来ただろうか。ふるさととはなつかしいもの、と言いますが、それも親兄弟がふるさとにいる間のことで、親兄弟のいないところへ帰ってくる人が何人あるでしょう。われわれはいつまでも誰もか心をひかれるふるさとを作りたいのです。それは時代時代の便宜でこわしてしまふようなものであつてはなりません。例を申しますと、東京の丸の内、三菱が赤レンガのたくさんのオフィスを作っていました。それは一つのすぐれた景観です。すらすらあつたのですが、その建物自体が大変不便であるということとみなこわして新しいビルにしました。つまり本当の文化財であれば残つたはずで、便利を目的にして建てたものは、時期がくると不便になるのです。この建物すらもう五十年もたちますと不便なやつかいなものになるのです。こわしたくなるもの、それは文化ではありません。

しかしここにりつばな博物館を作つたとします。それはみんなが五十年たつてこわすでしょうか。より良くしてゆく意欲はあるはずで、イギリスの大英博物館というの、初めごく小さな一つの博物館にすぎなかつたものです。それが世界第一の博物館になつた理由は、国民がいろいろなものを持つてきて、建物を建ててくれば、自然に大きくなつたのです。そういうものが文化です。アメリカの Smithsonian 博物館やハワイの Bishop 博物館もそのようにして大きくなつたのです。それがアメリカの文化を象徴しています。Bishop 博物館は初めは Bishop といふ人が集めていたものを失いたくないというので奥さんが寄付された。それがもとで今太平洋沿岸にある博物館の中では一番立派なものになつてゐるのです。そしていま日本人でも太平洋のことを勉強しようとしたら、ハワイにいかなければだめでしょう。

そういうものを我々もここで作つてみたい。作れるんです。Bishop 博物館も初めゼロだつたんです。しかしまた太平洋文化のセンターになつてゐるのです。みんなの力で作つたんです。私は東和町だから何もできないというものではないと思う。東和町でも皆様方が本気になつて東和町を中心にし主体にして見、行動してゆけばあるものの中心になりうるのだと思つてゐます。そういう志をここで作つてみたい。自信をもつて皆さんが仕事をできるような機会と場を作つてみたい。

そういうようにして考えてみますと、たとえばこの郷土が本當に生かされてゐるかといふと、私は現状では生かされてゐないと思ふ。ミカンを作るこゝとがやつかいになり、山に松喰虫がついて枯れても、誰一人一本切り倒すあるいは整理しようというものはない。やつとその神崎が形を変えはじめていますが、おそすぎる感があります。今東京の中央部だと一坪が何千万円も地価がしてゐるのです。ここでは山に上げつてゐる松が立枯れになつて対策もしない。それでここで貧乏してゐるとか、ここでは食えないのと言つてゐるのだから実におかしなことです。そういうことで問題が解決つくだろうか。

そういうことで郷土を立派にするにはどういふふうになればよいかというところ、結局この土地に関心を持つ人々がそれぞれの立場で話をしていきながら、いろいろの工夫と実験をしてみることはなからうか。そういうふうにして生きやすい、豊かな土地になることを願望すべきなのです。豊かな土地というのは、我々自身が郷里の進むべき方向を見つけていろいろのことに実践してみる。これが一番大事なことになるのです。

それには、それぞれの人が自分の道を歩いてきて、そしてそれぞれある自信を持つてものを言える。その言葉をその人がどうしてそう言えるようになったかという道すじについて聞く。つまり考えの根底にあるものについて聞く。それは必ず皆様方に大きなプラスをもたらす、今度皆様方自身がいかによくかかを考えるようになる。いわば賢者の世界を作つてみたい。郷土大学の目的というものは、そういうところにあるのではなからうかと思ふ。



# 郷土のための 大学づくり

したがって私はこれから三日間まず郷土の歴史の話をしようと思っています。しかもこの大学は大変奇妙な大学で、まだ先生は決まっておられません。決まっておるのは私と、副学長になってくださった米安慶氏と二人だけです。

どんな人を先生に頼むかという、金がないもので、それで大島郡の近くを通りあわせた私と志を同じくする学者に、すまんけれどここに寄ってくれと声をかけます。そうするときと彼らは喜んで寄ってくれるにちがいないと思います。随分あてずっぽうな話をするようでありませけれど、実は私は経験があるのです。佐渡にオンデコ座という太鼓をたたいているグループがあるんです。オンデコ座を結成して今のようにしてゆく一番最初に私が一役かいました。私の周囲の友達十人程に、あれを助けてやってくれ、と言うたのです。それが十人、さらに十人の知人を紹介しまして、さらにだんだん、だんだん紹介しまして、初めに一万円会費をとったのですが、六百人参加したことで六百万円ができたのです。六百万円であれば十五人の人が一年間食べていけるのです。それで、太鼓の練習をはじめます。このようにして民間から寄付を集めつつ四年間練習するのです。そしてボストンのマラソンに出ていって、

そこで太鼓をたたいて、とたんに世界的に有名になったのです。

私が言いたいのは、これはおもしろい、これは何かになると気がつきますと協力しようとする人間は実に多い。というのは、多くの文化人達が夢を求めているのです。自分自身の問題でなく自分の周囲でそういうものが芽を吹いてくるのを希望しておるのです。

私は今それを期待しておるのです。そしておそらくはこうして声をかければ、そういう人達が十人二十人、三十人ときてくれることを今から予測できるわけです。そうすると何月何日に誰が来るといふのではなく、じつとここで網を張っていて魚の来るのを待っているという定置網とおなじような方式の大学を考えたのです。

そういう発想、そのかわりすべて自前である。こういうことをやるのに役場から金を出してもらうとか、あるいは県から金を出してもらおうということはしたくないのです。そこで皆様方にちゃんと学費を出してもらい、そしてやっていくのがこの大学の目的でございます。皆様方がそういう知識を進んで真に吸収し、そしてそれを実践の場に持つてゆこうとするならば、必ずそれは可能である、そう考えます。

もしそういうことで網を張っておきますれば、だんだんおもしろい人がこへやって来はじめるわけです。そういうふうにしてみたいのです。つまり門戸を

開きさえすれば人は集まってきてくれる。そしてそういう人と話し合いたいと思います。そしてしかも非常にそういう人達が周囲に多い。こちらからあの人来い、この人来いというようにして招いたのでは本当に我々の聞きたいことすら十分聞けないのです。

私自身すら東和町でずいぶん話をしましたけれども、今まで本当に話したいことを十分に話したことがない。なぜなら一時間やそこらで話したいことが話せるものではないのです。やはり何十時間という時間をかけなければいけない。その中で問題が展開してくるのだと思います。同時に皆様方の方も中途半端なことを聞いてもどうしようもない。じっくり考えてみることでできる学習をはじめたいのです。

これだけのことは最初に皆様方に知っておいていただき、そしてその中で皆様方がこれから知識を吸収していただいて、この町でそれをどう実践して、日本のへきすうの地である東和町でなく、我々にとって東和町がこの地球の中の真ん中である、そういう意欲を持って町作りにいそしんでいただきたいという感を深くするので。それが新しい郷土主義のすがたではなからうかと思えます。

大変長いあいさつになりましたが、それだけのことを言っておきませんとこの大学が大変あいまいなものになりますので、ひとつよろしく願います。

# 砂漠の国からの便り

石油、原子力、安全保障とアラブの人々

いま いま  
りゅう きち  
今井隆吉

(クウェイト大使)



## 冬のクウェイトから

一月に入るとクウェイトの砂漠は緑のカーペットになる。もちろん、砂漠一面

に草が生えるわけではないので、やや視線を低くして眺めなければいけないのだが、それでもこちらに来る前に想像していた「荒涼たる砂漠」とは大部様子が違う。

三月に入ると水仙が黄色の花をつける。もう緑の芽が十センチメートル以上の高

さになっている。暮から正月にかけて夜の最低気温が零度近くまで下がるこの国の「冬」が終わるのは三月。四月からはまたあの物凄い暑さがやって来る。撰氏五〇度を越す熱風と砂嵐の季節になると人々は冷房完備の家の中に閉じ籠もって

しまうのだが、冬のクウェイトは、湾岸の中でも理想郷だと言われる。蝦の季節は終わって禁漁になってしまったが、アラブ湾の海の幸は豊かである。鯛がある。キスやアジや舌平目などが季節によって浜辺で手に入る。今は紋甲イカのシーズン。何も中東まで来て日本と同じ暮らしをするつもりはないし、またできる訳もないのだが、俗に言う「住まば都」で、なかなか良い処である。

砂漠の国で、水は海の水を淡水化して作るのだから、努力はされているが農業はなかなか育たない。野菜は全部輸入である。牛肉も冷凍で輸入して来る。回教の戒律の厳しい処だから、豚肉はもちろん売っていないし、お酒も駄目。その代わりお金持の国だから、バラはアルゼンチンから、チューリップはオランダから毎日空輸されていて、花屋さんのをぞくと時にブーゲンビリアから極楽鳥の花まで色鮮かである。私の住んでいる公邸の庭にも草花が咲き乱れ、前の大通りにはナツメヤシが街路樹として植えられている。高層ビルと緑の近代都市といった感じで、ただし樹や草には毎日高価な水をやらねばならないし、緑もやや灰色がかっていて、時に地中海沿岸に旅行して見ると「本当の緑色が目に染みる」。

## 石油論議に また別な視点が

遠くにおいて考えていた「砂漠の国」と近

くに来てその中に住みついたので印象がまるで違う。日本にいて考えていた「中東の石油」が、ここに来てアラブのインテリ達と話してみるといかに一方的な考えであったかが良くわかる。あんなにたくさん石油資源があるのに「資源固渇を心配する」というのは値上げの口実なのだろうか疑っていたが、現実はこの地域の人々は、「石油資源が続く間に国の近代化が成し遂げられるか」という形だ。三〇年、五〇年の時間表を考えているのである。基本的には遊牧の民であった人々が教育を受け、近代産業を支える底辺からトップまでの構造を作り上げ、しかもそれを伝統的なイスラムの価値観やアラブの気質と調和させて行こうとしたらそのくらいの時間がかかる。

しかも、今や世界の安全保障問題の焦点とすらなっている中東地域がその期間にわたって安定を維持し続けるだろうか。とかく「きれいな事」だけで物が収まる筈がないのである。その上、砂漠の様子が夏と冬とはまるで違うように、また一月の最低気温がサウジアラビアのジェダヤ、アラブ首長国のアブダビでは一八度ぐらい、クウェイト市が五度ぐらい、テヘランやバグダッドでは零下に下がり、ダマスカスでは雪が降るといふふうに、同じ中東と言っても国によって様子は随分と違っている。民族や部族の違い、言語の違い、風習から服装、同じイスラム教でも宗派の違い。そして何より大きいのは石油資源のある国とない国の違いで

ある。

利害の相違が国によってどれだけ大きいかの証拠がこの地域で続いている二つの戦争であろう。言うまでもなくイスラエルとパレスチナの間の戦いと、イランとイラクの戦争である。レバノンの内戦は相変わらず激しいようだし、北アフリカに移ればチャドの戦い、エルトリアの戦い、サハラの戦いといった具合に人々が武器をとって血を流し合っている。単一の「中東」という地域があり、単一の「OPEC」という団体があって石油を操作している訳ではないことが、まさに毎日の体験としてだんだんにわかって来た。それと同時に、この地域から日本という国がある距離を置いて眺めるチャンスを得たことは大変に幸せな事だったと考えている。アメリカやヨーロッパでは何と云っても日本とは馴染みが深過ぎて、ある種の親近感と共通意識がある。それが、この辺りに来て見ると、地理的な距離以上に心理的距離を痛切に感じる。そういう目で見ると、日本で行われているエネルギー論、特に石油論議はあまりにも自己中心で近視眼的なもののように感じるし、原子力論争もそれぞれ大切な事を論じて合っているに違いないが、同時にこまかい事柄にこだわり過ぎているのではないかという気がしてならない。もちろん、日本のすべての議論がそうだと云うのではなく、私自身がこの十年ほど直接にたずさわって来た石油論、原子力論についての率直な感想である。

## 一に国防、 二に水造り

この国に住んでいるとガソリンや電気は驚くほど安い。着いて早々に公邸のコックさんの買出し用に小さな日本車を買った。当日、モノ珍しさもあって、自分で運転して街に出てガソリンスタンドに行って見た。満タンにして、多分四〇リットルも入れたらどうか、お金を払う段になって良く考えて見たら日本のお金にして五〇〇円ばかりである。日本の十二分の一ぐらいの値段であらう。「物凄く安さだ」と言ったら一緒に来て来たコックに「だけど大使、毎日お茶をいれるのに使っている水は一リットル一五〇円ぐらいしますよ」と言われてしまった。海水から作った水は馴れないものにはなかなか飲めないの、飲用はすべてビン詰めのミネラル・ウォーターである。それにしても、毎日人夫が街路樹にやっている水、うちの庭でもインド人のハウスポーイが毎朝草花に撒いている水はガソリンの値段の三倍はするに違いない。世の中「アベコペだ」というのをまず身をもって体験したことになる。

には御容赦を頂きたい。家はもちろん全館冷房(冬は暖房に切り換わる)である。さもないと五五度にまでなる夏の間は過ごせない。事実、クウェイトを例にとると夏のピークは冬のピークの三倍ぐらいの割合いで電気を使う。その上、庭から街路まで夜中もこうこうと明りがついていいる。だんだん調べて見たら電気代は一キロワット時一円五〇銭だということがわかった。月収二〇万円以下だと「低所得層」として政府が無料で家を建ててくれるくらいのお金持国だから、電気代などに誰も大した関心を払わないのは考えで見ると当然の事である。

それほどまでにお金持だというのは湾岸諸国の中でも石油の歴史が最も古く、人口も一五〇万人程度の大きさなので、大工業プロジェクトよりは社会のインフラストラクチャー整備にお金を費い、残った石油収入はロンドンやニューヨークの金融市場を通じて操作しているというクウェイトの特色だが、それにしてもこの辺りの国々に共通した面は多い。

砂漠の国にとって、人口が増え、緑の環境を作り、そして工業を進めて行くために水は何としても必要である。去年一年間を通じてアラブの国々が契約した各種建設プロジェクトの中で、「水造り」は五四億ドルと全契約額の二割以上を占めている。これが第二位のアイテムで、ちなみに契約額のトップは国防関係の六四億ドル、そのほとんどは先進国から超近代兵器を買入れるのに使われた。第三位

は「家造り」で五〇億ドル、盛んに新聞種になる石油精製や石油化学などのいわゆる「炭化水素関係」は合計二六億ドル、順位にすると七番目の辺りに位している。

## 「省エネルギー」が 説かれるわけ

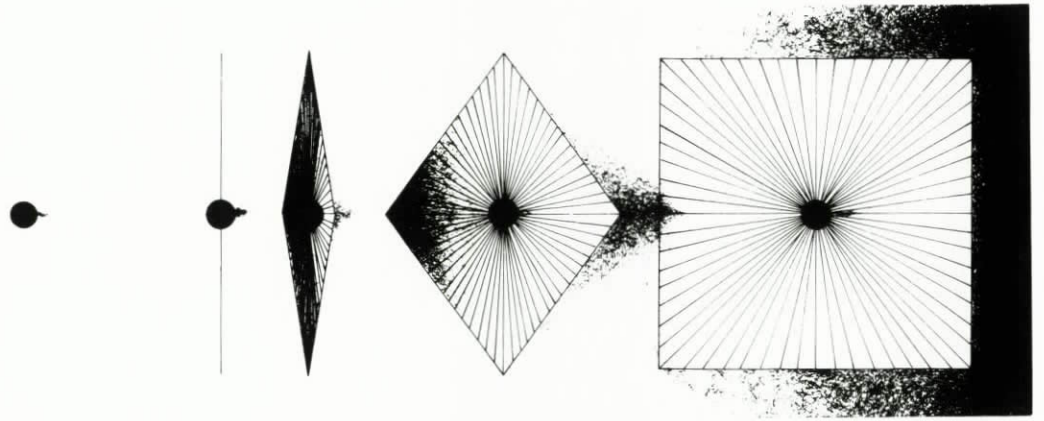
ガソリンにしても電気にしてもそれだけ安いのは言うまでもなく、原料や燃料である原油やガスをタダ同然に値踏みするから、これを外国に売る時の「OPEC協定価格にプレミアムを加えたもの」で評価したら、すぐに東京値段に近くなってしまう。「産油国の特権だ」という考え方もあるだろうが、このごろ産油国自身の中からそのような補助金政策に対する批判の声が高まり始めた。イランが先般、国内のガソリンの値段を一举に三倍に引上げたのは、イラクとの戦争でアバダンの精油所が破壊されて国内的に品不足が起きたのも一つの理由だが、それより前に「国内のエネルギー消費を抑えなければいけない」という政策的配慮が強く働いていた。

クウェイトでも公共の建物に入ると所々に「省エネルギー」のポスターを見かける。ひどく違和感があったのだが話を聞いているうちにだんだん納得が行くようになった。たとえば、クウェイトの発電所は今容量の合計が二五〇万キロワットぐらいだが、数年後には六五〇万キロワットに増やす計画である。一軒の家の

電力消費が百キロワットぐらいと日本とは桁違いに大きいので、小さな変圧器で配電はできないから、街の至るところに相当な大きさの変電所がある。これが全部夏のピーク需要に耐えるためだとすると総投資は大変な金額に上り、しかも効率は比較的悪いことになる。先程の一九八〇年一年間の契約額に戻って考えると「電力関係」はアラブ全体で三三億ドルと全体の第五位を占めている。ガソリンにしても「安いから」というのでどんどん使っていると、せっかく建設した精油所の製品の大部分は国内消費に回ってしまい、「付加価値を高めて輸出する」という現地精製主義にもとることにもなるし、だいたい、重油ばかりを輸出しようとしても世界市場は受付けてくれないだろう。

国内のエネルギー価格が安いことの最大の問題は、内需の急増にある。アラブ石油輸出国機構(OAPEC)の事務局が試算したところでは、紀元二〇〇〇年のアラブ諸国の国内エネルギー需要はこのまま行くと二二・五百万バレル／日に達すると言う(百万バレル／日はmbdと書き通常石油の生産や消費を論じる時の単位として使われる)。一九八一年のアラブ圏の生産予測が約二〇mbdで、資源保存の立場からこれ以上生産を増やしたくないというのが今の産油国の共通の立場だから、現在は一・五〜二mbdで済んでいる内需が二〇年間に急増したのでは、生産の半分以下しか輸出に廻す分はないことになる。これでは近代化に必要な資金にも事を欠

くというのが悩みの種である。クウエイトの砂漠を自動車まで走っていても、もはや昔の自然のままを見ることはできない。至るところに送電線の鉄塔が並び、地平線上に銀色の石油タンクがあり、新しい道路が建設され、巨大なヒ



ーム管を埋めるために砂が掘りかえされている。確かに飛行機の窓から眺めるサウジ・アラビアの砂漠は巨大にして広大な砂の波であるが、それでも西海岸のヤンブーや東海岸のジベールへ行っても工業化センターを見ると、「あんな大規模な土木工事で砂漠が工業団地に変えられて行くのを目にするとは空恐ろしくなる」とベテランの日本人技術者が言うほどの大変革が進んでいる。イラクが工業化、近代化に注ぎ込んだお金が去年一年だけで一二五億ドルと前年にくらべて一挙に倍増している。

これだけ急ピッチで近代化が進むに当たって、これらの国々は二つの大きな基本的不安を抱いて居り、これらを如何にうまくマネージしていくかに自分達の将来がかかっていると考えている。二つの問題は、いずれもシャアのイランが直面し、扱いに失敗したものである。一つは如何に石油収入が巨大であると言っても、世界全体のスケールから見ると、全アラブのGNPは西ドイツのそれに及ばない。サウジ・アラビアの石油収入が巨大だと言ってもイタリーのGNPの半分である。

巨大近代化プロジェクトを進めていくにつれて、石油価格が作り出した世界経済の動乱に巻き込まれて、たとえば一九七八年初頭には総予算の三分の一以上に当る一七〇億ドルの赤字を出したのがイランの経験である。それによって当時のイランは五・七mbdという、埋蔵資源量に比べれば破格に多量の原油を生産してい

た。もう一つの悩みは、急速な近代化が伝統的な価値観とコンフリクトを起さぬかどうかという点であり、ちょうどわが国が明治の初めから百年間をかけて、この問題を、何とか徐々に調節してきた（結果の良し悪しは別として）ように、何とかうまくマネージしなければならぬという意識は非常に強い。

## スーパーマーケットで感じたこと

イスラムの国に来てまずまごつくのは安息日が金曜日という点である。つまり役所も会社もお店も休みは金曜日、従って木曜が半ドンに当る。週末が土・日ではなく木・金だけであり、事実カレンダーもそのように印刷されている。ところが、長い間植えつけられた習慣というのが、恐ろしいもので、この二日分の調節がどうにも難かしいのである。その上、日本との連絡の多い仕事をしていると、時差が六時間あることに加えて、東京の休みの日はこちらの働く日、こちらの休みの日は東京では働く日、ということ連絡その他がすべてチグハグになつてしまふ。イスラムの国へ来た人々は皆まずこの心理的な調節ができずに苦労しているようだ。

別段、金曜日と日曜日の問題をもってアラブと西欧ないし日本の価値観の相違を代表させるつもりは無い。ただ要するに「違う」のである。たしかに街の中の

スーパーマーケットに行つて見ると、たずまいはアメリカや日本のスーパーと全く変わらない。自家用車で来て、店内のカゴや車を押して棚からいろいろな物を取つてレジに行つてお金を払う。並んでいる品のほとんどが日本製かアメリカ製だから様子は尚一層似ている。その上、最近ではレジの機械が進出していて値段も普通の算用数字で打ち出してくれるから、アラブ数字を無理に覚えなくとも大抵の店で買物ができる。それでいてやはり、日本にもアメリカにも無い違いが厳然とあるのは当然だろう。

まず人々の顔つきが違う、服装が違う、言葉はもちろん違う。しかしそれだけなら日本とアメリカの相違と大して変わらないうちであらう。よくよく考えているうちに何となくわかつて来たのは次のような点である。日本とアメリカは百年にわたつてつきあつて来た（もちろん、戦争をしたのもこの場合「つき合い」の中に入る）。日本とアラブ世界、あるいはイスラム世界の間には歴史的にまったく「つき合い」がなかった。ヨーロッパ人は五百年前に日本に来ている。日本近代化の旗手は蘭学を学んだ若者たちだった。そういう意味で日本とヨーロッパのつき合いには歴史がある。アラブとのつき合いは石油を買い自動車やプラントを輸出する相手として、最近始まったばかりである。その点ヨーロッパとアラブの関係には長い歴史がある。十字軍は異教徒であるイスラムと闘うためにヨーロッパのキリ

スト教徒が送つた遠征軍だったことを考へて見るだけで簡単に気がつく事である。ギリシア、ローマの文明が西洋に伝わつたのはアラブの学者の翻訳を通じての事だった。もっと近代に至つても、第一次大戦も第二次大戦も、オットマントルコ帝国を通じて、あるいはイランや北アフリカを通じて、中東地区が一つの闘いの場であり駆け引きの場であつた。イギリスにしてもフランスにしても、あるいは遅れてやつて来たアメリカにしても、この地域とのつき合いは日本のそれにくらべては話にならないほど長い。

それだけ、日本にとって中東は「違う」世界であり、心理的に距離のへだたつた相手であつたし、この地区に住んでみて感じる事は、アラブにとっての日本も「遠い国」なのである。まず、この「心理的距離」を縮めることから始めないと、ただ闇雲に石油を買つたり、工業製品を売つたり、あるいは「今や日本も大国なのだから」といった程度の意識で中東和平や湾岸安全保障に口をはさもうとしても、先方が次第に受け付けなくなつて来るだろう。もし日本にとってアラブが重大な国益にかかわり、エネルギーの生命線であるならば、この地区の人々が今何を本当に必要としているのかをじっくりと学んで、それに協力する態度でとりかからねばならない——のではないかと私は考えている。それには、近代化のプロセスでどんな問題に出会いどんな経験をしたかの情報を交換するのも良い。近代社会を支え

る「人造り」を日本はどうやって取り組んだかを説明するのも良いだろう。そういった地味なセミナーのようなものを共催して、次第に友達づき合いができるようになると、違いは違いとして、お互に親しい間柄になれるのではあるまいか。

## 「現実の脅威」とは なにか

イランとイラクの間で戦争が始まって、湾岸安全保障が声高かに論じられるようになった。日本の関心はもっぱらホルムズの海峡の安全航行に集中しているかのようである。必要とする石油の七〇パーセント以上が大型タンカーでこの海峡を通じて運ばれて来るといふ日本の立場からすれば当然の話であろう。しかし、ホルムズ海峡がどこかに抽象的に存在するわけではないことはもちろんである。イランの領土とオマンの領土にはさまれた幅約五〇キロメートルほどのこの海峡がアラブ湾の入口を扼している。その外側はいわばインド洋である。湾岸の国々全部が安定し、インド洋が波静かでないならばホルムズ海峡だけを論じてみても始まらない。

中東の石油の非常に多くの部分がこのアラブ湾岸で産出され、有名な石油積出し港がアブダビの近くから始まって、サウジ・アラビアのラスタヌワラ、カフジ、クウェイトのシユバイバ、イラクのファオ、イランのカグ島というふうに並ん

でいる。陸上の油田もだが、アラブ湾の沖合に出て、いわゆる石油銀座の海底油田のやぐらが立ち並ぶ様子を眺めると実に壮大な感じがする。「油を流したように」静かな海が水平線に丸く取り囲まれた中に無数のやぐらがあり、一〇〇〇メートルも二〇〇〇メートルも深い地中から原油を汲み出している。集積用のやぐらまで海底パイプラインで運ばれ、そこでガスと分離されると、原油はそのまま何十キロメートル先の陸上のタンクまでポンプで送り出される。分離されたガスは勿体ない話だがそのまま海面の煙突から吹き出し、火をつけて燃やしてしまう。水平線のあちこちに焰が見え、黒煙がまさに天を焦すように立上っているのが見える。煙突の近くの海は熱のために蒸発して一面に水蒸気が立ちこめている。直径一〇〇メートルもある陸上の貯油タンクから二〇万トン、五〇万トンのタンカー船への原油の積み込みは、同じく海底パイプを通じて自動的に行われる。原油が送り込まれるのにつれて何十万トンもの巨大なタンカーがだんだんに赤い船腹を海に沈めて、甲板が低くなり、全部の原油を船倉一杯につめ込んだところで、遂に黒っぽい部分数メートルの高さと甲板上の艦橋しか見えなくなるところは何とも言えず印象的である。

これらの石油施設が軍事攻撃に出会うと防ぎようがないということが今度のイラン・イラク戦争から明らかになった。両軍ともそれぞれアメリカおよびソ連か

ら購入した超新鋭戦闘機、地对空ミサイル、誘導ミサイル搭載のヘリコプター、レーダーによる監視システム、大型戦車など多数の兵器を抱えて戦争に入ったのであるが、いざ実用となって見るとこれら兵器の多くは本来の性能を発揮することができず、戦線はこう着状態に入ってしまった。一方、超音速の戦闘機が二、三機で超低空から侵入してお互いの国の石油施設を攻撃するというパターンが初めから固定して、それに対する防御は成功せず、精油所、貯油タンク、パイプラインの送出しステーション、原油船積み施設などがそれぞれ損害を受け、昨年の九月までは両国あわせて四mbdと言われた生産が一時は完全にストップしてしまい、世界中に大きな危機感を与えた。

実際問題として、小規模空襲で油田に火事を起こさせる事は容易でないのだが、何しろ石油という燃え易いものを取扱う施設だけに、いったん部分的にせよ火がついたら始末が悪い。その上、ポンプだの、貯油タンク、海底油田のやぐら等がこわされると修復するのは大変手間のかかる仕事になる。つまり、これらの設備は少数のフアントム戦闘機による空襲に對してすら極めて「脆弱だ」ということが改めて実証されたのである。

今まで長い間、中東で戦争が起きても都市や石油は攻撃しないことが言わば暗黙の不文律となっていた感がある。その不文律が今回破られて見ると、この地区の国同志が戦争をしても、あるいはテロ

リスト・グループが活動を始めても石油の生産はストップしてしまい、修復には大変な手間とお金がかかる事が明らかになった訳である。これはアメリカやソ連がいわゆる世界戦争のパワー・ゲームの一環として中東に進出して、戦うかどうかといった問題ではなく、それと関係が仮りにあるとしても極めて間接的な「地域紛争」や「ゲリラ活動」の話であり、実はその方がずっと現実的な脅威だという認識なのである。

## 石油と原子力をくらべると

砂漠の話、水の話、スーパードの話、それから石油の話はいくつも出て来たが、いつまで経っても原子力の話が出てこないではないかと思われるかも知れない。実は、中東のしかも湾岸地域に原子力への関心はあるが、現実はないのである。イランがシャヤの下で四台の原子力発電所を建て始めていたが、革命に至るより前に計画は行詰まっていた。一つは現実的に百万キロワット発電所を何台も持つだけの電力需要も配電網も無かったこと、全く未経験でインフラストラクチャーも不備なところでプロジェクトを始めたため、建設コストが工業先進国に比べて三倍ぐらいいにハネ上ってしまった事等いろいろの理由はある。且下のところイランのこの教訓は他の多くの産油国にもあてはまりそうな話で、ここ数年のうちに

大型原子力発電所の建設にとりかかろうという国はなさそうである。

しかし、三〇年、五〇年かかって、石油代金を上手に使って近代化に成功した時に、いったい何をエネルギー源として使うかということになると（その時すでに石油資源は石油化学原料として以外は使い尽してしまっただけになる）、やはり「原子力だろう」という話になって来る。太陽熱とか核融合とか人工燃料とか話はいろいろあるようだが、アラブの産油国は自から技術開発に参加する気持はない。近代化そのものにかかりきりで、そんな時間もお金もない。だから、工業先進国がすでに実用化にまで持ち込んだ新エネルギー技術にしか興味を持たない。となると原子力発電ぐらいしか候補者はないことになるから、まあ三〇年ぐらいかかって自分達の「ものにする」ぐらいのつもりで慎重に手をつけようかと考えている。

そういった観点からすると、いま日本やアメリカやヨーロッパが問題にしている「安全性」の細かい議論や放射性廃棄物の高貴な哲学的論争にはほぼ全く関心がないのである。この稿の初めに用いた表現を使うと、原子力発電はそのくらい「遠い」話であり、それだけにかえて石油の次としての位置づけを正確に読んでいるとも言える。

私がこの文の中で石油を取り囲む中東の話のいろいろとして来たのは、初めて中東に住みついた人間の「印象記」をこ

紹介するのと同時に、石油の問題、その将来の供給安定性、がいかに複雑な問題のからまりの上に立っているかを強調したかったからである。そしてその複雑さは原子力の難かしさの比ではない。原子力はどちらかというと、技術的、心理的な内容の問題が主であり、そのどちらも日本が自分自身で処理し、管理することが出来る。石油の場合は相手がある。それもOPECという名の単一の相手でこれと上手に交渉して話をつけければ石油の供給が保証されるといった形では全くない。個々の産油国が違う問題をかかえている。そしてそれぞれが違う角度から自己の利益を推進すべく、ほとんど唯一のと言って良い効果的な武器である石油を最も有効に利用しようと考えている。石油産出国の立場に立って考えて見れば当然の事である。そしてそこから出て来る諸問題に加えて、湾岸地区の安全保障が国際間で、あるいは内政面で、安定供給の能力そのものの将来に懸念の余地を与えている。

昨年まで私自身が渦中であって参加していたわが国の原子力論争に今更、中東から口をはさもうという気はない。それよりも、これだけ物理的にも心理的にも距離を置いて自分の祖国を眺めていると、日本が自分で管理し推進する余地のある实用エネルギー源である原子力発電について、論争は良い加減にして実用化をもっと早く進めないと、今に本当に困ったことになるだろうと強く感ぜざるを得ない。



# 討論

## 一九七三年と一九八五年

### 石油をめぐる国際情勢



とみたてたかお  
**富舘孝夫**

(日本エネルギー経済研究所研究部長・茅誠司部会)

むらた りようへい  
**村田良平**

(外務省中近東アフリカ局長)

かさ いあきひろ  
**笠井章弘**

(政策科学研究所理事長・二十一世紀フォーラム事務局長)

報告

#### 報告1—石油地政学上の変化

**富舘** それでは討論の材料という意味で簡単に問題提起をさせていただきます。

まず最初に、七三年以前には見られなかった「石油地政学上の変化」がその後の石油をめぐる国際情勢にどのような影響を与えたかについて、いくつか問題点を整理してみたいと思います。

その一番目として、OPEC、産油国側が生産抑制を著しく強めてきていることがあげられます。これは一つには、イラン革命の教訓といえますが、これまで工業化に性急であった中東産油国諸国の中に、あまり工業化を急ぎすぎないようになしようという動きが出てきたことが一つ。同時に、もう一つの理由としては、世界経済の低迷やオイルマネー還流の国際的メカニズムがうまくいかないということもあって、最近大産油国あたりでは、オイルマネーの海外投資の意欲が減退しつつある。できれば余剰のオイルマネーは作りたくない。

そういう二つの理由から、最近ではO

P E C の石油生産の天井が、いちじるしく低くなってきています。第一次石油危機前、一九七三年頃までは、たとえば一九八五年なり九〇年のOPECに期待される生産量は四〇〇〇〜四五〇〇万㊦といわれていました。現在、OPECの原油生産量は二五〇〇万㊦程度ですが、今後これを三〇〇〇万㊦に高めるのは大変むずかしく、消費国の対応如何によっては二〇〇〇万㊦前後にまで減産するのではないかと予想が強く出ています。

二番目の変化としては、中東・アフリカを中心とする産油地域での政治的・軍事的不安定が常態化してきた事があげられます。

これは一つには、石油を政治的武器として使うことが頻繁に行われています。ご承知のように二回の石油危機を通じてこれは前面に出てきていますが、その他にも大小さまざまなエンバボーゴ(禁輸)という形で現われています。契約の時に、特定の政治目的に違反しないという条項が入っていて、違反した場合には即輸出禁止になる、というが如きです。

また、イラン革命以降、イラン・イラク戦争に典型的に見られるように政変、地域紛争、破壊活動など大小さまざまな石油供給のインタラクション(途絶)が頻発していますが、これに対して、かつてのワシントン・リヤド・テヘラン枢軸の崩壊以降、あとを埋めるべき安定装置を欠いたまま推移しています。

**笠井** それは何年以降とお考えですか。

一九七三年の第一次石油危機以来早くも七年余の時間が過ぎましたが、この間イラン革命による第二次石油危機の発生、イラン・イラク戦争の勃発、長期化など新しい状況も加わって、石油をめぐる国際情勢は依然混沌としているように思われます。八〇年代の近い将来にそれがどう展開するかの見通しを含めて、今日はお三方に、七三年以後の一つの「中間総括」をやっていたいただきたいというのが編集部を考えです。広範なテーマでもありますので、最初富舘さんから簡単な報告をお願いし、そのあと討論に入らせていただきます。

(編集部)

富館 イラン革命以降と考えています。

地政学上の変化の三番目のものとして  
はソ連の変化があげられます。ソ連の石  
油生産の増産が見込めなくなってしまう  
た、その結果として、これまで輸出国で  
あったソ連が純輸入国に転化するとい  
うことが言われています。どの程度の輸入  
国かについては、例のCIAレポートも  
ありますし、私どもではそれほどは見  
ていないのですが、いずれにしてもソ連  
としては外貨獲得その他の必要性から、  
西欧への石油輸出は続けなければなら  
ない。そのぶん中東・アフリカからの輸入  
は増大する。今後はいろいろな形でソ連  
の中東進出が強まると見られます。

四番目に、以上の三つの要因が重なり  
ますと、いろいろな形で石油ショック  
が繰り返す発生する恐れがあるとい  
うこと、それに伴い、消費国間での石油  
の安定供給獲得をめぐる対立も激化しま  
す。たとえばフランスが、イラン・イラク戦  
争が起きた時、ミラージュを輸出して石  
油の確保を図った、あるいは日本がスポ  
ット市場で高値買いたなど、消費国間  
での競争が激化します。共通して危機管



富館孝夫氏

理対策を打ち出すべき消費国同士が、そ  
の必要性を痛感しながらも有効な対策を  
打ち出しえない、そういう情勢にあるの  
が現在です。

## 報告2—国際政治力学の変化

富館 以上の「石油地政学上の変化」に  
対応するような形で、あるいは相互関係  
を持ちながら、「国際政治構造上の変化」  
とも呼ぶべき変化がこの期間に見られ  
ます。国際政治力学上の変化といつても  
いいかもしれません。

たとえばアメリカの政治的、軍事的地  
位の低下といった問題を上げることがで  
きます。それがイラン革命、あるいはイ  
ラン・イラク戦争の発生を防止できな  
かったばかりか、新たな石油危機を呼び、  
ドルの下落やインフレ増進という経済力  
の低下を招く、という関係にあると思  
います。

第二に、これとは逆に、OPECの地  
位上昇といった問題があります。とくに  
注目されることは、OPECはその内部  
に政治的・経済的に利害の異なる国々を  
かかえるカルテルですから、生産量や価  
格が乱高下しますと、団結にヒビが入  
るおそれがあるということ、第二次石油  
危機の過程で、OPECとしての長期戦  
略を策定していこうという動きが出て  
います。この長期戦略は、価格問題のほか、  
非産油途上国との協力関係、先進国との  
協力関係等に分かれてきます。イラン・  
イラク戦争の発生によって一時、採用実

施が中断されていますが、最近になって  
再びそれを採用し実施していくための調  
整が真剣に行われています。

第三に、OPECに対応する形で、先  
進消費国の側で、IEAが打ち出された  
わけですが、これも当初の対決的な姿勢  
から次第に、OPECとの協調を模索し  
共通の利害を打ち出すことによって、石  
油・エネルギーの安定的な供給を図ろう  
というふうに変ってきています。その一  
つの試みであるCIEC（国際経済協力  
会議）は途中で失敗しましたが、その失  
敗と、第二次石油危機の教訓とから、I  
EAとしては、当初の緊急時対策的な、  
あるいは受身的な施策から——それもも  
ちろん必要ですが——石油輸入の上限枠  
を設定するなど、いわば国際石油市場へ  
の直接介入をするように変わってきた。

このように、OPECを中心にした産  
油国側のカルテル的な仕組みと、IEA  
を中心とした先進国側の国家間の協調の  
仕組みの二つがそれぞれ強力になってきて、  
今後石油をめぐる国際管理の枠組みが徐々  
にでき上がっていくという印象を持っ  
ています。

もう一つ注目すべき問題として、南南  
問題が出てきています。同じLDC（発  
展途上国）の中で、産油途上国と非産油  
途上国という二つのグループの分化が起  
こり、国際政治上的変化をより複雑なも  
のとしている点を指摘しておきます。

## 報告3—八〇年代の課題

富館 そこで、以上の地政学上の変化と  
国際政治の構造上の変化を踏まえて、八  
〇年代を展望した場合、石油をめぐる国  
際政治のバルネラビリティ（脆弱性）は  
七〇年代より一層増大するだろうとい  
うことがまず考えられます。いつ何時、ど  
のような危機やショックに見舞われるか  
わからない。よほどの協力関係、新しい政  
治的枠組みを国際的に構築していけない  
と危機は避けられないだろう。

日本は第二次石油危機もわりとうまく  
乗り切って、経済成長も五割達成したと  
いうことで楽観的ですが、ヨーロッパへ  
行きますと、第二次石油危機によってゼ  
ロ成長あるいはマイナス成長になった国  
も多い。いままではあれほど輝かしい前進  
をとげてきた西ドイツ経済ですら、いま  
や経済成長が覚束なくなった。その意味  
で西欧は大変敏感だし、深刻です。

従いまして、従来までのような先進消  
費国側の石油外交・石油戦略では弱すぎ  
る、八〇年代にはもっと強力な政策を持  
つべきだということ、今後二つほどの  
方向が予想されます。一つは、防衛・軍  
事、外交、エネルギーの三つを一体化さ  
せて考える方向の重視。もう一つは、代  
替エネルギーの開発や省エネの重視。あ  
るいは二国間や多国間のエネルギー協力  
（融通・備蓄その他）を含めて、広い意味  
での「エネルギー・セキュリティ」を高  
めていく方向の重視——この二つが八〇  
年代、少なくとも八五年への対応を考  
える上で重要な方向と思われま

具体的には五つばかりの問題領域があります。一つは、**中東情勢**をどう読むかということがあります。これは、きょう村田さんもご出席のことでありますので詳細にお話を伺いたいと思います。

第二は、その中東情勢の展開と絡んで西側消費国の対応、その中でもとくに現在、**アメリカの対ソ戦略**ということが、エネルギーの分野にまで大きな影響を与えてきているのではないかとというのが私の印象です。

最近、米上院ジャクソン委員会で「石油の地政学」という報告書が出されましたが、これを読みますと、今後、石油問題の対応にも軍事や外交を重視しなければいけないということを述べていますが、その基本は、中東地域におけるソ連の侵略にいかに対応すべきかが中心になっています。たとえば中東諸国に対する武器輸出を取り上げて、これは消費国の対立を増大させる強い要因になっていることを指摘すると同時に、危機の様々な段階に応じて、外交的な対処だけでなくうまくいかない時は、軍事的な抑止力とか制圧が必要だと述べています。

こうした見方は、たとえば同じ消費国であるフランスにとって受け入れにくいものであろうし、日本にとっても、理解はできても受け入れ難い面があることは事実です。また中東産油国ではアメリカのそうした軍事的プレゼンスに対しては当然反発が起こるだろう。つまり、いろいろな形での「パーセプション・ギャップ」

が消費国間、消費国と産油国、その他の国々の間で生じ、それがまた新しい摩擦要因となりかねない。日本にとっても非常に困難な宿題がますます多くなるだろうと思われまます。

第三には、**非産油途上国への石油・エネルギー協力**が重要な問題になる。非産油途上国が、先進国に対する援助の要請だけではなくて、産油国に対してもかなりはつきりと、われわれにもオイルマネーをよこせという主張を出し始めた。

**笠井** UNCTADのマニラ会議……**富舘** を始めとして、その前に、CIECの場でも相当出しましたが……

**笠井** CIECはそれで崩れちゃった。富舘 つまり、産油国と先進消費国は大援助グループという立場に立たされている。先にもちよつと述べましたが、OPECの側では長期戦略の一つの柱として、先進消費国と共同で非産油途上国に対する協力をしようではないかという、ある程度具体的な構想を語っています。

すでにOPECの側では「ボールを投げている」ということでありまして、先進国がそれをどう受け止め実施していくかということが、政治日程としてはかなり差しせまった課題です。

**笠井** 今年の南北サミット、サミットではそれが一番大きな課題でしょうね。

**富舘** 第四番目の問題は**先進国間の協力**で、たとえば東京サミットで決まった石油輸入枠をさらに厳しく削減するという課題がありますが、ご承知のようにその

調整がなかなかむずかしい。また、エンバーゴ対策、インターラプション対策も大変な問題でして、現在までのところ「概念」はあるが実際どういう枠組みで、誰が担い手になるか、価格をどうするかなど、真つ暗闇といった状況です。

五番目の問題として、**脱石油、省エネルギー**があります。これもグローバルな関連を持った問題領域です。その一つとして原子力がありますが、カーターからレーガンに代わってアメリカの原子力政策の転換が伝えられています。また、今後十年、石炭への転換が量的には脱石油の中で大きな役割を果たすでしょうが、

国際的な石炭の移動の増加がどのような形の新しい摩擦を起こすかといった問題もあります。

以上、簡単に五つの問題点を指摘して私の報告を終りたいと思います。

——— どうもありがとうございます。広範な問題を要領よくまとめていただいていたことがありがとうございます。討議に移らせていただくわけですが、只今の富舘さんの報告についての印象なり感想を、まずお二人から伺うことから始めたいと思いますが……。

### 一九七三年・転換の意味

**笠井** 富舘さんの報告は、答えのない難しい問題について大変要領よく、しかも簡潔にまとめておられて大変参考になりました。

感想を申し上げると、きょうのテーマである「一九七三年と一九八五年」ということについて、私は「一九七三年」をどう位置づけるかによってその後の議論の枠組みが変わってくるのではないかと考えていますので、その点を若干補足しておきたいと思えます。

一九五〇年代の初頭には、メジャーと産油国の石油収入の配分は、メジャーが七〇、産油国が三〇——八〇対二〇、あるいは六〇対四〇というような見方もありますが——とされていた。一九六〇年、OPECが創立された時は、五〇対五〇、あるいはまだメジャーの方が多かった。それが七一年のテヘラン協定になると大体三〇対七〇、さらに一年後のリヤド協定の頃になると、産油国九五に対して、メジャーが五程度。つまり、七三年の第四次中東戦争で、石油武器<sup>オイルウェポン</sup>が有効に作動した背景には、それ以前からのメジャーと産油国との間の一連の力関係の変化があるわけで、その評価が、その後の経過の読みを変える基本的な枠組みになりはしないかというのが私の一つの感想です。

もう一つ言いますと、七二年九月、ミューンヘンオリンピック選手村を「黒い九月」が襲う事件が起こった。ああした事件がだんだんタイムラグが短くなってきている。それと、いまの石油の力関係の変化を重ねてみたとき、第四次中東戦争が起こる可能性を、実は半年位前のある会合で予言して、その時は総スカン

食ったんですが、その二つからすると、やはり国際政治のターニング・ポイントは七三年にあったという認識を、私はしているわけです。

いま一つ、発展途上国の問題からいえば、政治的には、バンドン会議から非同盟諸国会議への流れがあり、経済的には六四年、六八年のUNCTAD会議以来、南の国の経済攻勢が盛んになった。しかし、その二つとも、必ずしも成功とは思えない。国際政治においては、やはり米ソの力が強かったし、経済的には、先進工業国の力が強かった。そういう二大核超大国を含めて、先進諸国が本当に支配力の低下を国際社会で証明したのは、やはり七三年の「石油武器」だろうと思うのです。それ以前と以後をいかに違ったように認識するかということが、繰り返されるかもしれないませんが、七三年以後八五年を展望する場合の一つの思考の枠組みを提供すると思われるからです。これは一つの例ですが、回教圏の新しい力が現在国際社会において相当なウエイトを占めていることは事実です。これはそれ以前にはなかった話ですね。しかし、その力が一枚岩かというとは実はそうではない。昨年十一月二十五日から三日間やった第十一回アラブ首脳会議では、事実いくつかに分裂したけれども、しかし石油に関しては共通の戦略を持っている。イラン・イラク戦争をやりながら一方で、昨年十二月のOPEC総会のように、石油の生産削減や価格問題を討議し

ている。これなども、やはり、六日戦争（第三次中東戦争・一九六七年）の時にひどい目に遭ったヤマニが、OPECを作る気持ちになった過去の教訓を生かして対応している。

そういう変化を踏まえて、単なる多極化ではなくて、多中心化していく世界の中で、やはり変化の一番激しかったところは南の国々で、これまで核も持たず、経済も弱かった小国が、石油という資源に鼓舞されて世界の檣舞台におどり出た。これは七四年の一連の国際会議以来、マニラ会議までずっとそうですね。

**富館** その意味では、報告で説明不足というか、落としていたのは、ニューエコノミック・オーダー、経済新秩序と結びついた問題ですね。

**笠井** 富館さんは「パーセプション・ギャップ」と言われたが、逆にいえば、南の国々の超大国に対する「パーセプション・ギャップ」が七三年以前と以降とはすっかり変わってきたといえるかもしれない。アメリカ大使館を四百四十四日にわたって占拠すること自体、これまでの国際ルール——先進国が「勝手に」

作った国際ルール——になかったことですから。

**村田** 私もしも笠井さんがおっしゃったことに近いような感じを持っています。本来、二つに分けて考えるべき問題であ

って、石油価格の上昇なり、生産制限、メジャーの力の弱まりというようなものは、戦争とは別に、それ自体が一つの自律的な動きでした。

しかし、六〇年代から少しずつ始まった、天然資源の恒久主権という考え方が、七〇年代に入って力を得つつあったところに、七三年の戦争で、それが突然綱を破って表に出てきた。そういうことだと思えます。その裏には、消費費、とくにアメリカが安い石油を前提とした生活様式を、五〇年代、六〇年代に築いてしま

って、まさに石油の大輸入国にならんとしたのがちょうど七〇年代の初めですね。その意味で需給のアンバランスということも潜在的にあった。それが突然表面化したということだと思えます。それと平行して、別途、世界政治の変わっていくものが、戦後ずっと進行していったわけで、米ソ、あるいはそれ以外の第二次大戦までは強国、大国といわれたような国々の役割が弱まり、逆に、いかに小さい国といえども、それぞれの主権を主張する、またそれを尊重するというルールが、言わず語らずのうちに戦後の国際社会の中で定着していった。

それに加えて、たまたま石油の出る中東というところが、第二次大戦後、ある

いは中には一部第一次大戦後、やっと独立したという国がほとんどで、人間でいえば少年期か、ようやく青年期に達した国々ですから、ちょうど少年期や青年期の人間が反抗したり、悩んだりするのがあると同様、国としても反抗したり、悩んだりする。そのため、いろいろな紛争が起こっている。本来なら経済原則で動くところがそうならないで、政治と絡んだり、複雑な様相を呈する。

石油と政治の絡みということ、もう一つ言えることは、石油によって各国の近代化は中東でもそれなりに進んだ。それが一方では大変な武器の集積をもたらすと同時に、他方で、国内の支配体制にある種の矛盾を起こしている。それには二つの方向があつて、一つは、従来の古い保守的な体制をもっと前向きなものにしていく動き。もう一つは、モスレム・ファンダメンタリズムに表われているような、復古思想といえますか、近代化によって伝統的な価値が壊されることに對する反発、その両面が表われています。

## あの西ドイツ経済ですら

——いま、村田さんから、近代化の二つの側面についてお話がありました。その辺りから、中東の現情勢をどう見るかお話しいただきたいと思えます。

**笠井** その前に、いまの近代化とも関連することですが、先ほど富館さんから、第二次石油危機後の西ドイツ経済につい



村田良平氏

ての重要な指摘があった。

つまり、第一次石油危機の時は、アメリカ経済が非常に頑張った。当時、日・米・西独三国機関車論などもいわれました。日本はどうだったかといえば、第一には石油産業に五千億円ぐらいをかぶらせ、第二には輸出をプッシュして外貨をかせぎ、第三には税金と、この三つで石油代金の赤字を切り抜けた。

国際経済の面という、第一には、七八年の前半まではアメリカが経済成長して、たまたま分のオイルダラーをかぶってくれたわけです。日本などはアメリカへの輸出を伸ばし、そのたまたま外貨で石油代金を払えた。第二には、中進国などでは国際借款をとって国内の経済拡大をはかり、それによって、石油代金を払うということをした。第三には、村田さんもいま言われたような産油国側の近代化。産油国にプラントや工業製品を売る

ことによって、先進国はオイルダラーを吸収しちやうとした。それまで六百八十億ドルあったオイルダラーが、七八年末には五十億ドルぐらいになってしまった。

このように石油ショックを吸収するよなメカニズムが、七三年以後、国際経済の中にでき上っていたかという、そうではなくて、富舘さんが先ほどもいみじくも指摘されたように、あの優等生であった西ドイツ経済ですら、第二次石油危機後、昨年四月からマイナス成長に陥った。日本は、たしかに現在までのところ優等生だが、第一次・第二次石油シ

ョックをカバーしたと同じような政策選択が、果たしてこの次も可能かという、非常に難しい問題だと思えます。

村田 いまの経済問題と間接的につながってくる問題かもしれません、私などの感じでは、そもそもOPECができたというのも、国際政治の構造変化に対応してというよりも、一種の対症療法的な産物なんですね。とにかくメジャーの無茶を何とかしようということであらう。年にそれができた。

同じようなことはIEAについてもいえ、私などの感じではこれもかなりな程度、対症療法的なもので、つまり、産油国の側も消費国の側も、本当の長期展望に立った対応をしていなかったというのが真相だったと思うのです。

さらに加えて、OPECの側では儲けた金を何に使うかについて、これも十分の調整がなく、ほとんどの国はいわば近視眼的な近代化に乗り出した。ここ数年は消費国がその動きにうまく乗って、オイルダラーの還流ができたわけですが、八〇年代はそううまくいかないというのは、笠井さんがいま指摘された通り、ほぼ明らかです。

笠井 七八年後半からいけなくなりました。村田 はい。さらに、そうやってお互いが対症療法的にやっているうちに出てきたのが、「南南問題」でして、これはきわめて根の深い構造的な問題です。ところがこの問題に対して、いまやろうとしていることは、たとえば石油収入の何パー

セントを非産油国に援助すればいいかと、GNPの何パーセントをMSACの国々に与えればいいのか、きわめてその場しのぎの解決方法のようです。今までと同じ対症療法的な姿勢でズルズル行くことには危惧がありますね。

笠井 いまのご指摘に大賛成です。むしろそういう意見が日本の現在のジャーナリズムにはほとんど見当たらないことに、危機感を覚えますね。

そこで、村田さんにもう一つ伺いたいのですが、イラン・イラク戦争が中東の和平や今後の石油・エネルギー問題に与える影響をどうごらんになりますか。見方によっては、アメリカにとって非常にやりにくい新しい芽とも見られるのですが……。

## レーガン政権のアプローチ

村田 現象的に言えば、中東に大きい火種が二つになった。もともとは中東紛争という火山が一つあって、数年間に一度大爆発をやると、しばらくは微震くらいで静かにしていて、また爆発する。ところが今度のイラン・イラク戦争というのは、必ずしもアラブ対ペルシャの戦いとか、スンニー派対シーア派の争いということではないが、イランとそれ以外の、特に湾岸諸国との対立を深くしてしまつた。おそらく今後戦争が終結しても、この戦争の残した心理的・精神的傷跡は容易に消えないと思えます。それに加えて、

中東紛争という問題と、湾岸の問題とがより密着してしまつたのが現状です。

ところが他方でソ連のアフガニスタン侵入という事件もあって、米ソが湾岸をめぐる対立するという要素が出てきた。いまのレーガン政権の対応を見ていると、ソ連を念頭におきすぎているという感じがします。中東紛争のほうは、イスラエルの選挙もあるから、少し先に手をつけよう、むしろ中心は湾岸の安全保障だということを感じがしなくてもありませんが、レーガン政権がこうしたアプローチを今後数カ月間にさらに検討して、よりバランスのとれたものにしてもらいたいという感じがしますね。

笠井 ヘイグ国務長官が、一月二十日のレーガン大統領の就任式前に上院外交委員会にて証言したものと、アメリカはカーター政権時代と違って、ソ連がこれまでのような行動をとるならば、中東地域における軍事的プレゼンスをも辞さない——と、威嚇的に述べていますね。しかし、それがかえって中東の危機を招く新しい要因になる可能性だってある。

村田 確かにアフガン進出をはじめ、エチオピア、南イエメンを含め、ソ連がアラビア半島を取り囲むような態勢ができたと対して、サウジアラビア以下の危機感は当然ある。しかし、だからといって、アメリカが対ソ一辺倒の方針を中東政策の基軸に据えるということには随いてこないですね。やはり産油国が希望するのは、ソ連の進出をこれ以上は許さ

ないことにプラスして、あの地域全体における紛争の要因をなくしてもらいたい。中東紛争という火山を永久に休火山にしてもらいたいということですから……。

笠井 しかし、休火山にするには、カーターの「キャンプ・デービッド合意」とは異なる解決の枠組みが必要でしょう。

村田 今の路線の延長のままで済まないでしようね。全く新しいものが出てくるか、キャンプ・デービッド合意にプラス・アルファのものが出てくるか……。

中東紛争のほかにも、先ほどの近代化の問題とも絡んで、いろいろな矛盾をどの国もかかえているわけです。また、アラブの中にも、イエメンのような貧しい国つまり南南問題がある。これらの問題にアメリカ始め他の先進国がどういった協力の手を差しのべてくれるか。

まあ、あれやこれやですから、対ソ一辺倒ということには問題がありますね。

## モスLEM・ファンダメンタリズム

——先ほど村田さんから、近代化の一つの側面ということで「モスLEM・ファンダメンタリズム」というご指摘がありました。それが、それに関連して、アラブ産油国の「ビヘイビア」の背景にある回教圏の理解といますか、その辺の見方を一度聞かせて下さい。

村田 乏しい経験ですから間違っているかもしれませんが、モスLEM・ファンダメンタリズムとか回教復興といわれてい

る動きの基礎は、大きく分けて二つあって、一つは国家なり民族としてのナショナリズムだと思えます。たとえばイランの革命を見ますと、日本の明治維新と似たところがあって、日本の場合は天皇制をもつてくることによってそれを乗り切ったわけですが、それに代わる役割を果たしているのがイスラムです。宗教というものが原動力になって起きた革命と見るのは、間違いだと思えます。

他方、国内に水平運動というものがあって、これはどの社会でもそうでしょうが、特に回教の本来の教義は人類平等ですから、王様であろうと、乞食であろうと……。

笠井 アラーの前では平等だということですね。

村田 そうなんです。それが現実には富があまりに偏在しているとか、弾圧政治が行われるとか、腐敗が生じるとかがある

と、素朴な民衆の怒りとして爆発する。笠井 それは先進国が読み違えた、非常に重要な点ですね。

村田 その二つが結びついたものが、たまたまイスラムという旗印を掲げたというふうに見えるべきだと思います。

富館 なるほど。

笠井 実は、村田さんはアメリカ大使館にもおられたし、湾岸諸国の大使もつとめられたという、数少ない、両方ご存知の方ですからそういう貴重なご指摘がいただけるわけですが、実は私も外務省の調査でアラブを回わったことがあるんで

すが、回教に関してあまりにわからないことが多い。それでこの21世紀フォーラムの松本重治部会でも、慶応大学の井筒教授にきていただいて話を伺ったことがあるのです。

井筒さんに伺ったことで、私が一つ大変興味を覚えたことは、井筒さんは、イスラム教というのは砂漠の宗教ではないと言われるわけです。これはモハムドが作った、あの当時の商業的、経済的な宗教であるというのが井筒さんの規定なんです。

もう一つ面白いと思ったことは、最初から、聖(宗教)と俗(政治や経済)が一緒だというわけです。だから、ちょっと話とはぶようですが、日本がこれらの国と国際協力する場合には、経済がダメなら技術がある、技術がダメなら文化交流がある——式の発想とは、根本的に相入れないものがある。そのちがいをどう認識してこれからどういう中東政策を形成していくかですね。

富館 いまの「技術協力がダメなら文化交流がある」式の話に関連することですが、日本とか、あるいはこれはアメリカ

も含めて、これから中東でやっていくべきことの一つは、広い意味での民主化を中東諸国でやってもらうことではないかと思うのです。これは政治でも、経済でも、教育でもあるわけですね。

民主化を、もつと開かれた社会、あるいはそのための仕組みと置きかえてもいいと思うのですが、最近、アラブの国とか東南アジアの途上国と接してみても痛感するんですが、発展の原動力となる層がまだまだ手薄です。資源ナショナリズム以来ようやく、一部のテクノクライト層が出てきましたが、その下の中級のテクノクライト層がいなくてですね。それを育てることが、結局、民主化であり、安定につながると思うのですが……。

笠井 確かにその議論は西欧なり日本では通りやすい議論だし、アラブのテクノクライトのリーダーシップをとっている人たちが、実は自分たちも下士官の技術者がほしいといっている実態もある。しかし、それを可能にする風土や土壌がどこまでありますか。

村田 いまの議論を聞いていて、私の率直な感じを申し上げますと、日本もそうですし、アメリカ、ヨーロッパもそうですが、アラブなり中近東とつき合うときは、おごりを捨てなきゃいけないと思うのです。

確かに日本は、西欧の思想をとり入れしかもそれを日本独自の体質に合わせながら、特に戦後に日本なりの民主的政治



笠井章弘氏

思想、政治制度を作り上げてきた。そのこと自体は誇りにしていい。しかし、わが国でいう民主主義体制が世界共通の規範であると思いがつてはいけなわけですね。イスラムはメジナ、メッカの都市の腐敗に対するマホメットの批判から出たもので、遊牧民の思想というより、むしろ都市の思想ですが、中東にはそのイスラムの原理に基いた社会思想というものがあるわけですから、それはそれで尊重すべきで、われわれの民主化とか、あるいは議会政治が一番正しいという認識はそこではドグマでしかない。

**富館** それはそうだと思います。それだけに、中・下級のテクノクラートがいろんな分野で育つ社会、と言ひ換えたいわけですね。そのために協力するということは、おごりがあつたらだきないですよ。トップと接触して、金を与えて、技術力を上げる。それはこれまでアメリカ人がやってきて失敗したことですから。

**笠井** マンパワーの養成について、これまでOPECがやってきたことを見ると、全然また別問題の難しさがある。その辺の認識がたとえば日本のジャーナリズムはまだ大変足りないというのが私の印象です。たとえば、オイルダラーで学校をつくった。しかし生徒が集まらない。そこで子供が学校へくると親に子供の小遣いを渡す。これはまさに「事実が小説よりも奇なり」という例です。技術の下士官が欲しいということと、それを実際につくるといふことはまた別問題です。

## 政経分離のポイント

——これまでの討議は、「火種」の可能性を検討してきたわけですが、いまの技術協力の話題あたりから、少し「対話」の可能性を検討していただければと思います。産・消費話、先進国間協力の問題等が最初の富館さんの報告にもありましたか……。

**村田** いま行われていないのは、いい意味での政経分離だと思うのです。きょうの冒頭で、本来、経済の論理で動く話と政治が絡んでしまったと申し上げましたが、世の中のことですからそれは絡んで当然ですが、意識的にそれを切り離す努力が案外なされていません。

いくつかのポイントを上げますと、一つは、過去の、十九世紀以来の先進国による植民地化、収奪というものに対する記憶執念が強すぎるんですね。ところが今や世界の实体经济はもうでなくなっている。まずその呪縛から解放される必要がある。そうすると、OPECと非産油国が一つのキャンペーンだと言ひ張ること自体がおかしいわけで、これが一つ。

その次の政経分離のポイントは、石油の生産制限をやるとか価格を上げるとかは、たとえば資源保存をはかりたいとか、特定の開発計画のために何千億ドルか欲しいということによるのに、それを例えば中東紛争の要因と絡めるプラクティスが依然としてある。これは非常に不幸な

ことでして、中東紛争はこう解決する、あるいはパレスチナ問題はこう解決するというふうな、それぞれの次元に分けて討論する。いわゆる「石油戦略」という考え方を排除する必要がある。石油で圧力をかけるといふやり方では問題の真の解決をもたらさないということを明らかにすべきです。

そこで、先進国のほうも、今までは歯に衣を着せて言わないようなことももつと露骨に言うことが、本当は必要ではないか。たとえばどこでも近代化、近代化というが、人口、技術能力からみても制約があることは明らかですし、何も工業化だけが生きる道じゃない。たまたま十九世紀以来、付加価値を高める最も手っ取り早い方法が近代化だという「神話」ができてしまっただけで、農業の発展をはかったほうがいい国もあれば、お金の運用で暮らしたほうがいい国もある。

**笠井** クウェートみたいなね。

**村田** その辺は先進国ももつとはつきり言うべきで、他方、潜在能力のある国には技術移転であろうと、投資であろうとどんだん協力する。その結果、調和ある社会にだんだんなっていくのではないかと思うのです。

## 西欧的な発想が裏目に

**笠井** 大変明快で、大賛成ですが、一つ心配なのは、第二次大戦後、社会主義国を含めて工業化を進めてきた国々——も

ちろん日本や西欧もそうですが——ではエネルギー多消費型の産業構造が定着している。逆にいえば、だからこそOPECやOPECの「戦略」が利いたわけですが、それをスクラップ・アンド・ビルドし、省資源・省エネルギーに転換するにはかなりのタイム・ラグを必要とする。ところが、他方で、そのタイム・ラグを許さないような産油国側の制約が高まっている。そこが実は八〇年代、八五年への一つの難関であつて、富館さんが先ほど指摘されたような、第三次石油ショックが起つたら日本すら適応能力を持ってない「大破局」に経済的には直面するかもしれない。

**富館** そういう差しせまった問題をどう技術的に解決するかと同時に、それぞれの国情に合った発展のビジョンというのを、もつと率直に話していいと思うんです。その場合、先のクウェートのような金融立国は別として、大部分の産油国なり発展途上国でみられるのは、農村の遅れですね。農村の遅れによって、ナショナル・ニーズ自体がまだ満たされていない。それが「貧しさ」の大きな理由になっている。インドネシアにしろ、サウジアラビアにしろ、必要なことは、その国に合った農村社会をどう安定的に発展させていくかということ、それは結局、農村工業化の問題だと思ふんですね。農村工業を砂漠の国とか、南方の国でどう育てていくか……。

**笠井** 基本的な方向としては間違っていない

ないけれど、実際、具体的にどうすれば育つかです。

**村田** やや一般的なコメントになるかも知れませんが、現在はある意味で、グローバルな規模で所得の再分配が行われているわけで、そのこと自体は先進国としてはある程度やむをえないこととして受け止めるをえない。その配分が産油国に片寄っている状況をどう是正できるかというのが一つの課題ですね。

この再配分があまりに性急に行われると、インフレや雇用問題が起こるから困る、というのであれば、なだらかにする方法を、産・消費でも何でもやってどんどんすすめてもらう。しかし、再配分自体については、これは必然的なこととして受け止める。

そこで、南北問題のほうも、生活補助金や社会保障的な再配分ではなくて、もう少し前向きな再分配システムをどう作れるかというのがこれからの課題じゃないでしょうか。

**笠井** お二人のおっしゃる「民主化」というのは必要だと思います。しかし、一つだけ申し上げたいことは、先ほどの話に戻りますが、民主化といい近代化といい、西欧諸国の理解とは違う形の理解が、イスラムにはあるという気がしてならない。近代化、民主化の構造が基本的に違うのではないか。もう一つ言えば、聖と俗をトータル・サムで考える国が近代化をどう考えているのか。

**村田** イスラムのほうがかもつと短絡的な

んだと思います。根源がみな平等だから民主主義というのもパツと平等になる。

一つの例は、マジリスというような伝統的な制度がありますね。部族の中で、どんな人でも、部族の親玉に陳情できるという、きわめて原始的な民主主義……。

**笠井** 相談受ける人が、イスラムの正統の理解者であるということの基本において相談している。

**村田** そうそう。それを前提にして富を分配するのが当然の義務であるという考えを支配者が持っていれば、仮に王様と民衆であつても、そこには民主主義があると考ええる。

もう一つは、たとえばイランというのは莊園、寺領というのが大変多い国ですね。シャヤがやろうとした白色革命の一つは、その土地を聖職者から取り上げようという政策だった。西欧的な考えていえば民主主義なんです。ところがそれが反発を生んで革命になったということは、やはり西欧的な発想で民主主義を考えると裏目に出るということが、イラン革命で証明されたわけですね。

**笠井** 私が言いたかったことも実はその点で、さらに言えば、カーター政権の中東政策は大失敗だったと私は思っているのですが、植民地経験のあるヨーロッパなどに比べて、アメリカはアラブ産油国の近代化が一番わからなかった。そしてレーガンやヘイグの政策を見ているとその轍を踏みかねないという危惧を現在持っている。

逆にいうと、植民地を持って悪いことをしたヨーロッパのほうで、理解力もあり、悪智恵も持っている。そういうディメンジョンの異なる国同士がこれからどういう形で協力し、拮抗していくのか。

途上国に対する見方が少しおかしいのではないか、という認識が生まれた。もう一つは、中東と人の往来も盛んになり、中東研究も進んでくると、西欧流の色のついたためがねでなく、日本独自の白いめがねで見えるようになった。そうすると、なるほど過去の日本のパーセプションには間違っていた点があるということがわかってきた。たとえば、中東紛争についていうとパレスチナ人をめぐる根源的な問題がある。それを直視しないで石油欲しさにリップサービスをやっていたのは間違いだということがわかってきた。同時に、そういった国々がかつての日本同様、近代化に対しても意欲に燃えているということがわかってきた。経過からいえばそういうことでしょうね。

## 日本独自の白いめがね

**笠井** 私は、アメリカと違う日本の中東政策というのが、大平さんの時代の一つあつたと思つています。それまでは殆んどいつていくくらい、アメリカの後を追つてきた日本の外交が、村田さんたちがおやりになった中東政策において、初めてアメリカと違うことを打ち出している。それは日本の外交において非常にユニークなことです。その辺の事情からまづ伺いたい……。

**村田** 私は別に中東政策を特別にやったという人間でもありません。部分的に携わったことはありますが、そういうことを前提にお話しますと、やはり日本という国自体が、世界の大きい歴史の流れを感得して適応して行ったということではないかと思つています。

そもそもその転換の始まりは、恥ずかしいことですが、やはり石油が来なくなつたら大変だという危機感。その結果、二つの認識が生まれた。一つは、従来日本が金科玉条と思つてきたアメリカなりヨーロッパのものの考え方、あるいは開発

いたものが政治的イッシューに変わってくる。大国になれば、同じ政策ではいかなくなつてきている。むしろそれが新しい政治的イッシューに変わったと認識することのほうが大切で、七三年から八五年というスパンを考えると、その種の問題がどんどん出たし、これからも出てくる。その意味で、日本独自の中東政策が外交政策の形成過程で出てきたということ、苦しさもあつたと思いますが、高く評価されていいと思う。

**富館** ちよつと書生っぽい質問かもしれませんが、これから石油問題も軍事・防衛問題との絡みが大きくなる。その場合、



たとえば日本は武器輸出もできないし、海外派兵もできない。たとえばホルムズ海峡の国際共同管理とか何とかいっても何もできない。とすれば、どういう分野で日本としてはイニシアチブを發揮し、交渉力を持てるのか。経済協力だ、いつでも何となく迫力ありません（笑い）し、その辺をどう考えておられますか。

笠井 基本的な問題ですね。

村田 先ほど回教の話が出ましたね。私は回教の専門家じゃありませんが、われわれとの考え方の大きな違いは、回教には権利思想というのはほとんどない。義務思想というのがあるんですね。神に対する義務とか、金持ちが貧乏人に恵むのは当然であるというような発想。

文化の根が違うわけですから、われわれ何も百八十度発想転換する必要はないわけですが、六十度か九十度、変えないと中東とはつき合えない。六十度くらい転換するとすれば、義務をかなり発想の体系にとり入れたような考え方になる。それを国際政治の現実はどう当てはめていくかということだと思います。

笠井 富舘さんの報告にもありましたが、OPECはすでに長期戦略を立てている。先進国はそれにどう対応するかということ、すでに南北サミットというのが政治日程にのぼっていますが、これに日本としてどう対応するか。

もう一つは、中東紛争の問題で、中東政策の政策形成においてPLOについて何もいっていないというのはどういう意

味か。

村田 長期戦略という場合、二つ問題があつて、一つは価格の問題、ある種のインデクセーションですね。先進国がインフレになったら自分たちの値段を上げるのは当然だ、という発想。これはある程度改めてもらわなければいけませんね。もう一つの、非産油途上国への援助についても、OPECの発想が今なお恵んでやるという感じを脱していない。

中東紛争については、やはりパレスチナ問題が核であるということは日本も認識しているわけですが……。

笠井 キャンプ・デービッド合意はパレスチナ問題をネグったから大変な問題を起こした。それがまたアラブ産油国を分裂させる要因になった。

村田 いや、いまの日本政府の考え方を申し上げると、キャンプ・デービッド方式はこの紛争を解決するための一つのアプローチである。メリットももちろんある。しかしこれだけでは不十分なアプローチであることも明らかで、今後の課題の一番大きいものは、パレスチナ問題を自治交渉の枠を超えて解決することである——という認識です。

笠井 PLOとパレスチナの分離的な考え方を持っているのは私は村田さんだと思ふ。それはアメリカと違う中東政策を形成する上で重要なポイントになっている。その考えを……。

村田 パレスチナ人というのは四百万人近くいて、この人たちは自分たちの故郷

テヘランのアメリカ大使館前でデモ・スローガンを下げる少女 ©WWP



がいま軍事占領されているか、その故郷から去ることを余儀なくされたということですから、この人たちに対しては深い理解を持つ。現実には可能な国際政治の枠内において、その人たちの願望を満たすべきでしょう。

それは、そのパレスチナ人の願望をどう実現するかという際に、PLOという団体をどう考えるか。PLOはその政治路線がまだ真に世界すべての国が受け入れるところとなっていないこと、内部にいろいろな派閥があること、その派閥がアラブのいろいろな国と政治的に結びついているというようなことから、私どもとしてはパレスチナ人民を支持することとイコールPLOを支持することという立場はとっておりません。

しかし、アメリカのように、PLOは相手にできないということであれば、しからは、どのようにパレスチナ人を相手にできるかと質問したくなるわけですね。笠井 でしょうね。だからキャンプ・デービッド方式の最大の欠陥はパレスチナ問題だと私は思っているのです。

しかし、初めてPLOとパレスチナ人を分けた外交政策を作ったのは、全方位外交みたいな遅れたことを言っていた日本だということは、やはり村田さんたちのご努力だろうと思う。

富舘 そういう、白いめがねで見た日本の意見というものを、南北サミットで明確に打ち出すことを期待したいですね。——きょうはどうもありがとうございました。

# エネルギー家庭学

## —生活様式とエネルギー消費—

日本エネルギー経済研究所

日本の平均的な家庭が使用する電力、ガス、灯油などの家庭用エネルギーの消費量は、欧米先進諸国にくらべると非常に小さい。事実アメリカは日本の四・一倍、スウェーデンは二・七倍、西ドイツは二・六倍、フランスは二・五倍、イギリスは二・二倍と現在の日本よりも数倍も多くのエネルギーを消費している。したがって、わが国の経済が成長し、国民の生活水準が向上すれば必然的に家庭用エネルギー消費も増え続け、GNPの水準と同様に十年後、二十年後には欧米先進国にキヤッチアップするはずであると広く信じられている。

しかし最近二年ばかり、家庭用のエネルギー消費について日本を含めて諸外国の詳しい実態調査を進めるなかで、一般に言われている通説に対して私は強い疑問を持つようになった。

以下では、欧米先進諸国と比較しながら、日本人の生活様式と家庭におけるエネルギー消費の現状について、日頃感じていることを述べてみよう。

### セントラル・ヒーティングは普及しない

日本と欧米諸国の家庭用エネルギー消費に大きな差があるのは、暖房用エネルギーの水準が決定的に違うからである。欧米諸国にくらべ、地理的に日本の緯度が低いこともあり、北海道や東北を除くと、冬の寒さはヨーロッパやアメリカ東部よりも厳しくない。加えて、日本では

古来からコタツというユニークな暖房方式が広く普及しており、アメリカに次ぐ世界第二の経済大国になった現在でも、電気コタツの世帯普及率は約七〇%と高い。冬場は、灯油の小型ストーブかFF式ストーブで居間を暖め、部屋の真ん中に置いた電気コタツに足を突っ込んで、家族そろってテレビを見たりしながら一家団らんの時を過ごすというのが、よく見られる光景である。また寝る時は、寒い部屋で綿入りの厚い蒲団にもぐり込み、それでも寒い時は電気アンカや電気毛布などがよく使われている。

それに対して、欧米先進諸国では、いわゆるセントラル・ヒーティング方式が広く普及している。人がいる部屋もいない部屋も、一晩中暖房するわけである。したがって、寝るときも毛布一枚ぐらいでもあまり寒くはない。ちなみに、セントラル・ヒーティングの普及率をみると、スウェーデンが九八%、アメリカが七七%、西ドイツ六六%、フランス六三%、イギリス五四%であるのに対して、日本の場合はわずかに四%弱にすぎない。

このように日本でセントラル・ヒーティングの普及率が低いのは、光熱費が非常に高くつくという経済的な要因が強く作用しているの言うまでもないが、同時に、暖房に対するニーズが欧米諸国にくらべてあまり大きくないのではないかと思う。すなわち、寒さがそれ程厳しくないということ、高いお金を払っても快適な暖房水準を是非とも確保したいと

考える人が、相対的に少ないということだと思ふ。さらに言えば、コタツと蒲団という極めて日本的で、かつ省エネルギー的な生活様式が失われる前に、石油ショックという嵐がきたため、日本ではセントラル・ヒーティングの快適さを知らないでも済んだとも言える。事実アメリカやイギリスでは、国産の天然ガス価格が非常に安かったため、過去二〇一三〇年の間に、天然ガスによるセントラル・ヒーティングが急激に拡大してきた経緯がある。日本でも、石油の価格がどんどん下がり、供給も十分であったなら、灯油のセントラル・ヒーティングはもっと広く普及したに違いない。これからも石油の価格は高くなりそうだし、量の確保も容易ではないことから、日本では欧米諸国のようにセントラル・ヒーティングが広く普及しないのではないかと私は思っている。

したがって、灯油ストーブと電気コタツによる二部屋暖房方式が今後とも主流を占めるとすれば、日本の暖房用エネルギー需要はそれ程大きく増える余地はないと言えらるだろう。

### 風呂はシャワーより効率的

次に、お湯の使い方について考えてみよう。日本人の風呂好きは、世界的にも有名である。洋式のバス・タブとは違って、浴槽の中で暖まり、外で体を洗い、家族の者が同じお湯に順次入浴するとい

うのは、きわめて日本的であると同時に省エネルギー的な方式だと思ふ。もつとも近頃では、シャワーを使う人が増えているのは事実だが、欧米のようにシャワーが主体で、バス・タブでの入浴がせいぜい一週間に一回程度というような習慣とは非常に違っている。

日本の場合、気候的に高温多湿だといふことで、お風呂に対する必要度が高いが、湿度が低く夏でもクーラーがいらないヨーロッパ諸国では、軽くシャワーを浴びるだけで十分なのだろう。日本国内でも、最近われわれが行った調査によると、夏涼しい北海道では風呂の普及率が低く、また入浴する回数も他地域にくらべて著しく少ない。一方、アメリカはヨーロッパ諸国と違って、シャワーが中心だがお湯の使用量が非常に大きい。ある調査によると、平均的なアメリカ人は一日平均一・五回シャワーを使い、一回当り一五〇リットルの湯を消費する。とくにアメリカ人の使うシャワーの噴出速度が速く、省エネルギーのために、もつと遅くすべきだとの勧告が出されているほどである。日本の四大家族が一回の入浴で使用するお湯の量が約二四〇リットルであるので、一人当り六〇リットルになる。アメリカ人がいかに大量のお湯を使っているか分るだろう。

## 冷蔵庫・テレビも省エネルギー型

また家庭で使う電気器具についても、

日本と欧米諸国では大きな違いがみられる。家庭用電力消費の大きなシェアを占めている冷蔵庫や冷蔵庫を例にとると、日本では最近大型化が進んでいるが、それでもせいぜい二・三〇〜二七〇リットル級のトップフリーザー型冷凍冷蔵庫が一般的である。それに対して、アメリカでは冷凍庫だけでも一五〇リットルで冷蔵庫も三〇〇〜四〇〇リットルという大型のものが広く普及している。日本の場合、住宅があまり広くないことや、食料を買いためする習慣がそれほど一般的でないことなどから、アメリカ型の超大型冷凍冷蔵庫の普及が急速に進むことはないだろう。

冷蔵庫に次いで電力消費量の大きいテレビについてみると、日本人は世界で最もテレビ好きの国民と言つてよいだろう。最近われわれが行った調査によると、一世帯当たりのテレビ保有台数は一・八台で、実に八〇%もの世帯が二台以上のテレビを持っている。しかも、各家庭の一日当たりの使用時間は平日で八・四時間、土曜日で八・五時間、日曜日には九・一時間にもなる。テレビ国家の先輩であるアメリカでも、ニールセン調べによるとテレビの一日当たり平均使用時間は六・二時間であるので、日本人の方がアメリカ人よりはるかにテレビ好きだと言える。一方ヨーロッパ諸国では、テレビ使用時間についての資料がないので詳しくは分らないが、日本にくらべて放送チャンネルの数が極端に少ないこと、また放映時

間も早朝から深夜までぶっ続けて放映している国など皆無であることから、使用時間は非常に短いと思う。しかし、日本のテレビの電力消費効率は、最近では著しく改善されてきているので、電力消費量で見ると、アメリカやイギリスより逆に小さくなっている。

## 省資源型生活様式を

以上概観してきたように、日本の家庭におけるエネルギーの使い方は、欧米諸国とくらべると非常に異なっている。家庭のエネルギー消費の水準は、各国の気候条件、住宅条件、生活様式や文化の違い、さらには資源の賦存状況など種々の要因によって決まってくると思う。幸いにして日本の場合には、これまで述べてきたように、欧米諸国にくらべて省エネルギー的な生活様式になっており、最近の省エネ意識の定着とも相まって、今後ともこのような傾向はあまり変わらないのではないかと思つている。したがって、十年後、二十年後には日本の家庭用のエネルギー消費量は、アメリカやヨーロッパ諸国の水準に追いつくとはあまり考えられないし、また、そのような方向をめざすべきでもないと思つている。日本に適したライフ・スタイルや生活様式を追求するなかで、将来のエネルギー問題を考えみることも重要ではないだろうか。

# ローカル・エネルギー

## —エネルギー「地方の時代」の模索—

### 政策科学研究所

#### ローカル・エネルギーへの関心

最近「ローカル・エネルギー」に対する関心が強い。われわれの身近に存在し、従来の大規模エネルギー供給システムには必ずしも乗りにくかった地域のエネルギー資源を発掘しそれを有効利用することは、石油制約が日々に強まりゆく今日、ぜひとも必要なことである。

地域社会の実情に即した太陽・風力などの小規模・分散型のエネルギー供給システム、つまり「ローカル・エネルギー・システム」を確立することは、日本のエネルギー供給体制のパイプを太くするという意味合いからも、また、個々の地域経済再編成の核づくりを促進するという意味合いからも、大いに注目されるところである。

#### 多様なエネルギー源の開発

ところで、ローカル・エネルギー・システムの対象となるエネルギー源には次のようなものが考えられる。

①太陽、地熱、中小水力、風力、バイオマス、海洋エネルギー等のいわゆる自然エネルギー

②ごみ焼却場や発電所、各種の工場等から出る廃熱の利用、あるいは各種の産業廃棄物・家畜廃棄物等から出る廃熱・

廃棄物エネルギーの利用

③上記のいわば「単体のエネルギー」のいくつかの組合せまたは複合化によるシステムの利用

現在すでに各地で、これらエネルギー源をそれぞれのエネルギー特性、地域特性に応じて活用している例は、数多くみられる。たとえば、自然エネルギーのなかでは賦存量が比較的大きく、かつ全国的に分布する太陽熱を冷・暖房、給湯などに利用している例としては次のものがある。

〈農業への適用〉——宮城県(園芸試験場)、神奈川県(同・平塚)、埼玉県(製茶試験場)、鳥取県(日南市プロイラー団地)、香川県(キノコ栽培、長野県(工業試験場・木材乾燥)、長崎県(農林試験場)

〈工業・工場への適用〉——埼玉県(製紙試験場・製紙ボイラー)、奈良県(天理市・工場内)

〈公共施設への導入〉——北海道(帯広市、増毛市)、岩手県(遠野市、福島県(霊山町)、茨城県(太田市)、長野県(上田市)、愛知県(大府市)、兵庫県(神戸市)、鳥取県(米子市)など

〈発電〉——香川県(仁尾町)

また地熱については、現在六カ所程度で浅部熱水系の地熱を利用した発電が行われ、一般需要家へ供給されているほか、温室の熱源などに利用している例も多い。

〈農業への適用〉——北海道(上川町、

羅臼町、室蘭市)、岩手県(雫石町・調査)、秋田県(湯沢市、鹿角市、皆瀬村、雄勝町)、山梨県(園芸試験場)、大分県(九重町)、鹿児島県(指宿、山川町)

〈施設・住宅への熱水供給〉——北海道(上川町、羅臼町、室蘭市)、秋田県(湯沢市ほか)、山形県(蔵村)、福島県(檜枝村)、宮城県(北郷村)

〈発電〉——北海道(森町)、宮城県(鳴子町・鬼首、八幡平、栗駒)、岩手県(松尾村・松川、雫石町・葛根田)、秋田県(八幡平、大沼)、大分県(九重町・大岳・八丁原)

また②のタイプのごみ焼却場や工場での廃熱を利用した発電には、現在すでに実用化段階にある例も多く、たとえばごみ焼却発電は東京の石神井・世田谷・千歳・大井・多摩川・江東・板橋・葛飾・足立などを始め、川崎市、横浜市、仙台市、大阪府などの大都市で、またごみ焼却廃熱多目的利用の例としては①福祉施設への熱供給(東京、千葉、横浜)、

②地域暖房(北海道)、③農業への利用(愛知県)などがみられる。

#### システムの実現可能性

ところで、以上のように「点」として存在する個々のローカル・エネルギー源を「線」としてつなぎ、一つの供給システム(面)にまで組み上げていくためには、幾つかの基礎的条件を煮詰めていく

ことが必要である。

通産省はここ数年にわたって、ローカル・エネルギー・システム研究会をつくり、その体制づくりを側面から援助を与えてきたが、一昨年十月の「中間報告」

(前節の実態紹介は「中間報告」の一部)について今年度は、ローカル・エネルギーの開発利用可能性について二十三の道府県を対象に、①エネルギー需要量調査(産業・民生・運輸等の各部門にわたり、エネルギーの需要量およびエネルギー源別の需要動向を把握する)、②エネルギー賦存量調査(県下の各地域単位に賦存するローカル・エネルギーについて、エネルギー源別に潜在賦存量・期待可能賦存量を把握する)、③開発利用可能性調査(②で把握した開発期待可能なエネルギー源のうち代表的なものを選び、利用可能性について技術面、経済面、効果面等から検討し、将来のエネルギー需要と結びつけたエネルギー供給システムの構想と対策を立案する)の三つの柱から、詳細な実態調査をすすめている。さらにこの結果を受けて、来年度には、事業化のためのフィジビリティ・スタディが予定されている。

各自治体は、それぞれの地域特性を生かしながら、ある場合には長期計画と対応させ、またある場合には新しい都市づくりの一环にローカル・エネルギー・システムを導入するなど、積極的な対応がみられる。

とはいうものの、ローカル・エネルギー

・システムの対象として考えられているエネルギー源がいずれも小規模・分散型であり、また技術面からみてもまだ実験段階にとどまっているものも多いことから、差し当たっては——各道府県の実情によって当然異なるが——各エネルギー単体の利用実現可能性を模索するにとどまるものが多い。問題は採算性で、特に事業化をはかる上で、どの程度の投資があればコストダウンがはかれるか、を明確にしたいという期待が強い。その意味で、来年度以降のフィジビリティ・スタディの成果如何が、九〇年代のローカル・エネルギー・システムの成否を握るとみられる。

## エネルギーの内部循環

岩手県の東南部、北上山地の懐に遠野市という人口三万二千人の市がある。面積六六二km<sup>2</sup>の市域をほぼ完全な分水嶺で囲まれた典型的な山間盆地に立地するこの遠野市の基本プラン「ヘトオノピア」の一つの柱は、大地と光と水と緑に調和した農・林・畜産業を基幹として、それに地域特性を生かした特産物の振興と適度の工業の導入を組み合わせた「生産加工都市」としての生き方にある。

市民センターなどと並んで、遠野市の地域づくりの拠点の一つに「農村活力センター」がある。農村活力センターは、非農家を含む地域住民のいわば「ふれ合

い」の場(宿泊研修施設)であると同様に、水と太陽を利用したクリーン・エネルギーのメッカでもある。「たかむら水光園」と呼ばれるこの農村活力センターには、総合浄水場施設のほか、小水力自家発電設備(発電能力一五〇kW)、ソーラーシステム(太陽熱利用による冷・暖房給湯設備)、浴室棟、内水面遊漁施設(発電後、水のバイパスの一つとして)、淡水魚水族館(温水利用)、浄水管理センター、宿泊研修室などが配置されており、いわば地域エネルギー総合利用のモデル的な設計が成されている。遠野市では今後、バイオマス・エネルギーの応用・実用化にも積極的に参加するといわれている。

ローカル・エネルギー・システムは、従来の遠隔地・大容量のエネルギー確保のシステムとは異なっており、地域密着型のエネルギー供給システムである。つまり、地域の需要に応じて、地域の賦存エネルギーを、地元が主体的に開発利用するという意味で、きわめてコミュニティの度合いの高いものである。小規模とはいえ、遠野市の農村活力センターにみられるような、エネルギーの地域内の内部循環が各地に広がりを見せるとき、真の意味で「地方の時代」が来たといえるのである。

対談

# 上方娛樂

かみがたのたのしみ

## 新関西論 最終回

桂 かつら  
米朝 べい ちよう  
(落語家)

小松 こまつ  
左京 さきやう  
(作家・小松左京部会)



小松左京氏

二十一世紀は二十年後、二十年前は

米朝 二十一世紀の上方芸能なんて、そんなもん分かるかいと……。ふと考えましたら、二十年先、ということ、二十年前と今日との差ぐらいでしょう。世紀が変わるさかい大層に思うんで、二十年前と今となんぼも変わってへん。二十年前という昭和三十六年。もうテレビもあつたし。枝雀(桂)が弟子入りしてきた時分ですわ。

小松 ちょうどあの頃から、本当の高度成長が始まるんだ。

米朝 昭和三十五年頃から、そのあと七八年は、近世日本でも最高にええ時代やつたと思います。まだ古いよさは残っていたし、公害はまだ顕著には現われなない。ひと足伸ばしたら自然は豊富にあつたし、うまいものはあつたし。

小松 石油が一パーレル二ドル割つてたんです。成長率は十何パーセント。

米朝 芸能の世界でも昔の名人が若干残つた。芸妓でも古いおはん芸妓がおつて、いろいろ吸収できたし。

小松 田都(橋)はんがまだ元気で、東京では志ん生さんがおつて。

米朝 東京はあの時分は花盛り。

小松 黒門町(桂文楽)がおつて。

米朝 志ん生、文楽、国歌(先代)、金馬(先代)、小文治、田鏡(先代)、田生、林家正蔵、小さんは中堅どころやつた。ずらつと並んでたわけですな。

小松 講釈は東西ともかなりだめになつてきた。先代の南陵(極堂)さんは生きてはつたけど。

米朝 東京では貞吉、松鯉、なんて古い人おりましたけれども。

小松 宝井馬琴さんはまだお元気ですな。米朝 何にしても、二十年前と今日と考

えると、まだまだ芸人おつたなと思うんですわ。それと同じことを、二十年先になつていかもわからん。

小松 僕がSF書くようになって、初めて活字になつたのが三十六年です。三十五年の正月に『SFマガジン』が創刊されて、新人募集をやつたんだ。僕の「死には平和を」は選外努力賞やつたけれども活字にはならなんだ。そのあと投稿したのが中国ネタのタイムマシンもので「易仙逃里記」。これが初めてやつたんです。米朝 「日本アパッチ族」より前？

小松 まだ前。

米朝 僕はアパッチしか読んでなかつた。おもしろかつたな、あれは。

小松 考えてみたら、あのころ歌舞伎も結構にぎやかでしたな。

米朝 関西がちょっと衰微しかけた。先代の延若、梅玉、寿三郎という大立物はおつたけれども。寿海さんがこつちにし



桂 米朝氏

まして、双寿時代といわれたときやと思う。何にしても過渡期は過渡期でした。延若・梅玉時代は東京に張り合うてたんやけど。

二十年前は、娯楽の代表的なものは映画でした。それが四十年代に入って、毎年何百軒とつぶれていく時代があつて。

小松 テレビのせいかいな。

米朝 テレビが上昇期で、オリンピックでカラーテレビが普及した。

## 大阪のほうが早い資本主義

小松 戦後すつとやってみて、上方の芸能界と東京の芸能界、だいぶ雰囲気がありましたか。

米朝 まだ東京は、昔の型というかしきなりというか……寄席がガッチリ残っていました。

小松 いまでも向こうは、席亭がかなり力を持っていますな。

米朝 けど寄席そのものが減ったでしょう。

小松 人形町の末広ががたんだのがいっすか。

米朝 三年ほど前です。こっちでも、梅田花月は、地下の小さいほうでやっていた。あそこでは、まだ芸がやれたんです。ただっ広くなってから、昔風の芸がだめになつてきた。

小松 大阪は席亭制度が早うになくなつたのは、どういうことですか。

米朝 こっちのほうがある意味で進んで

いたんですな。つまり資本主義社会に早うなった。席亭が全部共同して組合をつくって、芸人のあるグループと契約してしまう、一番売れっ子と。明治三十年頃にそういうことをやり出した。そうすると芸人は、三遊派とか桂派とか派をこしらえて席亭連合と話をしようになった。

小松 大阪のほうは、芸人の一人一人が最初自分だけの芸で打って、一人でやるのはしんどいから、それにいろんな色物をかましたり、手品や踊りをかましたりという形でしたな。

米朝 小人数で始めたんです、初めは。明治の三十年頃に大一座になった。日露戦争の頃、だいぶ消費が伸びてぜいたくになつてきた。そうすると寄席は、映画が始まるまでは一番の大衆娯楽やさかいに、どんどん木戸銭が高うなつて、その時分東京と比較したら、大阪のほうが倍ぐらい高い、一流の小屋は、棧敷へ座つたりしたら、芝居行くぐらいかかったらうんです。エエツというぐらいの値段です。明治の末の紅梅亭なんて、正月なんかちよつといい顔ぶれにすると、棧敷一円。

小松 いまは席亭が、たとえば興行会社に買いにくるんですか。

米朝 東京の場合は、初めから協会と席亭との間で、百年も前からの習慣にのつとつてやっているから何とかやれるんです。芸人は寄席へ出たつてたいした収入にはなりません。

小松 いまもかなりな中堅どころでも、寄席でもらうギヤラは、聞いたらえらい

安いもんですな。米朝 何軒も回わるさかいそこそこの収入になつたんで、一軒だけやつたら、とても食うていかれへん。

席亭は、ある程度道楽気があつて、好きて続けてくれるんでないとできません。新しい席は、絶対ええ場所やないと客はこない、いまの新宿末広亭のような息子の代になつてやめるといったら、それでしまいですわ。

## 芸人が客を育てる努力を

米朝 ところで、いま漫才ブームですけども、特定の個人の芸人が、あんな芸を無制限に続けていけるかしらと思う。

小松 この間やす・きよ（横山やすし・西川きよし）ちゃんに聞いたんやけど。落語は新作がだんだん古典になつていく、歌舞伎も名狂言が残っている。漫才は古典ものというの残らんものか。たとえば昔やつたら、十郎・雁玉さんの「冬はスキーに限る」とか、いと・こい（いと・こいし）さんの「姿三四郎」を出せ

という客があつたんやけどもいいうたら、いまはとにかく、どんどん新しくスピードをあげていかんことには、漫才ちうものは、いつも「とれとれ」でないとあかんそうです。

米朝 たえば芝居でも歌舞伎でも、人形浄瑠璃でも、いくつか傑作が出てくる。そうすると今度は、演出。鬼面人を驚かすような仕掛けとか、ケレンというもの

で驚かす。その次舞台機構をいじる。今度は芸を見せる、という段階になっていきまっしやろ。漫才の場合でも、やりとりにも何ともいえない味があつて、それがええ。そういう人いま減つたけれども、今次・今若とか花蝶・勝美とかいう人たち、みんな軽い呼吸で。

小松 東京やつたら、昔のリーガル千太・万吉さんは、いま、レコードできいても何ともいせん。しやれたもんですな。

米朝 それになるんです。ところが、そうなるためにはお客が要るんや。喜ぶお客があつて初めて存在するんで、いまの漫才を喜んでるお客ではああいふ芸は出てきませんわ。だから十年先、二十年先を考えるとときには、お客を育てる努力を芸人がせないかんと思うんです。芝居の場合や浄瑠璃の場合は見巧者・聞巧者があつて、それが教育するんで、通人が小松 確かに見巧者・聞巧者もいいてすが、それがあまり昔をいうて新人の芸に文句をつけすぎると……。

米朝 さあ、それをあんまりやると、芸が死にます。

小松 歌舞伎でも落語でも、昔の狂言や話をいま生きてる芸人さんの体を通じて再現されて、それを見て、話がおもしろい、あの噺家はおもしろいというふうになる。そのときに、何じゃ、あんな芸は、先代はそんなもんじゃないといわれたつて、いまの若い人に死んだ名人の話聞けるわけないんで……。

米朝 それは非常に警戒せないかんことなんやけど、いまはそれがなさすぎる。

もう少しそうなつてくれると話芸を磨くようになる。ネタの内容のおかしさ、斬新さばかりでなしに、しやべる技術を大事に考えてくれるんやないかと思うんで。落語なんか、あまりそれをいうとあかんけれども。

それともう一つ、文楽が大変流行つて。この間東京へ行つたら、国立劇場で近松特集いうて、一つの演し物を三つに、二時間づつ切り売りしてる。一回目が「新口」、つまり梅忠(冥途の飛脚)・梅川と忠兵衛、真ん中が「曾根崎心中」、ラストが紙治(「心中天の網島」紙屋治兵衛)。バラ売りすると大変なんです、超満員で。通してやつたら客けえへん。国立劇場としたら変則興行なんやけれども、このほうがええちうことになると困つたないうて。

小松 それでもやりようがおまつしやろ。確かにお客が食いつき易いように、いまの生活のニーズやテンポに合わすべきですね。

## ジャワの影絵を大阪で

小松 人形浄瑠璃というのは不思議なもので、もともとは、祭文がたりに傀儡師が手人形をつけてたのが、だんだん大仕掛けになってきて、大阪の南へ竹田座のからくり芝居を連れてきて。これはいまでも、特撮人形アニメみたいなんなんです。

米朝 三人使いやないでしょう。

小松 一人使ひ。突っ込みというやつです。それより多いのは手妻人形。片手で一つ、両手で二つ使うギニョール式ですね。そのほかにあやつり、つまりマリオンネットからくり。これが面白いのはゼンマイや水銀とか砂を使った自動人形で、いま残っているお茶汲み人形どころやない。ものすごい複雑なもんです。たとえは酒呑童子の首が火を吐いて飛んだり。

米朝 「用明天皇職人鑑」見ても、ケレンばかり。

小松 そういふのがいっぱい出てきた。米朝 近松の作品は、人形が入りする時間を計算せずに書かれてあるので、使いくうてしようがない。これは文雀君から聞いたんです。

小松 あの頃の人形芸見ますと、からくりは舞台上に置いてあるんです。それとつかえ引つかえ出してきよる。

米朝 そういふのでみな喜ばしたんやな。小松 いってみたら、京都から近松が出てきて、女子供や庶民がよろこんどつた見世物じみた人形芝居を大芸術にしよるわけや。

米朝 そうすると、浄瑠璃の太夫のほうに重点が移つてしもうて、人形使ひが軽視されるようになったんです。

この秋に文楽で「五天竺」を復活しよう。「五天竺」というのは孫悟空。大正の初期からやられていないんです。

小松 できたのはむろん江戸でしやろ。米朝 江戸です。明治時代はようやられていたんです。「水廉洞の段」とか。これは大ケレンの芝居なんです。



小松 伊藤何とかの掾というのがやった水芸なんです、水の中から手妻人形を二つ出しまして、これに布ざらしをやらせる。手妻人形の指先に布が二つづつ付いとる。これを振っているうちに乾いてしまうというんです。どういうことや分からへん。そういうケレンでんねん。昔のドンカチ屋みたいな仕掛けがいっぱいあったでしょう、お化屋敷の、上から首が落ちてくるとか。そういう子供、だましてみたいなやつを、大芸術にしたところがおもしろい。

米朝 大ケレンを軽蔑するようになってきたんです。そこへ、浄瑠璃が大旦那芸になってしまったんで、いやがうえにも芸談ばかり尊重されるようになってきて、大衆から遊離したんですな。

小松 むしろ歌舞伎のほうが続り、からくりが残ってるでしょう、強盗返とか。

並木正三が歌舞伎に回わり舞台と大ぜりを入れたんですが、その前に、人形芝居のほうに小さい仕掛けがあったんですね。米朝 舞台機構でも、二重回わし、蛇の目、屋台くずし、回わりぜりとか、大変な仕掛けや。

小松 国立劇場で一度、舞台機構だけカラで見せてくれた。ごっつい大きな回わり舞台。回わりぜりです。せりが二段や。蛇の目はないね。何しろ十七、八世紀の頃、日本の舞台機構は世界一なんです。

東南アジア回わってみたら、人形芝居は、華僑系の操りなんかあるんです。かわいかわい三蔵法師に馬つけて、「西

遊記」なんかやっている。ところが、もうやる人間がない。「香港芸術中心」というのがあって、若いやつに教えているんです。「日本、なんとかしてくれへんか」といわれてるんですがね。ジャワの影絵もどんどんへたばってきます。インドにもおまんねん。ああいうものを、少し日本でめんどう見てやったらええと思う。それは大阪がよろしい。侍と町人と、大衆のものの子供のものと分けへん。おもしろかったらみな行きよる。

米朝 大阪で育てたら、東京でいけるんです。ところが東京でやったら、よそで通じるかどうか分からん。東京は寛容なところやから、受け入れてくれるけれども、こっちは受け入れよらへん。

### 大衆芸能のほうが前衛的

小松 一つは、元禄の頃大阪はものすごい経済発展するんです。ほかに娯楽がないから、文楽みたいなものに旦那衆も金かけるし、お客もつきかける。そのときに宇治加賀掾が出る。この人が、自分の弟子だった竹本義太夫と遺恨興行をやるんですね。もともとこの人は謡曲を習おうと思つたら、秘伝、秘伝でうるそうてかなわん。おかしいやないかというので、浄瑠璃のほうへ入ってきた。ところが京都に行っている間に、浄瑠璃節や祭文の

ああいう野卑なものではないかというて、謡の高尚に近づけようとする。同じように、人形使いも能に近づけようとするん

です。近松はそのころ京都におつて、一緒に正親町家なんかに入入りして仲がよかつた。

ところが竹本義太夫は、加賀掾の弟子やつたんですが、大阪の天王寺村の百姓のせがれやから、大衆性がないと、高尚ばかりじゃいかんというので、別れます。

修行のうちに大阪の南で旗上げ興行やつて、近松に頼んで「世継曾我」をもらつて、これが評判になる。これは前に加賀掾のために書いたやつなんです。そうすると加賀掾が、俺に盾突いてけしからん、大阪乗り込んでやつたるいうて、そのときに当時「好色一代男」と「大矢数俳諧」で有名やつた西鶴に本を頼みよつた。そこで西鶴が「曆」を書く。竹本義太夫大恐慌で近松に頼む。近松は旧作に手を入れて「賢女手習並びに新曆」をつくつて義太夫にわたすんですがこつちのほうは勝つてですね。西鶴のはハイカラで新機軸がいっぱい入っているらしいけど、一般の人にはあまりケレンすぎて分からへん。

米朝 オランダ西鶴なんかいわれて。小松 近松はそのあとで「出世景清」を竹本義太夫のために書くわけです。

そうしてみると、近松は芸術性と大衆性をにらんでうまくバランスをとる老練さがあるんですね。近松の「虚美皮膜論」というのは、それかもしれないという気がする。

米朝 一つの、何の芸でも、そのかね合いがむずかしいので……。

小松 大衆受けするのと、受けながら芸術性をどう生かすかというのはむずかしいですね。

米朝 それを、お客というのはえらいもので、見てますわ。受けることばかりやっていると、一時受けても離れていきよる。ちよつと長い目で見たときに、観客の採点は割と正鵠を射てまっせ。

小松 僕なんかも文学青年で、同人雑誌やっていた頃は、文学は何でなきやいかんいうとつたんです。ところが、大阪の町へきて、花月で漫才見たり、南へ行つてストリップ見たりしているうちに、こちらのほうがすごい内容を実にばかばかしくやっている。むしろ大衆芸能のほうが前衛的じゃないかと思うて、「読んでおもしろい小説」に首突つ込み始めたんです。

## 宝塚は二十一世紀も大丈夫

米朝 文楽でも、落語でも、若い客には若い太夫や唄家がやっていたほうが受けるんです。僕がやったら気になる用語一つでも、やるほうが無神経にやれば、聞くほうも抵抗なしに聞くさかい(笑)、現代語が入っても、芸として通じるんです。

文楽は古い人がやろうが、若い人がやろうが一字一句違わへん。にもかかわらず若い太夫が語っていると分かる。年寄りの名人がやると若い客には分からん。それはおもしろいもんで、どっか違うんです。小松 歌舞伎も、大名人には何ともいえない味があつて、特に立役の重い役なんか、

いざ腹芸で見せるときは年の貫禄が要りますけれども、しかし、二枚目の派手なところはやつぱり華やかな若い人にやつてもろうたらよろしいな。

米朝 若い人で客集めて、その間に年寄りの芸をはさんだら、分かってくれるんです。

小松 対比が鮮やかになっていい。こっち側でいじめられてキヤーいうてるのもお、じんで、いじめているほうもお、じんとするのは……(笑)。

米朝 歌舞伎若衆とお姫さんが、平均年齢六十五歳というのは具合悪いんだ。そういうもんじゃないんやから。もつともつと色っぽいもんじゃないんやから。

小松 関西で育つたもので、もう一つおもしろいのは、宝塚ですな。逆に、若さばかりでどんどん交代させた。田辺のお聖さん(田辺聖子)が、自分の「新源氏」やつてもらうて、源氏がものすごいきれいいうて、キヤーキヤーいうてた。

けど、宝塚も不思議なものになりました。立派なもんでっせ、女ばかりで。米朝 あれは不死鳥やな。適当にスターが現われて、また蘇るさかいに。やつぱり、一つの夢の国みたいな、フェアリー・ランドのようなものにしたのが成功で、OSKもSKDも、都会の真ん中にあるのはいかな。

小松 いくら、「清く・正しく・美しく」いうても、出たところに連れ込みがあつたんでは……(笑)。

米朝 大人の芝居を見ると、女ばかりの芝居はだんだん頼りのうなつてくるわけなんです。宝塚は別世界で、駅を降りたときなにか雰囲気変わるといふのが……。

小松 「乙女餅」なんかいうのがあつて。米朝 宝塚は、二十一世紀でも残るかもしれませぬ。

小松 残りまっしやる。舞台機構が、エレクトロニクス使つたりするさかい。

米朝 戦時中でも、何やかやいうても、慰問挺身隊いうて残つとつたし。

## パロディが分からない客

米朝 私はボルノ映画は見えてないんですが、あのなから新しいものが必ず出てくるんやろなと思つてたけれども……。

映画はどうなりますか、テレビ時代に。小松 またこの頃、白黒スタンダードがフランスで流行つてます。向こうで受けるのは小津安二郎、溝口健二の作品。正月に「パリの屋根の下」をテレビでやつた。これは無声映画がパート・トーキーになつたところなんです。男と女がくつ

いて、離れて、またくつくとくつというあほらしいストーリーやけど、絵で見せてもらうのね。子供達が、あんなしんどい映画じつと見てる。不思議なものやな。

米朝 映画館がどんどんつぶれて、寄席もだめになつてきたときに、独演会とか落語会という形でやればお客がくる。一般の寄席はこない。映画も、名画鑑賞会

は客がきた。一品料理にすればお客がくるんやないかと思ひ出して。浪花節の小



屋で浪曲やっただってお客見えへんに、瓢箪衛門さんを聞けいうたらくる。能書つけなんだからこんようになつてきた。

小松 それと、寄席で噺家さんの踊りがあまり見られんようになつたですな。

米朝 一つは客席が大きくなつてしもうたからです。それとお客が昔ほど喜ばん。洒落の踊り、つまりパロディやから、本行を知っているとおかしいんです。もとを知らん客の前で、何ぼ粋な振りを入れだつて分らんわけて。

小松 漫才の松葉家奴さんの釣りの踊りなんて、おかしいけれども、歌舞伎の舞台が目に見えような……。

米朝 あれは絶品でした。お月さん拌んで、十字切りまんねんから(笑い)。

小松 小便して足にかかつて、それを手ぬぐいで拭いて、ついでに顔も拭きよる(笑い)。不思議なギャグやつたな。

それともう一つ。コメディアンちうのは、どうなつてまんねやろ。いまは寛ちゃん(藤山寛美)が、一人で万丈の気を吐いてますけれども。東京はエノケン一座、ロッパ一座、エンタツ・アチャコが芝居やつた時代、北野劇場でエノケンがきた、ロッパがきたいうたら、親父がそわそわするんだ。おふくろはいかないうけども、親父としめし合わせて、外で落ち合つて見に行つたこと覚えてます。

米朝 ええお父さんやな。

小松 花登筐さんのつくつてた「笑いの王国」かいな。もちろん戦前の「笑いの王国」は別でしょうけれども。昆(大村

昆)ちゃん、雁(音屋雁之助・小雁)ちゃんの兄弟、茶川(二郎)、佐々(佐々一郎)やん。それぞれ、いま味のある役者になつてますが、また一緒になつて大芝居やらんかな。

### 学割もあつた幕見

小松 吉本コメディは、結婚してすぐの頃よう見に行きました。女房の嫁入り道具のラジオを質に流してもうて、女房がボソつとしてるさかい、しょうがないから「日本アパッチ族」を毎日ペラに十五枚づつ書きちや読ましてたんだ。

米朝 それが娯楽……。

小松 それでうちの女房が、私の書いたもの一番先に読む癖がついてまいよつて、ラブレターも書かれへん(笑い)。

その頃、映画もロードショーは高いんです。しかし梅田花月は中入りのあと行つたら、ものすごく安いんだ。値段の割にあんなにたつぷり笑えるものないと思つて。

米朝 入場料どれくらいやつたかな。寄席はいつの場合も、封切館よりは安いです。

小松 頭から見て、一人三四〇円ぐらい。中入りのあとで一七〇円ぐらい。

米朝 半額になるんです。昔は「オチ」いうて、中入りのトップが上がつたら木戸閉めるんです。中入り後は、小屋の収入にならんです。表方や裏方の従業員が分けよるねん。そういう習慣がずっと

あつて、だからトリに人気のある人が出たら、みんな喜んだんだ。お茶子とか下足番とかへたりの連中はそれが楽しみて。初代春団治や紋右衛門なんて人がトリやつたら、中入りから客がまたひとしきり入つた。これがなくなつたのは入場税ができてから……。

小松 一幕見は、京都の南座は昭和三十年ごろまであつたかな。大阪は早うなくなつた。

米朝 あれはええもんでしたね。長い一幕なんか、値段がちよつとずつ違つて。小松 うまいことできてたけど、学割もあつて。南座の前いうたらデモコースでんねん。デモやつとつて、ちよつとはかのやつに旗持たして一幕見行つたら、あとでバレー張り倒された(笑い)。

米朝 前の幸四郎、前の菊五郎、十五代目の羽左衛門という「勸進帳」は、立見が毎日満員やつた。東京の歌舞伎座で、戦時中やけど。

小松 あの頃あんなに安い値段で見せて……。梅田花月満杯にしても千人いかへんでしよう。

米朝 今のは大きいです。前の地下は五百人ぐらいかな。

小松 それにしても、楽屋裏行つてみて、びっくり仰天。あんな楽屋で、よう複雑な喜劇やりよつたと思つて。

米朝 もともと映画館やから楽屋あらへん。階段の踊り場や物置きを利用して、楽屋にしたんだ。ひどいもんだ。

小松 芸人というのは融通のきくもんや

と思った(笑い)。

米朝 寄席芸人ぐらい融通のきくもんない。畳一枚どころか、椅子一つあったら、そこで着替えてしまうんや。昔のお茶子なんて、立ったまま袴をたたんだ。仙台平の筋の通ったやつやないとあかんけど。紐だけは膝の上でキチツと結ぶんだ。

## 二十世紀になったら芸が変わる

小松 しかし、これから上方の芸能といふのはどないなりまっしゃろ。役者でも昭和十年頃いうたら、エンタツ・アチャコはいる、エノケン・ロッパはおる、川田義雄はおる、柳家三亀松はおる、落語家はズラズラと並んでおる。

米朝 どの世界でも、あの時分は百花繚乱です。

小松 六代目菊五郎はおる、橋屋(十五代羽左衛門)はおる。

米朝 何といたってお客がおったからです。都会のお客が都会におった。戦争の影響はそこらにあつて、疎開や何やで、あとは空襲で丸焼け。そこに入ってきたお客が完全に都会人になるのに、五十年かかる。そやさかい二十世紀に入ったら、新しい大阪人なり東京人が定着します。そうすると芸が変わってくると思う。小松 大阪でも、北野劇場かいわい。どこでも満杯やった。

米朝 それを見てたお客は、船場・島之内におったわけです。それがいまビルばかりで、住まいがあらしまへんやろ。

小松 難波なんか行つたら、子供心にどれ入ろうか思うて。

米朝 新世界は新世界で超満員やし。小松 あしべ劇場とか、不思議な芸人がいっぱいおつて。

米朝 いろんな芸がありました。寄席芸に限つていえば、持つてる芸の範囲が狭なつてもうた、ちうことですね。三味線弾いたり、笛吹いたりするやつが減つたかわりに、クラリネット吹いたり、ギター弾けるやつが増えたかいうたら、そつうでないさかい。昔はみなケレンの芸を持つていましたやろ。アコードオンでも、普通に弾くんやなしに、逆に弾いてみたり。わざわざそんなものこしらえさせて。小松 漫才でも、あの頃いうたら一郎・ワカナが出てきて、子供心に天才や思うたもん。

米朝 轟一蝶なんて人、ようあのバイオリンが音出るな思うて。初めともに弾くんです。パーンと三つに分解してしまつたや。楽器で組み立てて、次また弾いてるんや。バイオリンスト見たら、びつくりするやろな。三味線でも、弾きながら一本一本糸切つていく。最後、三の糸だけ残して弾きまくる。

小松 戦後でも、流行亭歌麿さんがちよつとやつてました。初代のラッキーセブリングが、マイク一本で、映画説明を入れて、擬音を入れて、「暗黒街の顔役」の車の撃ちあいのシーンやらいかにも「望郷」のラストシーンなんて雰囲気出して、フランス語らしきものをしゃべる。ポパイと

ブルートとオリーブのチャンバラをやつてみたり。あんな芸があつたんやな。

米朝 いま素人でそれをやるのがおりますな。テレビで、芸人なんかかわへんようなのがおる。けど、いろいろでけん。一つか二つに限つたらうまい。そこから、二十世紀は一億総芸人という時代(笑い)がくるかも分からん、お客がおらんという時代が。それは、花見酒と寝床になるんだ。

小松 あの頃の芸人さんの層の厚さと、お客の層の厚さ考えれば、まだまだ出てきまっしゃろな。

米朝 それだけ素人が芸達者になつてくると、自然に勉強せなならんようになってくるでしような。そうなつてくれりやええけど、消耗品ですぐあかれて、また次のが現われて、つぶれてという時代が、しばらく続くかも分からんです。

## ほんとうの老人福祉

小松 寄席と歌舞伎、文楽。これが入る子になつて、落語聞いてて、歌舞伎見たいなと思ひ出したときがあつた。それを見とくと、芝居噺がまたおもしろい。

米朝 うちの弟子の米二なんかは、落語聞いてて、芝居見とうなつた。

小松 それから、誰でもすぐ真似たくなつたや。名調子の場面を、たくさん出したらいいと思うんです。

米朝 酔わさなね。だんだんこつちが酔えんようになってきたのか、いまの若い



人はあれで酔っているのか。そこらよく分からんけど。

小松 講釈にもそれがいえるんだ。うちの子供が講釈聞きたいといい出した。米朝さんと枝雀さんの「くしやみ講釈」聞いて、「難波戦記」が聞きたい。

米朝 南陵はんがやりますがね。

小松 あの名調子でやらんとね、型にはまった。

米朝 修羅場は東京でまだ聞けますよ。若い連中も、この頃たたき出したから。

小松 浪花節はちよいちよやってますな。

米朝 浪花節は、戦時中にNHKの時局浪曲ばかりやって、あれで若いもんを離してしまってたんです。毒婦ものとかやってれば、若いものかてついていったんやけれども、あそこてぶち切れてしまった。小松 虎造さんのあとに相模太郎さんが出てきて、ちよつと持ち直したけれども。しかし、瓢右衛門さんというのは、米朝さんが、ええ人をまた出させましたな。

あれが本当の老人福祉なんや。

米朝 八十四やから、もう。若い客がキヤーキヤーいうて喜んでくれるぐらい、年寄りにとつてうれしいことおまへんで。小松 まだまだあれこれ榮えて欲しいものがようけあるということですか。

米朝 二十一世紀まで何とか瓢右衛門さんを生かして、百四でまだ出ているという事になったら、立派やな。

小松 清水寺の管長どころやおまへんね(笑い)。

## ビデオ時代にはますます生なま

小松 芝居噺といえは、正蔵さんの芝居は大掛かりなもんやったな。江戸の芝居噺はあんなもんでっか。

米朝 それが不思議で、道具入り芝居噺は上方から伝えてるんです。江戸では珍しかった。それから流行って、円朝なんかやったんだ。本家の上方では、明治からこつちないんです。

小松 いつやったか、正蔵はんがこつち持つてきて……。

米朝 「累ヶ淵」の「水門」をいっぺんこつち持つてきました。あれも正蔵はんが死んだらしまいです。

小松 あの人は不思議な人で、おもしろい噺を、よくあんなむずかしい顔してできるもんやと思つて感心するんやけど。米朝 いま正蔵さんが出ると、どこの会でも超満員になる。お客が、きょうは最後やないか(笑い)。

小松 正蔵さんいくつやろう。

米朝 八十四、五です。きょうも死ななんだいうてがっかりして(笑い)。舞台で倒れるところに居合わせたらしいけれども、まだ元気でやってはる。彦六いうて名前かえて。

小松 元気ですね。

米朝 武原はんさん見てみなはれ、元氣や。真向法ずつとやってるさかい(笑い)。私もやれやれとえらい勧められるんやけど……。

小松 はんさんが真向法やってるところは、色っぽいやろうな(笑い)。

「電気応用本(速記の小松流形容)」水入り、閑話休題(笑い)。

米朝 しかし、あほみたいなことが、かえておもしろがられる時代がくるかわからん。うまいことやつたら、錦影絵のほうが映画よりええとこか。

小松 僕もそう思うわ。

米朝 私ら子供の時分に、紙芝居の絵が頭のなかで動いた。

小松 元來紙芝居は、紙人形を出して、返えすとか変えるとかしたんです。

米朝 いっぺんだけ見たことある。普通の紙芝居よりよっぽどおもしろいと思った。小松 この間枝雀ちゃんをテレビで見たら、「あたま山」を引き伸ばしたのをやってたです。散財の場るときに、裏でタモリや、芸者衆が出てきて、花火やら船の散財風景をやつとつたが、それがもうひとつやつた。しかし、「テレビ噺」はやりようがおまつしやろな。

二十一世紀はビデオ・ディスク。おたくも早う入れたほうがよろしいで。そんなこというたら怒られるかいな、レコーダさえ邪道や、ちゃんと席で見てもらわんとちうて。

米朝 しかし、いまにビデオ・カセットの時代がくるな。そうなると、ますます生なまはちがうということがいえるんやけどね。小松 そこでも純生がええかほん生がええかもめるとちやいまつか(笑い)。

(似顔絵・中村伊助)

# 21世紀フォーラム・部会メンバー

## 発起人

- 内田忠夫 東京大学教養学部教授
- 加藤秀俊 学習院大学法学部教授
- 加藤芳郎 漫画家協会理事
- 茅 誠司 東京大学名誉教授  
日本学士院会員
- 小松左京 作家
- 東畑精一 東京大学名誉教授  
政策科学研究所顧問
- 中山伊知郎 (故人)
- 松本重治 国際文化会館理事長
- 向坊 隆 前東京大学総長
- 加藤秀俊 学習院大学法学部教授
- 宮本常一 (故人)
- 米山俊直 京都大学教養学部助教
- 加藤芳郎 漫画家協会理事
- 青空うれし テレビタレント
- 青空はるお テレビタレント
- 天地総子 歌手 タレント
- 大山のぶ代 俳優
- 大和田獏 俳優
- 岡久美子 俳優

- 加治 章 NHKアナウンサー
- 川野一宇 NHKアナウンサー
- 小島 功 漫画家
- 砂川啓介 俳優
- 鈴木義司 漫画家  
漫画家集団所属
- 田崎 潤 俳優
- 檀 ふみ 俳優
- 坪内ミキ子 俳優
- 富田純孝 NHKディレクター
- 中田喜子 俳優
- 藤目 良 俳優
- 水沢アキ 俳優
- 三橋達也 俳優
- ロミ山田 歌手 俳優
- 渡辺文雄 俳優
- 茅誠司 部会
- 茅 誠司 東京大学名誉教授  
日本学士院会員
- 有澤廣巳 東京大学名誉教授  
日本原子力産業会議会長  
日本学士院院長
- 生田豊朗 日本エネルギー経済研  
究所所長
- 稲葉秀三 産業研究所理事長
- 内田忠夫 東京大学教養学部教授
- 大島恵一 東京大学工学部教授
- 岡村和夫 NHK解説委員
- 尾関通允 著述家 自由学園講師

- 金森久雄 日本経済研究センター  
理事長
- 木元教子 放送キャスター
- 五代利矢子 評論家
- 斉藤志郎 日本経済新聞アジア総  
局長
- 三枝佐枝子 評論家  
商品科学研究所所長
- 高原須美子 評論家
- 富舘孝夫 日本エネルギー経済研  
究所研究部長
- 中村 貢 朝日イブニングニュー  
ス社代表取締役社長
- 永井陽之助 東京工業大学教授
- 橋口 収 公正取引委員会委員長
- 深海博明 慶応義塾大学経済学部  
教授
- 伏見康治 名古屋大学・大阪大学  
名誉教授 日本学術会  
議会長
- 松根宗一 大同特殊鋼相談役 経  
済団体連合会常任理事
- 村田 浩 日本原子力研究所顧問
- 小松左京 部会
- 小松左京 作家
- 河合秀和 学習院大学法学部教授
- 中村隆英 東京大学教養学部教授
- 大来佐武郎 部会
- 大来佐武郎 対外経済関係担当政府  
代表 日本経済研究セ  
ンター理事・顧問

- 江藤 淳 評論家  
東京工業大学工学部教授
- 河合三良 国際開発センター理事長
- 北原秀雄 前駐仏大使 西武百貨店  
顧問
- 木田 宏 国立教育研究所所長
- 小林陽太郎 富士ゼロックス株式会社  
社長
- 篠原三代平 成蹊大学経済学部教授
- 滝田 実 アジア社会問題研究所  
理事長
- 堤 清二 西武百貨店会長 西友  
ストアー社長
- 中根千枝 東京大学東洋文化研究  
所所長 国際人類学民  
族学会副会長
- 林雄二郎 未来工学研究所副理事  
長
- 松山幸雄 朝日新聞論説委員
- ロベール・J・パロン 上智大学経済学部教授
- 松本重治 部会
- 松本重治 国際文化会館理事長
- 川喜田二郎 筑波大学教授
- 永井道雄 朝日新聞客員論説委員
- 中村 元 東方学院院长  
東京大学名誉教授
- 本間長世 東京大学教養学部教授
- 前田陽一 国際文化会館専務理事  
東京大学名誉教授
- 榎 文彦 東京大学工学部教授

- 武者小路公秀 国連大学プログラム担  
当副学長
- 村上兵衛 日本文化研究所専務理事
- 柳瀬睦男 上智学院理事長
- 国際交流研究部会
- 遠山 一 ダーク・タックス 歌手
- 喜早 哲 ダーク・タックス 歌手
- 佐々木行 ダーク・タックス 歌手
- 高見沢宏 ダーク・タックス 歌手
- 石井好子 歌手
- 小林道夫 チェンパロ奏者
- 佐賀和光 建築家
- 佐々木信也 スポーツキャスター
- 千 宗室 裏千家家元
- 堤 清二 (大来佐武郎部会の欄に  
同じ)
- 富田 勲 シンセサイザー作曲・  
演奏家
- 服部克久 作曲家
- 松原秀一 慶応義塾大学文学部教授
- 三村忠良 日本国有鉄道職員局労  
働課長
- ミルトン・L・ラドミルビッチ  
アメリカ公立アメリカ  
ンスクールビジネスマ  
ネジャー
- 村上兵衛 (松本重治部会の欄に同じ)
- 山城祥二 芸能山城組組頭 筑波  
大学講師
- 吉川 光 NHK整理部担当部長

## 事務局

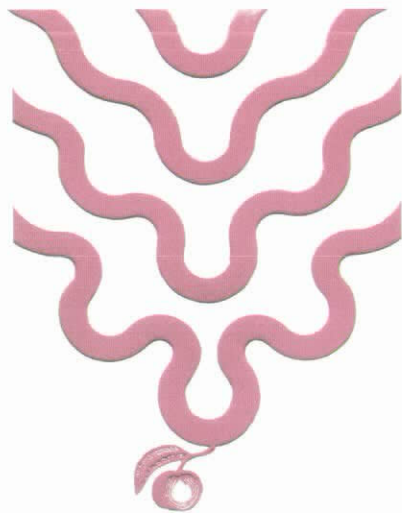
- 笠井章弘 政策科学研究所理事長
- 生田豊朗 (茅誠司部会の欄に同じ)
- 依田 直 東京電力企画室長
- 山田 嗣 政策科学研究所主任研  
究員
- 村野京一 (株)二十一世紀企画
- 発行所  
発行 一九八一年三月三十一日  
発行人 笠井 章弘
- 発行所  
21世紀フォーラム事務局  
東京都千代田区水田町二の二〇  
の二 秀和水田町TBR六〇一  
(株)二十一世紀企画内  
電話〇三・五〇八・六二五
- 編集  
21世紀フォーラム事務局  
印刷  
(株)東京印書館



A POINT OF VIEW

# ストリート

深瀬昌久



〈表紙のことば〉 永井一正

「文化」をもって表わせば……果実、  
育まれ、実をつけ、熟す。園芸家の  
熟練の手に、豊かな収穫の祈りが込  
められているように、私たちの歩み  
が豊穡な文化の実りをもたらすよう  
に……。こんな祈りにも似た気持ちを  
表わしてみました。

私の白いレリーフ作品の一つです。